月に喘ぐ

sadaka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月に喘ぐ

【Ｎコード】
Ｎ７７８５Ｆ

【作者名】
ｓａｄａｋａ

【あらすじ】
天空に紅い月が浮かぶことから名付けられた、赤月帝国。王政のこの小国は長く平和な時代が続いていたが戦渦は間近に迫ってきていた。忠誠、友情、信念、それぞれの想いを胸に少年達は祖国の危機に立ち向かった。

夜空に浮かぶは赤い月（1）

天空に紅い月が浮かぶことから名付けられた、赤月帝国。大陸の東南に位置する王政のこの国は歴史が古い。

他国の歴史を見るに、世襲制の王国というものは大抵が長続きしない。後継者争いで国が乱れたり、他国の侵攻に失敗して衰退してしまったりと、その例は様々である。赤月帝国もまた世襲制の王国であるが他国に見る失敗を犯したことは一度もなかった。それは様々な要因が複雑に絡み合った結果なのだが、最大の理由は赤月帝国という国が建国された特殊な条件によるものだろう。

この頃毎夜訪れることになっている書庫へ足を運ぶと、そこには恒例の姿があった。小さな灯りに映し出されている背中に向けて、海雲（かいうん）は声を掛ける。

「また来てたのか」

背後から突然声を掛けられたにもかかわらず、少年は動じた様子もなく振り返った。海雲と同じ年頃の彼の名はサイゲートという。

海雲がいつ書庫を訪れたのか、おそらくサイゲートは気付いていない。だが根性が据わっているのか安心しきっているのか、サイゲートは最初からこうだった。

「お前がいつ来てもいいって言ったんじゃん。いいとこだったのに、

ジャマすんなよな」
　サイゲートが邪険に言い捨てて再び本に目を落としたので海雲はムッとした。
「確かに来てもいいとは言ったけど、昼間は絶対に来るなよ。見付かって怒られんのは俺なんだからな」
「わかってるよ、うるさいな。だからこうして夜に来てるんだろ」
「お前ね、誰のおかげで貴重な本が読めると思ってんだ？」
「わかってるって言ってんだろ」
「それがお前の感謝の態度なのかよ」
　海雲が怒りを孕ませながら言うとサイゲートはようやく本から目を上げた。しかし謝るでもなく、サイゲートは海雲に手招きをして言外に来いと言う。
「なあ、これってどういう意味なんだ？」
　サイゲートの口調は先程まで口論していたことなど忘れたかのようであり、海雲は呆れた。小さくため息をつきつつ、海雲も態度を改める。サイゲートが指している部分を流し読みした後、海雲は説明を始めた。
「昔、戦争で住む場所を追われた誰かがこの地に辿り着いた。ここは廃墟になってはいたが過去に人間が生活していた跡がそのまま残っていたから、そいつらはこの地に住み始めた。戦火から身を隠すにはもってこいの場所だったからな。それが、俺達の祖先だ」
「じゃあ、この里はいつ出来たんだ？」
「同じように戦火から逃げ延びた人々が噂を聞き付けてこの地に集まって来た。人間が増えると、それをまとめる者が必要になってくる。だから、最初に移住して来た者達が後から来た者達をまとめるような立場になった。それが王政の始まりだと言われている。建国の最中で戦火から身を守るための自衛団みたいな連中が組織されたらしくて、それが白影の里の始まりって訳だ」
「……へえ。物知りだな」
「当たり前だ」

「本読んでてもムズカシイ字ばっかで、あんまわからないんだ。やっぱ海雲に聞いた方が早いかも」
諦めたように息を吐き、サイゲートは手にしていた本を閉ざした。本を元の場所に戻してから、サイゲートは海雲を振り返る。
「なあ、この里の人は誰でも、海雲みたいに知ってるのか？」
「俺みたいなって……どういう意味だ？」
「自分たちが暮らしてる国の歴史を知ってるかってこと」
「ああ。子供は物事を理解出来るようになる前から様々な情報を叩き込まれる」
「ふうん……。街とはちがうんだな」
「そりゃ、一応軍隊だからな」
「そっか」
話を打ち切って、サイゲートは歩き出した。書庫の出口へと向かって行くサイゲートの姿を目で追いながら、海雲は声を投げる。
「帰るのか？」
「太陽がのぼったら仕事だから」
振り向いたサイゲートは微苦笑のような笑みを浮かべ、そう答えた。一見溌剌として見えたサイゲートの笑顔が歪んでいるように思うようになったのは、いつからだろう。海雲はそんな事を考えながらサイゲートが去った書庫の出入口を見つめていた。

家人が寝静まっているはずの深夜、サイゲートは猫のような身のこなしでこっそり自室へ戻った。窓から室内に侵入したサイゲートは足音を立てないよう気を配りながらベッドに移動する。しかしまどろみかけた頃、サイゲートは家の中から聞こえてきた破壊音で目が覚めた。

「一体何時だと思ってるの！！」
「うっさいな！　そんなこと言うために起きてたわけ！？」
深夜の静寂に似つかわしくない喧騒は、この家の母娘のものである。女達の金切り声は毎夜くり返されている光景を彷彿とさせ、サイゲートは欠伸を零しながら寝返りを打った。
神経質な母親に年頃の娘、何も言わない父親。世間では戦が続いているというのに、呑気なものである。だがそれはサイゲートの家に限ったことではなく、赤月帝国は平和なのだ。サイゲート自身、海雲（かいうん）と出会うまでは世界情勢など考えたこともなかったのだから。
（……人間ってフシギだよな。平和なのに争いが起きるんだから）
赤月帝国の平和が誰のおかげで成り立っているのか、そのようなことを考えたことのある人間は少ないだろう。そう思うと海雲たちが少し可哀相になったが何も知らなかったのは自分も同じなので、サイゲートは頭まで上掛けをかぶって目を閉じた。

夜空に浮かぶは赤い月（2）

その日、定期報告のために朝から王城を訪れていた海雲（かいうん）は花々の咲き乱れる庭先で足を止めた。

「先に行っていてくれ」

同行して来た者達に言い残し、海雲は庭へと歩を進める。その場所で剣を振っているのは海雲とさほど歳の違わない少年だ。

「王子、ご機嫌麗しゅう」

海雲がわざと堅苦しい挨拶をすると、少年は嫌な顔をしながら振り返った。

「やめてくれ。そんな挨拶は耳に胼胝（たこ）が出来る」

苦い表情ながらも砕けた口調で応じる少年の名は、アゼル。彼は赤月帝国の次期王位継承者である。

「元気そうだな、アゼル」

海雲が言葉遣いを改めるとアゼルも笑みを見せた。アゼルは手にしている剣を一振りし、海雲に挑戦的なまなざしを注ぐ。

「少し、相手をしてくれないか？」

「王の下へ行く途中なんだが……まあ、少しならいいか」

「それでこそ海雲だ」

爽やかな笑みを浮かべ、アゼルは威勢良く走り去って行った。アゼルに待っているよう言われた海雲は小さく息を吐きながら視線を泳がせる。王城の庭に咲き乱れている花は美しく、赤月帝国は今日も平和である。だが海雲が王に報告しようと思っている事柄の中には、一つの懸念が存在していた。

城内に姿を消していたアゼルが庭へ戻って来たので海雲は思考を切り上げて顔を傾けた。アゼルは自身が使っていたものとは別の剣を手にしており、一本を海雲に差し出す。剣を受け取った海雲はすぐに鞘を捨て、構えをとった。

「菜の花姫もお変わりないか？」

一定の距離を保ったまま海雲が雑談を始めるとアゼルも構えながら応じる。
「ああ。白影の里へ行きたいと毎日侍従を困らせている」
「姫は里がお好きだからな。先日のご訪問の際にも、随分と珍しがっておられた」
「初めて行く訳でもないのに、懲りない奴だ」
「危険な物も置いてあるからな。姫が怪我をされないよう、皆必死で気を配っていたよ」
「すまないな。里の者達にも詫びておいてくれ」
「詫びる必要などない。皆、姫がいらっしゃるのを楽しみにしている」
「父も菜の花には甘いからな」
「姫が可愛くて仕方ないのだろう。お気持ちは、解らないでもない」
そこで話を切り、海雲から動いた。海雲が上段から斬りこんでいったのに対し、アゼルは躱して距離を取る。アゼルが飛び退いたのを見た海雲は動きを止めてニヤリと笑った。
「気を抜くと痛い目見るぜ？　王子相手でも手加減はしない主義なんだ」
「……菜の花が白影の里に行きたがるのは里が好きなだけじゃない」
突然、アゼルが脈絡のない話を始めたので海雲は眉をひそめた。
「何だ？　何か別の理由でもあるのか？」
「どうやら、白影の里に恋焦がれる人物がいるらしい」
「は？」
アゼルが言い出したことが突拍子もないことだったので海雲は思わず間延びした声を返す。刹那、アゼルがニッと笑った。
「隙あり！」
「うわっ！！」
間一髪でアゼルの攻撃を躱した海雲は均衡を崩し、地面に倒れこむ。その様を見たアゼルが笑い声を上げた。
「お前が地に伏す姿は久し振りに見たな」

「……っ、きったねー！！」
叫びながら飛び起きた海雲は剣を投げ捨ててアゼルに詰め寄った。怒気を孕んだ低い声で、海雲はアゼルに不満をぶつける。
「王子ともあろう御方がこのような卑劣な手段を用いてよろしいと思っていらっしゃるのか」
「悪い悪い。だが、先程の話は本当だ」
本当に悪いと思っているのかは疑わしかったが、アゼルから一応謝罪の言葉を頂戴したので海雲は表情を改める。
「姫のことか？」
「ああ。まったく、厄介な奴に好かれたものだ」
「好かれた方は幸せなんじゃないか？　一国の姫君だぜ」
「肩書きは関係ない。問題は性格だろう」
「そうか？　姫は容姿端麗でいらっしゃるし、性格も特に悪くはないと思うが」
「そう思うのなら、幸せにしてやってくれ」
「は？　……あっと、」
城内からの呼び声に気がつき、海雲は視線を移して顔をしかめた。いつの間にか先に行っていろと言った者達が戻って来ており、海雲に役目を果たすよう促している。夢中になっているうちに相当時間が経過したようだと反省しながら、海雲はアゼルに顔を戻した。
「じゃあな。話はまた今度だ」
「用事が済んだら部屋の方へ寄ってくれ。時間があればでいい」
「わかった」
アゼルに別れを告げ、海雲は急いで庭を後にする。同行者達と共に謁見の間へ入室すると王はすでに着座していた。通常、謁見を願い出た者が先に跪いているのが礼儀だが王を待たせてしまったようである。海雲は跪いて臣下の礼をとり、謝罪を述べた。
「遅くなりましたこと、お詫び申し上げます」
「頭を上げよ。アゼルとそなたは良き友人、顔を合わせたのなら話をしたくもなるだろう」

別段責めている様子もなく、王は海雲を促した。前王は気が短かったと聞いているが、現在の王は寛大である。ただ少し気の弱い処が見えるのが、欠点と言えば欠点だろう。そんなことを考えながら海雲は頭を上げた。

「はい。つい話しこんでしまい謁見に遅れましたこと、重ねてお詫び申し上げます」

「なんでも、剣の稽古まで付き合わされたそうではないか。礼を言わなければならないのはこちらのようだ」

王が笑みを見せたので海雲も少し笑んだが、すぐ真顔に戻る。同行者達をも下がらせた後、謁見の間に他者の姿がないことを確認してから海雲は口調を改めて本題を切り出した。

「大聖堂（ルシード）という存在をご存知ですか？」

短い言葉でも海雲の意図は伝わったようで、王は少し眉根を寄せながら応じる。

「そなたの手の者からある程度の報告は受けている。驚異的な速さで領地を広げているな」

大聖堂という組織は不特定多数の宗教を束ねる、言わば信仰の拠り所とされている存在である。未だ治まらぬ戦争が続くなか、立場の弱い庶民は苦しみから救われようと神を求めてきた。だが多くの国が決起を促すような集団を認めはしない。そうして弾圧された信者達が寄り集まった結果が大聖堂だと言われているが、その成立がいつなのかはっきりしていない。大聖堂には謎が多いが今はそのことには触れず、海雲は報告を続けた。

「覇権争いとは縁遠いと思われる者達でしたが有力な各国で宗教が弾圧されるに従って民草が大聖堂に流れ込んでいるもようです。当初は自衛のために戦いを始めたようですが、現在では明らかに侵略と思われる行為を重ねています」

「それでは、軍事的な組織が整ったと？」

「そのようです。信教や宗派にかかわらず、信仰を心に抱く人々が寄り集まって一つの国を形成しております」

「自然に人が集まったにしては速すぎるな。元々ある程度の体制は整っていたのではないか？」
「聖女と呼ばれる存在が中枢に位置していることは判明していますが、それ以上はまだ」
「そうか。彼等は何を目的として戦っている？　自らの国を護るという大義名分は、もはや行動と伴っていないと見受けられるが」
「おそらくは、あまりに多くの民が戦火を避けて集まったため領地が足りなくなったのではないかと」
どの国の民でもない流民は、日々膨大な数を排出している。監視を厳しくしている赤月帝国にすら、辿り着いてしまう者がいるくらいなのである。海雲がそう補足すると王は嘆息した。
「海雲よ、彼等の強さは何だと思う？」
中央の争いに参戦してからの大聖堂は、負け知らずできている。策も陣形もなく、ただ数を頼りに戦うだけの彼等が、それでも負けない理由は……。王の疑問に答える言葉を探していた海雲は複雑な思いを抱きながら口を開いた。
「兵には、女子供や老人まで混じっていると聞きます。戦わなくては生きていけない、そういう世の中なのでしょう。他宗教同士は本来対立しやすいものですが信仰として一つになり、強く結びついています。私には宗教はよく解りませんが兵は皆、死をも恐れず鬼の形相で立ち向かうのだとか」
争いは人間を悪鬼に変える。赤月帝国内にいるとそのような風潮は嘘のように感じられるが、それが現実なのである。海雲は王に知れないよう小さく息を吐き、表情を改めた。
「いずれにしても、大聖堂にはこれからも注意を払う必要があります」
「わかった。目を離さないでいてくれ」
渋い顔のまま頷く王に一礼して、海雲は謁見の間を後にした。

夜空に浮かぶは赤い月（3）

謁見の間を後にした海雲は同行して来た者達に各々指示を伝え、それからアゼルの部屋を訪問した。アゼルは広い部屋の窓辺で読書をしていたが、海雲に気付いて顔を上げる。

「父に怒られたか？」

「いや、王は寛大な御方だ」

「少し、気が弱いがな」

「欠点のない人間などいない。そのくらいのことなら、可愛いものだ」

「それを平和呆けと言わなければよいのだが」

自身の父に対して、アゼルの言葉は少々辛辣であった。赤月帝国は平和な時間が長すぎた、アゼルがそう言っていることを察した海雲は臣下として感じている王の評価を口にする。

「王も、何も考えておられない訳ではない。その証拠に、御自身でも間者を放ち情報を集めておられる」

「初耳だな。だが、国民に戦乱の世だという実感がなさすぎる」

「攻められても、天然の要塞が護ってくれる。それに、そんな時のために白影の里があるんだ」

「失言かもしれないが、俺はあまり白影の里にばかり頼るのはどうかと思う。戦になった時、己の身は己で守るくらいの覚悟が必要だ」

「道理も通っているし、その分危険も少なくなる。だが、そういうことは俺より王にお話しすべき事柄じゃないのか？」

「実は、近々進言するつもりでいた。その前に、筋の通らないことがあればお前に指摘してもらおうと思っていた」

少し照れくさそうに頭を掻くアゼルに、海雲は笑みを浮かべた。王子としての責任もあるだろうが、アゼルはそれ以上に父親思いなのである。

「その意見を聞かせるために俺をここへ呼んだのか？」

「それもあるが……今日はどのくらい時間がある？」
「夜までに里に戻ればいい」
「それならば、街へ行かないか？」
「それは構わないが……」
「羽目を外したりはしない、安心しろ」
「……だから、そんな格好で待っていたのか」
部屋に入って来た時からアゼルの服装がおかしいとは思っていたのだが、相変わらず彼は用意周到である。海雲の零した苦笑いを躱すように、アゼルはサッと立ち上がった。
「さあ、煩いのが来る前に行くぞ」
海雲の横をすり抜け、アゼルは足早に居室を出て行く。後を追いながら、海雲はアゼルの背中に声を投げた。
「うるさいの？」
「海雲が来てるの！？　何処！　何処！？　……と、騒いでいる奴がいたからな」
先導するように前を歩いているアゼルがわざわざ『うるさいの』の真似をしながら答えたので海雲は呆れながら応じる。
「姫か」
「ご名答」
「そういえば、会ってないな。一言くらい挨拶してから行くか」
「やめておけ。話が長くなるだけだ」
ため息混じりのアゼルの言葉に続き、背後からバタバタという音が聞こえてきたので海雲は足を止めて振り返った。海雲達の後方、王城の廊下に姿を現したのは渦中の人物である。アゼルの妹である菜の花姫は海雲を発見するなり嬉しそうな声を上げた。
「あ！　海雲！！」
「見付かったか。走れ、海雲！」
菜の花の姿を認めるなり、アゼルは海雲の腕を引いて走り出した。遠くから菜の花が何か叫んでいるが、よく聞き取れない。海雲は全速力で廊下を駆け抜けるアゼルに呆れながら話しかけた。

「なにも、逃げなくてもいいんじゃないか？」
「アイツの長話に付き合っていたら日が暮れてしまう。走れ走れ」
アゼルは妹姫から逃げ出していることを城からの脱出と同じように楽しんでいるらしい。もはや返す言葉もなかった海雲は苦笑を浮かべながらアゼルに従った。

森で作業をしていたサイゲートは先程まで振るっていた斧を傍らに置き、自身が切り倒した木の切り株に腰を下ろして滴る汗を拭った。太陽が上ってから『木を倒す』という作業を続けているが、そろそろ日も傾いてきたので間もなく仕事も終わりだろう。サイゲートの周囲では同じように斧を振るっている仕事仲間がいて、彼らはまだ作業を続けている。そのうちの一人に目を留め、サイゲートは自身の父親代わりである男の働く姿を見つめた。
サイゲートの養い親である親方は、気が弱い。神経質な妻とは何か反りが合わないようで、親方は毎日のようにどやされている。そんな時、彼はいつも黙ったままでいるのだ。口では言い負かされるのがわかっているのか、反論一つせず静かなものである。そのおかげで言い争いは、いつも一方的に妻が金切り声を上げるばかりで終わる。それでスッキリするのか、口論の後の妻は上機嫌だが逆に親方はストレスを溜め込んでいるらしい。そんな親方も、仲間うちで酒を飲んでいる時だけは愚痴を零す。何を言われても何も感じていないように見えるが本心では相当頭にきているようだ。けれど直接不満を口に出せないから、酒を飲んではストレスを発散している。
（なんで一緒になったんだろ？）
傍観者であるサイゲートが思わず首を傾げてしまうほど、夫婦仲

は冷え切っているように見える。それでも、昔は仲が良かったのかもしれない。だがそれは、サイゲートの知り得ない過去のことだ。
「サイゲート！　休んでんじゃねえ！」
「あ、はい。今やります」
怒声が飛んできたのでサイゲートは物思いを断ち切った。一日の疲労がそろそろ顔を出し始めた体に鞭打ち、切り株の脇に置いてある斧を持ち上げる。顔を上げたサイゲートはふと、森の中に見知った姿を見たような気がして目を凝らした。
「なに、してんだ？」
「親方。今、知り合いがいたような気がして……」
声をかけてきた親方に顔を向けた後、サイゲートは先程人影があった方向を振り向いた。しかしそこには誰の姿もなく、森は静寂を保っている。サイゲートが森の奥を見ていたので親方は眉根を寄せた。
「見なかったことにしろ」
素っ気なく言うと親方はすぐ仕事に戻ってしまった。彼が知らぬ振りをしろと促したのは、サイゲートが見ている方向が立入禁止区域だからである。そのような場所を行き来するのは要人か、禁を犯した者なのだ。どちらにせよ関わるなと、親方は言っているのだった。
サイゲートにとって立入禁止区域である森の奥は、近頃毎晩のように通っている道だった。その場所へ行くことが当たり前となってきていて密かな逢瀬であることを失念しそうだが、こうした瞬間には禁を犯しているのだと改めて思い知らされる。サイゲートはもう一度だけ森の奥を振り返り、そこに誰の姿もないことを確認してから木材を運んでいる仲間の元へ戻った。

夜空に浮かぶは赤い月（4）

国内のほぼ中央に位置している城を抜け出した海雲とアゼルは所用で一度白影の里へ立ち寄った後、王城の周囲に展開する街へと繰り出した。夕方の賑わいに包まれたアゼルは嬉しそうに伸びをする。

「たまにはこうして息抜きをしないとな。城は肩が凝る」

「たまには、じゃないだろ？」

些細な言い違いだが意味が大きく変わってくるアゼルの一言を聞き逃さず、海雲は呆れながら突っ込みを入れた。王城を出た途端、すれ違う人々が一様に頭を下げてくる。それは滅多に国民の前に姿を現さない王族の中でアゼルだけがしょっちゅう街へ足を運んでいるからだ。

「俺の顔くらい、誰でも知っているさ」

平然とシラを切るが、おそらくアゼルも白影の里の者が護衛に着いていることくらい承知しているのだろう。だからといって供回りも連れずに出掛けるのはやめてもらいたいと、海雲は小さく息を吐いた。

「父ももっと子供をつくればいいのにな」

ふと、アゼルがそんな科白を零した。考えていたことがあまりに違っていたので海雲は驚いた。現国王には正妻の他に側室が二人ほどいるが、子供はアゼルと菜の花だけである。

「王位を継ぐのが嫌なのか？」

「嫌とは言っていない。ただ、何があるか分からないのだ、子供は多いに越したことはない」

図星だったのか、アゼルは苦笑しながら弁解混じりのことを言う。海雲もアゼルの心情にそれ以上深入りすることはせず、話を合わせた。

「後継者争いを心配しておられるのかもしれないな」

「そうかもしれないな。この国に前例はないが、外では多くの国が

それで滅びているのだろう？」
　アゼルが伝え聞いた内容を確認するように問いかけるので海雲は慎重に頷いた。国の繁栄よりも特殊な目的で建国された赤月帝国の王達にその心配があるとは思えないが、それでも王も人間（ひと）の子である。絶対に有り得ないと、断言するのは危険すぎるのだ。
「用心深いに越したことはない。いい王じゃないか」
「まあな」
　海雲に父を褒められたことが嬉しかったようで、アゼルは少し照れくさそうな笑みを浮かべた。それでいて、アゼルのはにかんだ顔には誇らしさも滲み出ている。海雲も微笑みを返したが、内心では少し羨ましいと思っていた。
「さて、酒場にでも行くか」
　夕陽に染まった街を眩しそうに見渡し、アゼルはそんな提案をした。毎度のことではあるのだが、海雲は一応釘を刺す。
「あまり飲むなよ。俺が王に怒られる」
「心配するな。領分は弁えているつもりだ」
　話をしながら歩いていると、路上で遊ぶ子供達の姿が目に留まった。細い木の枝を使って打ち合いをしている姿に気を良くしたらしく、アゼルが子供達の傍へ寄る。
「そんな構えじゃ駄目だ。もっと腰を低くして力を入れる」
　突然声を掛けられた子供達はビックリしたようだったが、相手が誰だか判ると途端に笑みを見せる。
「王子さま！」
「王子さま！　剣の使い方を教えてよ！」
　無邪気にはしゃぐ子供達の声に、周囲の視線が集まった。アゼルは女子供に人気があるので、特に彼らを中心に人の輪が形成されていく。自身も輪の内に取り込まれた海雲はまた長くなりそうだと思いながら小さく肩を竦めた。

その日の仕事を終えたサイゲートは酒場に行くという仲間達に連れられて夕暮れの街を歩いていた。すでにあちこちの家から煙が立ち上り、街は夕餉の香りに包まれている。誰かの腹が盛大に鳴ったので仲間内で笑いながら歩いていると、前方に人だかりがあった。

「何の騒ぎだ？」

仕事仲間が興味本位で近づいて行ったので、サイゲートも続いた。人だかりを構成しているのは主に女子供で、サイゲートは背伸びをして輪の中心にある物を窺う。そこには木の枝を武器代わりにしている子供達と、指導しているような少年の姿があった。

「ああ、ありゃ王子だな」

隣にいた仕事仲間がつまらなさそうに言ったのでサイゲートは驚いた。街中によく姿を見せると聞いてはいたが、実際に見るのは初めてである。人垣に遮られてよく見えない少年の顔を見ようと、サイゲートはさらに背伸びをした。

（あれが、王子……）

輪の中心にいる少年は質素な格好をしているが、それでも周囲の庶民とは違う。端正な顔つきにはどこか威厳のようなものが漂っていて、それは笑顔にも見てとれた。

「俺らみたいな庶民とは住む世界の違う人だ」

「ちっ、おもしろくねえ」

「行こうぜ。時間の無駄だ」

口々に悪態をつきながら、連れが輪から外れて行く。それでもサイゲートは目が離せず、子供に笑いかけている王子の姿を見つめていた。

「おい、行くぞ」

「あ、はい」

もう少し見ていたかったのだが親方に促され、サイゲートも仕方なく踵を返す。しかし王子が発した一言に、再び動きを止めた。
「海雲、お前も来いよ」
サイゲートにも馴染みのある名が王子の口から出た途端、足が地面に張り付いたように動かなくなってしまった。背にしている人だかりから聞き慣れた声も聞こえてくる。
「そろそろ行きましょう。もうすぐ日が落ちます」
聞こえてきたのは紛れもなく海雲の声だった。サイゲートは人だかりを振り返り、再び背伸びをして輪の中心を見る。それまでは王子を囲んでいる群衆に混じっていたのか、そこには海雲の姿もあった。
海雲は王子と親しそうに、何かを話している。たったそれだけの事なのにひどくいたたまれない気持ちになり、サイゲートは顔を歪めながらその場を立ち去ろうとした。しかし海雲がちょうど振り向いたので、目が合ってしまう。
「何やってんだ、行くぞ」
わざわざ呼びに戻って来てくれた親方に再度促されたので、サイゲートは海雲から目を逸らして人混みに背中を向けた。

夕暮れの街で知った姿を偶然見かけたので、海雲は声をかけようと思って唇を開きかけた。目が合ったので相手もこちらを認識していたはずなのだが、輪の外にいた彼は逃げるように立ち去っていく。喉元まで出かかった名前を飲み込んで、海雲はアゼルを振り返った。
「王子、そろそろお戻りになりませんと王も心配なさいます」
「そうだな……そろそろ帰るか」

いつもは渋るアゼルもアッサリ頷いて、子供達と民衆に別れを告げて人混みを離脱する。もう酒場へ行くような気分でもなくなっていたので海雲は王城へ足を向けながらアゼルに話しかけた。
「今日はやけに早く納得したな」
「海雲、何かあったのか？」
「……何故？」
「顔が強張っている」
アゼルに指摘されて初めて、海雲は眉根を寄せていたことに気が付いた。表情を改めて一つ咳払いをした後、海雲は弁明する。
「いや、人混みに知り合いがいたようでな。目で追っていたら自然とあんな顔になった」
「里の者か？」
「いや」
「声を掛ければ良かっただろう」
「それが、逃げられた」
「逃げられた？　女か？」
「違う」
「まあ、そう怖い顔をするな。きっと、むこうにも事情があったのだろう」
「事情、ね……」
いつもなら苦笑いを浮かべる場面だが、海雲はそのことも失念して真顔のまま呟いた。確かに、誰かが彼を呼んでいたような気もする。だがそれにしても、あんな風に逃げ去ることはないだろう。それも、気にしてくれと言わんばかりの表情を置き去りに。
「……顔、強張っているぞ」
アゼルが同じ科白を繰り返したので海雲はハッとして苦笑いを浮かべて見せた。

夜空に浮かぶは赤い月（5）

赤月帝国は領土のほぼ中央に王城があり、その周囲に街が広がっている。領土の四方は切り立った崖や深い森に囲まれていて、それゆえ赤月帝国は天然の要塞に護られているのだ。赤月帝国を抱くように広がっている広大な森は『かげろうの森』と言う。そしてかげろうの森の一部分だけを切り取って『彼岸の森』と言い、白影の里はこの森の内に位置しているのである。

その日、海雲は彼岸の森に誤って街の人間が迷い込んだという報せを耳にした。赤月帝国を外界と遮断しているかげろうの森は天然の迷路になっているのだが、加えて白影の里がある彼岸の森には罠が仕掛けられている。そのため、術を知らない人間が迷い込むと非常に危険なのだ。だが彼岸の森は街の一部と接しており、狩りをする者や樵などの生活の場となっている。そのため完全ではないのだが立入禁止令が出ており、街の人間がそれを守ることで今まではうまくやってきた。そのような歴史があるため、街の人間が迷い込むなど異例中の異例だったのである。

外敵ではなく街の人間だというところに興味を惹かれ、海雲は単身遭難者の元へ赴いた。白影の里の者にとって彼岸の森は庭のような場所なので、簡単に移動が出来るのである。だから海雲にとって、森の中を彷徨う異端者を発見するのは容易いことであった。

鬱蒼と茂る樹木の上で身を潜めていた海雲は侵入者の姿を認めると樹から飛び降りた。そのような場所から人が降ってくることなど思いも寄らなかったのだろう、侵入者は歩みを止めて呆然と立ち尽くしていた。だが彼は、すぐに平静を取り戻して怒り出したのである。

『なんだよ、お前！』

『それはこっちの科白だ』

初めて交わした言葉がそれ、である。威勢の良い相手に海雲も興奮してしまい、しばらくの口論のすえ結局ケンカになった。
白影の里の者は誰もが殺人術を会得しているが、相手が普通の人間だったので海雲もまともなケンカで対抗した。すると相手は意外に強く、思わず本気で倒してしまった。慌てて里に運び入れ、それがサイゲートとの関係の始まり。
（……あの時は、殺したかと思って焦ったよな）
それなのに、目を覚ましたサイゲートはぴんぴんしていた。さらに、喋ってみると憎たらしい奴だったのである。
（でも、楽しかった）
普通にケンカが出来る相手など、今でもサイゲートくらいなものである。サイゲートが勉強をしたいと言うので、海雲は里の者でも一部の人間しか入れない書庫まで解放してやった。それなのに、
「来ないとはどういうことだ」
燭台の灯りが仄かに周囲を照らすだけの薄暗い書庫で頬杖をついていた海雲の口から、思わず独り言が零れた。返事を得ようもない独白はすぐ、夜のしじまに呑み込まれていく。
夕暮れの街で偶然に出会った時以来、サイゲートがこの書庫へやって来る気配はない。何が気に入らなかったのかは分からないが、毎晩見張りを兼ねて書庫まで足を運んでいることが馬鹿らしく思えてくる。海雲は憤慨したまま立ち上がり、人気のない書庫を後にした。

今宵も隣室で繰り広げられている夫婦間、親子間の争いの声を聞

きながらサイゲートは床に寝転んでいた。罵声を耳にするのは毎度のことだが、よく飽きもせず同じような内容で口論が出来るものである。

（ケンカ……か）

その単語から連想される人物は一人しかなかった。サイゲートの脳裏には自然と、夕暮れの街で見掛けた光景が蘇る。街中に姿を現した王子と海雲が親しそうにしていた、あの日の出来事だ。

『俺らみたいな庶民とは住む世界の違う人だ』

仕事仲間が零していた愚痴のような言葉が、また聞こえた気がした。続いて、親方が酒に酔いながら言っていた科白も浮かんでくる。

『いいご身分だよな。俺もああいう所に生まれたかったぜ』

王子を目の当たりにした仕事仲間達は他にも様々なことを言っていたが、そのどれもが強い羨みを含んでいた。また、どうにもならないことを妬んでいるかのようでもあった。

横たえていた体を仰向けにし、サイゲートは瞼の上を腕で覆った。すると月の光も見えない暗闇の中で、脳が覚えている王子の姿がぼんやりと浮かび上がってくる。

（王子って、やっぱりちがうんだな）

彼は常に光の当たる世界にいる人間だ。その証拠に多くの人を集められて、好かれて、羨まれている。自ら誇示していなくとも人々に強烈な存在感を与える人物の顔は、やがて別の人物の顔へと変わっていった。

（そんな人と、一緒にいられるんだな）

瞼の裏に浮かび上がった海雲に向かい、サイゲートは胸中で語りかけた。

海雲は赤月帝国の軍隊である白影の里の者なので、王城に出入りするのは当たり前のことなのかもしれない。だがあの時、普段は身近な存在の海雲がサイゲートには遠い世界の人のように思えたのである。海雲と目が合った時、人の壁に隔てられた距離が遠かった。暗い世界にいる自分を見られるのが、嫌だった。

「お前の家、夜中だってのに随分うるさいな。いつもこうなのか？」
人知れず顔を歪めていたサイゲートは唐突に闇から沸いてきた声に驚愕し、慌てて体を起こした。赤い月明かりが差し込む窓辺に、いつの間にか人影がある。明りを背にしているので顔は見えないが、その声は紛れもなく海雲のものだった。
「ああ、勝手に邪魔したぜ」
驚きのあまり言葉が出ないサイゲートに向かい、海雲の声があっけらかんと言い放つ。彼は侵入口である窓を閉め、それから呆気にとられているサイゲートの傍へやって来た。
「まったく、平和ボケもここまでくると笑っちまうな。外では戦争が続いてるってのに、お前の家は緊張感がなさすぎだ」
「お、お前……」
「なんだよ。言いたいことがあるならハッキリ言え」
海雲は遠慮もなく、サイゲートの隣にどっかりと腰を落とした。そのあまりのふてぶてしさに少しずつ冷静さを取り戻したサイゲートは眉根を寄せる。隣室では未だ口論の声が聞こえるが一応夜も更けているので、サイゲートは声を抑えながら言葉を紡いだ。
「どうして家を知ってるんだ？」
「そんなの、赤月帝国内の地図は全部頭に入ってるからに決まってるだろ」
「白影の里って、そんなことまで知ってるのか」
「当たり前だ。調べようと思えば国内のことは何でも分かる」
「それで、こんな時間に何の用だよ？」
「お前、何で来ないんだよ？」
「は？」
海雲の返答が答えになっていなかったのでサイゲートはぽかんと口を開けた。海雲は小さく息を吐き、口調に不満を滲ませながら真意を明かす。
「知らないだろうから教えてやる。俺はお前が書庫に出入りするようになってから毎晩、見張りのためにわざわざ書庫まで行ってたん

だよ。毎日顔を合わせるのは偶然だとか思ってただろ？」
「……ヒマ人だと思ってた」
「……最悪」
顔がよく見えずとも、サイゲートには海雲が唇を尖らせてふてくされている顔が見えた気がした。一人待ちぼうけをくっている退屈そうな海雲を想像したサイゲートは声を押し殺して笑う。
「笑い事じゃないだろ。俺がしなくていい苦労をしてるのに、何で来ないんだよ」
海雲が話を元に戻したので笑いを収めたサイゲートは真顔に戻って尋ねた。
「それで、わざわざ家まで来たのか？」
「だってお前、街で会ったとき逃げただろ。声掛けようと思ってたのに何で逃げるんだよ？」
「あれは……親方に呼ばれたからだよ」
「親方って、あの気の弱そうな男か？」
「よく気が弱いって分かったな」
人垣で満足に見ることが出来なかっただろうに、海雲は一瞬目にしただけの親方の性格まで言い当てる。その洞察力には感服するより他なく、サイゲートは驚きを通り越して呆れてしまった。
「あれはどう見ても気の弱い顔だ。お前、あんな奴の下で働いてるのか？」
海雲の言葉が少々露骨だったのでサイゲートは隣室を気にして顔を傾ける。もう口論の声も聞こえないが、薄壁を隔てた隣には渦中の人物がいるのだ。
「気は弱いけど、悪い人じゃない」
サイゲートがいっそう声を抑えて答えると、隣室から一度は静まったはずの破壊音が聞こえてきた。サイゲートを取り巻く環境を揶揄していた海雲も、これには口を噤む。
「……凄まじいな」
破壊音が収まって後、海雲が小声で呟いた。海雲の言葉に対して

何の感慨もなく、サイゲートは頷く。
「いつものことだ。気にしなくていい」
「止めないのか？」
「誰もオレの話なんか聞かないよ」
感情のこもらない科白を、サイゲートは棒読みした。海雲が何かを言いたそうにしていたが、彼も結局何も言わずに閉口した。

夜空に浮かぶは赤い月（6）

昼間の日差しが心なしか和らぎ、夜風が涼しくなってきた時分、屋敷の縁側に佇んで猫の目のような月を見上げていた海雲は大聖堂（ルシード）に潜伏させていた者達が戻って来たとの報せを受けて着衣の裾を払った。休もうとしていたところだったので浴衣姿だったが、着替えをする間も惜しんで密使からの報告を受ける。その内容が思わしくないものだったので海雲は微かに眉根を寄せた。

「……わかった。引き続き動向を探ってくれ」

夜明けを待って王に報告をする必要があると海雲は判断したのだが、時を同じくして王からの急使も白影の里に姿を現した。王の急使がもたらした伝言は、早急に話し合いをしたいというものである。夜明けまで待つ必要もなさそうだと思った海雲はすぐに王城へ上ることを決して自室へ戻った。着替えをしながら方々に指示を飛ばし、里の態勢を整えるよう言い含めてから屋敷を後にする。その後、海雲は王の下へ急行した。

まだ不確かな情勢なので内々で話し合いの場を持ちたいという王の希望もあり、拝謁は平素の謁見の間ではなく王の居室で行われた。深夜に王の居室を訪れるのは海雲も初めてである。深刻な事態に発展しようとしていることは王にも解っているようであり、彼は海雲に拝礼も許さず話を始めた。

「既に存じているとは思うが、大聖堂に不穏な動きがある」

「先程偵察に出していた者達が戻りまして、報告は受けております。どうやら古代文字に関してもだいぶ解読が進んだようです」

「以前から遺物の存在は知っていたようだな。民をまとめる者達の他に専門の調査隊まで組織していたようだ」

「もともと、そちらの方が専門だったのでしょう。大聖堂が発見した遺跡にも偵察隊を潜り込ませましたが、テラに関する記述が見受けられました。そして先日、テラから不審な者達がうろついている

との報告を受けたばかりです」
　テラとは、南方にある遺跡の俗称である。この遺跡がある場所は赤月帝国の領土ではないが、白影の里はある事情から世界に散在する遺跡を調べているのだ。海雲が口にしたことが何を意味するのか、王は理解している様子で慎重に頷いて見せる。
「つまり、我々の存在を勘付かれたということだな？」
「その可能性が高いかと。今後は常にも増して軍の動きに注意が必要かと存じます」
「うむ。防備を強化してくれ」
「かしこまりました。ところで王、王子から何か進言がございましたか？」
「アゼルから？　いや、このところまともに顔も見ていないが」
「ならば、良い機会です。お呼びして参りますので、少々お待ち下さい」
　進言の内容には見当もつかないらしい王を居室に残し、海雲は一礼して退出した。寝静まっている城内を足音を忍ばせながら進み、王子の私室を目指す。だが部屋へ呼びに行くまでもなく、途中の廊下でアゼルと顔を合わせた。
「この騒ぎは何事だ？」
　すり寄って来たアゼルが声をひそめながら尋ねてきたので海雲は感服した。この時分に城内で動いている者は特別な訓練を積んだ者ばかりで、動揺が伝わらないようういつにも増して慎重に行動しているはずである。その気配を『騒ぎ』として捉えるアゼルは、敏感なのだろう。
「ちょうどいい。呼びに行くところだったんだ」
　アゼルを促して元来た道を歩き出しながら、海雲は事のあらましを説明した。無駄に口を挟まず話を聞いていたアゼルは海雲が閉口するのと同時に嘆息する。
「戦争が始まるということか」
「まだ断言は出来ないが、その可能性も十分ある」

「用心しようとしているのは解った。だが国民はどうする気だ？突然戦が始まるなどと言っても誰も信じないだろうし、動けない」
「それは王も考えておられるはずだ。だから今、お前の言葉が必要なんだ」
「……そうか。ついに、赤月帝国も動かなければならないのだな」
アゼルが複雑な胸中を感じさせる息をついたので海雲は無言で頷いた。これは今までのような、国を護るための防衛戦ではない。大聖堂との戦いは赤月帝国の建国理由に関わる重要な事柄が大義名分となるのだ。
「一つ、訊いておく。共存は望めないのか？」
目的が同じなら、戦などという無意味な祭りは止めにして協力しあえたらいい。そういった平和的な発想が根底にあるアゼルの意見には賛同したかったが、しかし海雲は首を振った。
「時期が悪い。大聖堂は今、勝ち戦続きで波に乗っている。おそらく話し合いの場は設けられないだろう。彼等は長く戦場を旅してきた流民だ。話し合いというものがどれほど無意味か、知っている」
「結局は戦しかない、ということか」
「大聖堂は普通の国家ではない。信仰というものが中心にあるんだ。赤月帝国とは、馴染めないだろう」
外界を拒絶しながら生きてきた赤月帝国には宗教というものは存在しない。長く乱世からも遠く平和な生活を送ってきた赤月帝国の人々には大聖堂の存在が異様に映るだろう。そしてそれは、大聖堂も同じなはずである。そこまで話した後、海雲はそれにと付け加えた。
「大聖堂は上と下とで温度差がある」
「温度差？」
少々言葉が足りなかったようでアゼルは首を傾げている。海雲は差し障りのない表現を考えて、少し間を置いてから口を開いた。
「大聖堂はもともと信仰の拠り所だ。例の事は、あちらの専門分野だろう」

「ああ、彼等のことか。大聖堂は既に知っているのか？」
「知っている。だが、情報が足りないと思っているはずだ。大聖堂は赤月帝国が持つ彼等の情報と、その独占権を迫るために攻め込んで来るだろう。だが実際に戦うのは流民の集団である兵達だ。温度差と言ったのは、そういう意味だ」
　大聖堂の上層部は土地よりも情報を欲しているが戦で故郷を追われた流民達は安全に暮らして行ける場所を望んでいる。そして赤月帝国は護り易く攻め難い土地なのである。大聖堂が攻め込んでくる理由は、それで十分なのだ。アゼルにもそのことが解ったようで、彼は空を仰いで眉根を寄せる。
「目的は違っていても利害は一致している、ということか」
「そうだ。大聖堂の上層部は聖職者という立場を利用して民をうまく操っている」
「聖職者達はその情報を得て、何をするつもりなのだろう？」
「信仰の妨げになるとか言って、まずは口封じだろうな」
　赤月帝国が有している情報は、世界に数多存在する『宗教』というものを根底から覆すほどの破壊力を持っている。それゆえ大聖堂は何が何でも赤月帝国を屈服させようとするはずだ。もしも敗国となった場合、何も知らないからといって国民が許されるとは限らない。だから絶対に負けるわけにはいかないのだが、最悪の事態も想定している海雲は覚悟の程を示した。
「万が一の場合、里の者には毒を含めと言ってある。心配はいらない」
　極秘情報の共有者は少なければ少ないほど望ましい。極秘情報を専門に扱う白影の里が息絶えれば、その分同じ機密を共有している王族の価値が上がるのである。だから安心しろと海雲は言ったつもりだったのだがアゼルは顔をしかめた。
「そのようなことにさせるものか」
「ああ。俺も、そのつもりだ」
　負ける気など、さらさらない。海雲が態度でそのことを示すとア

ゼルはようやく肩の力を抜いて笑んだ。

「侵入者？」
明け方に王城から白影の里へと戻った海雲は、部下からもたらされた情報に眉をひそめた。侵入者自体は珍しいものでもないが、時期が時期である。自然と険しい表情になり、海雲は跪いている部下に目を向けた。
「何処の者だ？」
「それが、いっこうに口を割ろうとしませんので……」
「ほう。毒など含まれて死なれては困るぞ」
「すでに調べましたが、毒などを仕込んでいる形跡はありませんでした。武器も持っていないようです」
「捕獲した場所は？」
「書庫の辺りです」
その場所には身に覚えがあり、俄かに嫌な予感が押し寄せてきた海雲は表情を曇らせた。部下は海雲の変化には触れず、侵入者を捕らえてある場所まで先導しながら報告を続ける。
「こちらです。特に抵抗する様子もないのですが、一応縄をかけてあります」
部下が開いた襖の向こうには、予想通りの姿があった。海雲が思わず頭を抱えると部下が不思議そうに首を傾げる。
「お知り合いですか？」
海雲はすぐに頷こうとしたのだが、その前にサイゲートが口を開いた。
「誰だ、お前？　お前なんか知らないぞ」

サイゲートに庇われている自分を自覚しながら海雲は苦笑する。どうも、日頃の脅しが過ぎたようだ。すでに部下にも侵入者が海雲の知己であることは知れており、彼は必死で笑いを噛み殺しながら念を押した。

「こう、申しておりますが？」

「もういい。下がれ」

いつまでも笑われていてはかなわないので海雲はさっさと部下を追い払った。二人きりになって縄を解いてやると、サイゲートはようやくいつもの調子に戻って話し出す。

「悪い、里に入ったらつかまった」

「いや、俺が悪かった。知らせようと思っていたんだが、時間がなくてな」

「どういう意味だ？」

サイゲートが眉をひそめたので海雲は真顔に戻った。長々と説明をしている時間はないので、海雲はサイゲートでも一言で理解出来るよう単純な言葉を選んで口にする。

「戦が始まる」

「えっ？」

「里は臨戦態勢に入った。だから警戒が厳しいんだ」

海雲が補足をしてもサイゲートは呆気にとられたままでいた。しかし少しずつ海雲の言葉が沁みてきたのか、サイゲートは眉根を寄せる。

「戦って……この国には関係ないだろ？」

「いや、おそらく赤月帝国が戦場になる」

「……本当なのか？」

サイゲートがまだ疑わしい目付きをしていたので海雲は小さくため息をついた。何も知らされず、ただ平和に暮らしてきた国民にすぐ理解してもらおうとは思っていない。だがサイゲートでこの程度なら、国民全てに事態を呑み込ませるのにどれだけの時間がかかるか知れない。

「近いうち、王から直々に公言される。しばらくは家で大人しくしてろ」
今この場で、サイゲート一人だけを納得させても意味がない。そう思った海雲はサイゲートに返答する間も与えず、一方的に話を打ち切って踵を返した。

夜空に浮かぶは赤い月（7）

海雲に白影の里を追い出されてから数日後、サイゲートは王城内の広場で人波に揉まれていた。王城を眼前に仰ぐこの広場は、毎年秋に行われる収穫祭にも使用されている。そのためサイゲートも幾度か訪れたことがあり、それは広場に集まっている全ての国民が同様だろう。だが本来、この広場は王族が公の場に姿を現す時に使用するためのものなのだ。

召集の理由も知らされずに集っている人々は少し早い祭りの予行だとでも思っている様子で、広場には和やかさとある種の熱気が漂っている。人々の昂る心情は肌で感じられたが、サイゲートは華やかな空気に溶け込むことが出来ないでいた。落ち着かない気持ちなのは海雲の一言が頭から離れないからである。

『戦が始まる』

険しい表情をするでもなく無表情のまま、海雲は淡白にそう言っていた。口調は至って静かなものだったのだがその一言を発した時の海雲は言い知れぬ空気を纏っていて、その雰囲気が未だにサイゲートを動揺させているのである。それでもサイゲートには、まだ「まさか」という思いがあった。こうして海雲の予告通りに国民全てが集められているにもかかわらず「戦」という響きが遠いほど、赤月帝国は平和慣れしているのである。

広場に渦巻いていた熱気は王が姿を現すという言葉で絶頂に達した。しかし広場の上方――王城の二階部分――に設けられたバルコニーに姿を現した王を仰いで、人々の熱気は一息に凍りつく。あちこちで息を呑む小さな音が聞こえ、その中にはサイゲート自身の吐息も混じっていた。王だけでなく、バルコニーに姿を現した者達は皆、防具に身を包んでいる。その様はまるで、戦が始まるかのようであった。

「皆、よく聞け！」

人々が閉口して静まり返った広場に、研ぎ澄まされた王子の声が響き渡る。その声音は温厚という王子の印象を一瞬にして打ち砕くほどの厳しさを伴っていた。

「世界では未だに領土を奪い合い、権力を欲する争いが続いている。民が血を流さずに済む国は、そう多くはないというのが世界の実情だ。そのような世の中で成り上がった者達がいる。大聖堂（ルシード）という集団だ。彼等は信仰を心に抱いた聖職者達である。乱世でなければ神を崇め、心静かに暮らせたであろう者達まで自らの命を守るために戦わねばならない。また大聖堂は多くの流民を受け入れてきた。多くの人間が共に生きて行くためには領地が必要だ。彼等は隣国を侵略しつづけ、我が国にも手を伸ばそうとしている。赤月帝国は、まもなく戦場となるだろう」

自身が戦争に巻き込まれそうだと知った時、人々は初めて反応を示した。驚愕と衝撃はやがて嘆きや漠然とした恐怖、そして憤りへと変化していく。人々が発した様々な声は多様な感情の渦となって一瞬にして膨れ上がっていった。

「黙れ！！」

王子が発した吼えるような声は一体感のない国民のざわめきよりも強く、腹の底に響いてくるような重厚さがあった。空気をも振るわせるような王子の一喝に、人々は黙して彼を仰ぐ。群集が閉口しても王子は険しい表情のままだったが、やがて彼は張り詰めた空気を和らげるようにふっと笑みを零した。

「父王からお言葉を頂戴する。話は最後まで聞くものだ」

王子が口調を和らげたことで国民の間にも安堵の空気が漂ったが、それは束の間のことだった。後退した王子と入れ替わるように進み出て来た王が、自らの国の民を見渡して口火を切る。

「我が赤月帝国は長きに渡り平和な時代が続いてきた。それは権力を欲することなく、争いを嫌う人々が戦火に怯えることなく暮らしていけるこの地を護ってきたからだ。だが世界は未だ混沌とした争いに支配されている。この国を少しでも出れば焼け果てた荒野、人（ひと）

間が人間(ひと)を殺め、それでも生きていかなければならない光景を目にするだろう」
　覇気を感じさせる王子の調子とは違い、王が静かに語る言葉は一語一句が重かった。口調が淡々としている分、国民には重圧が伸しかかってくるのだ。意気消沈した国民は敬虔な態度で王の言葉に耳を傾けている。
「赤月帝国は権欲争いに参戦する気は毛頭ない。しかし、我等の地を侵そうという者があれば護るために戦う」
　王の決意は重く、彼の思いを受け止めきれなかったサイゲートは群集の中で思わず目を逸らした。その拍子に明らかに異質な人物がバルコニーに佇んでいることに気がつき、サイゲートは目に留まった白装束の人物を遠望する。王の後ろに控えている人物まではかなりの距離があったが、サイゲートの目には彼の人物の顔がはっきりと映った。
（海雲……）
　白装束姿を見るのも公の場で姿を目にすることも初めてだったが、王族と同列にいるのは間違いなく海雲である。サイゲートが目を見張っていると後退した王に代わって再び王子が前面に出てきた。
「我が国には古くから軍隊が存在している。無論、自衛のための軍隊だ。赤月帝国が長く平和を保てたのも彼等のおかげと言うより他ない。赤月帝国の軍隊である白影の里の棟梁、海雲だ」
　王子が、海雲を国民に紹介している。その最後の一言にサイゲートは耳を疑った。
（海雲が……）
　棟梁という響きが無粋に胸を抉り、サイゲートは知らないうちに拳を強く握っていた。人伝に明かされた事実がサイゲートに衝撃を与えたことなど知る由もない海雲は淡々と言葉を紡ぐ。
「王子から聞き及んだ通り、我ら白影の里は赤月帝国を守護するために存在している。戦になった時、血を流すのは我らの役目だ。だが戦とは何が起こるか分らぬもの。もしも我らが敗れたのなら、赤

月帝国を護るものは何もない」
突き放すような海雲の言葉は群集に再度の衝撃を与えた。不安を囁く声や恐怖に震える者の嘆きがざわざわと渦巻いている。しかし海雲は、王子のように一喝して群集を黙らせることはしなかった。バルコニーにいる者が誰しも沈黙を保っていたので、やがて群集も囁きを収める。広場が異様な静寂に包まれてから、海雲は無感動に言葉を次いだ。
「平和など、何処にもない。だからこそ我ら白影の里はこの平和を護るために戦をする。勝ち取らねば生きてなどいけないのだ」
王の静けさともまた違う海雲の冷たさは国民の肝を冷やすのに十分な効力を有していた。突き放しただけでフォローをすることもなく、海雲はさっさと後退する。この場を取り仕切っている王子が再び前面に出て来て、国民に語りかけるように話しかけた。
「聞いた通りだ。我が国にも軍隊は存在する。だが、それも絶対ではない。この世の中に絶対というものが有り得ない限り、己の身は己で守るしかない。同じように、我等の国も我等が護るしかないのだ」
王子の言葉は最後通告であった。もはや会戦が避けられないことは、この場にいる誰もが切実に感じている。だが民衆からも友人からも切り離されてしまったサイゲートは一人、為す術もなく俯いていた。

王城の二階にあるバルコニーで国民に向けて演説をした後、海雲は先に退出した王族の後に従って城内に戻った。城で働く者も含めて国民全てを広場に集めたため、城内はひっそりと静まり返ってい

る。まだ広場にいるはずの民衆の声も、聞こえてはこなかった。
赤月帝国に生きる者達は一部を除いて、何も知らされずに生活してきた。日常の中で考えることは仕事や家族のことばかりだっただろう。その意識を改革し、どうやって自らを守れと教えるのか。戦争になりそうだと予感した時から白影の里と王族、そして大臣も交えて腐るほど議論を重ねてきた。その結果、長い時間の中で植え付けられた概念は同程度の時間をかけなければ拭い去ることは出来ないという答えを得て、今回の仰々しい演説に至ったのである。
「重いな。肩が凝る」
普段の彼らしくなく『王子』を演じたアゼルは城内に戻るなり防具の紐を緩めた。複雑な影がさしているアゼルの横顔を、海雲はじっと見つめながら反応を返す。
「命の重さに比べれば軽いものです」
正面から戦う訳ではないのだから、命さえ守られればいい。アゼルや王が身につけている防具はそうした考えのもと、長年研究を重ねて作り上げられた物だった。海雲の言葉を受けて振り向いたアゼルは苦い表情で頷く。
「そうだな。命があればいい」
会話に耳を傾けていたらしい王も海雲の意見に同意した。だが海雲が向き直ると王は目を伏せる。
「嫌な役目ばかりを押し付けて、すまない」
王がそのようなことを言い出すのには、国民には見せられない裏の事情があるからだった。王は海雲に与えられた役割に負い目を感じているのである。
今まで平穏に生きてきた国民に戦を教えるのは困難な作業である。時間があまりない中、失った恐怖を呼び起こし自らの身は自身で守るという意識を覚醒させるには誰かが煽るしかない。言わば、憎まれ役が必要なのだ。同時に、国民を絶望させないために安心を与える存在も必要となる。誰がどの役割を果たすべきかなど考えるまでもなく、謝罪の必要もない。だが王は、そのことを承知していながが

らも海雲が非難の矢面に立たされることに心を痛めているのだろう。そんな苦しさが凝縮された王の一言に、海雲はにこやかな笑みでもって応えた。
「それが我らの使命です。今後、二度とそのような事は口になさらないでいただきたい」
「海雲の言う通りです。個人にはそれぞれ成すべきことがあるのですから」
アゼルにまで言い含められた王は困ったように微苦笑を浮かべた。
「そうだな。今は、それぞれが出来ることをしよう」
「愛すべき祖国を護るため、父王のお力になれるよう最善を尽くします」
アゼルが『王子』として王の前に跪いたので海雲も無言でそれに倣う。役割を演じることに疲れを感じていたのはアゼルだけではないようで、王は海雲とアゼルに立ち上がるよう促したのち王城の廊下を歩き出した。

夜空に浮かぶは赤い月（8）

王族から会戦が告げられたその日から、赤月帝国内は騒然としていた。夜が更けても陽が昇っても、赤月帝国には普段と変わらぬ穏やかな時間が流れている。そのような中で戦と言われてもピンとこないが、それでも街中は戦の話題で持ちきりだった。

会戦宣言から数日が経つと変化は着実に表れ始めた。それまでは王城に詰めていることが常だった王の近衛兵が街中に姿を見せるようになったり、演説に共感した者達が愛国心を叫ぶようになったのである。しかし激動の渦中にありながら、サイゲートは変わらぬ日々を過ごしていた。

「ボサッとしてんじゃねえ。さっさと運べ」

太陽が昇ったら森へ行き、日暮れまで斧を振るう。怒られながら切った材木を運ぶのも、いつものことだった。森も街の喧騒とは遠く、静けさを保っている。だが、人は減った。仕事仲間の数人も戦に備えると言って森には姿を見せなくなったのである。

「ただでさえ人手が足りねえんだ、しっかり仕事しろよ」

景気づけとでも言いたげに腰を叩かれ、サイゲートは前のめりになりながら歩き出した。切り倒した木の前方には親方がいてサイゲートを見ている。サイゲートは急いで倒木の後方につき、親方と共に木材を持ち上げた。

木材の集積場へと赴く間、親方は一言も言葉を発しなかった。彼が無口なのはいつものことだが、戦が始まるというのにあまりにも変化がない。親方が会戦をどう受け止めているのか聞いてみたくなったサイゲートは木材を下ろしてから口火を切った。

「親方、」

「なんだ？」

「親方は戦の準備をしなくてもいいんですか？」

「戦争すんのは軍隊とやらの仕事なんだろ。だったら俺たちはいつ

もと同じことしてりゃいい」
親方はあっさりと言ってのけたが、混乱の中で平素の自分を保つことはとても難しいのである。親方に流されない強さを感じたサイゲートは感心して息を吐いた。彼のように動じずにいられたのなら、こんなにも心が乱されることもなかっただろう。会戦宣言のあった日から塞ぎがちな自分に気付いていたサイゲートは、その原因である白い姿を思い浮かべて密かに顔を歪めた。

会戦宣言の前後で街の様子は大きく変わったようだったが、海雲は白影の里と王城を往復するという変わらぬ毎日を送っていた。平素より多少多忙にはなったものの、今はまだ嵐の前の静けさである。時間にゆとりがあったので、海雲は王への定期報告を終えたのちアゼルの私室を訪れた。
「若者が随分、兵に志願してきていると聞いたが？」
近頃はアゼルの関心事も戦に終始していて、彼は開口一番にそんなことを言った。椅子に腰を落ち着けた海雲は大袈裟に顔をしかめて見せる。
「ああ。まるで祭りのような騒ぎだ」
兵に志願してきている若者達には高揚感があるものの緊張感はない。その姿はさながら、祭りの主役に抜擢されたがっている子供のようだ。あわよくば物語に紡がれるような『英雄』になれるかもしれない、その程度の認識しか持ち合わせていない者が兵になるなど命を捨てに行くようなものである。
「若者達の目に、この国は退屈に映っていたのかもしれない。祖先や親が平和を願っても、その子まで同じ考えとは限らないというこ

とだな」
　アゼルは淋しさと皮肉を同居させたような表情で独白を零した。彼は支配者の子として責任を感じているのかもしれないが、血が薄まれば戦いの記憶が遠い過去のものとなるのは仕方のないことである。海雲はアゼルを見つめ、真顔のまま口を開いた。
「平和が当たり前にある者の戯けだ。放っておけ」
「手厳しいな。だが、同感だ」
　アゼルも頷いたが、兵に志願してきている者に使い道がないわけでもない。戦おうという気概のある者を無下にも出来ないため、海雲はある提案をした。
「いい機会だ、自衛団を組織しよう。万が一国内に侵入された時に役立つかもしれない」
「そうだな。若者達を原動力に国民全体がまとまってくれればいいのだが」
「そのへんはアゼル、お前にかかっているだろう」
「あまり気負わせるな」
　アゼルは殊勝にも苦笑いを零したが海雲は笑みを返した。アゼルが以前から国民に親しみを持って接していたおかげで、支持を集めることが出来るのである。彼がそこまで考えて行動していたとは思えないが、こういう事は日々の積み重ねが物を言うのだ。
「父に報告したことを、かいつまんで教えてくれ」
　アゼルが真顔に戻って本題を切り出したので海雲も表情を改めてから話を始めた。
「遺跡の調査に出していた者達には撤退を命じたが、すでに我等の存在は勘付かれた可能性が高い。大聖堂（ルシード）は軍を編成している」
「それは、我が国を攻撃するための軍隊なのか？」
「おそらくな」
「大聖堂には陣形や策は何もないのだろう？」
「そのようではあるが、油断は禁物だ。通常の敵と戦うつもりでいる」

「そうだな。小さな油断が命取りになるのが、戦争というものなのだろう」
アゼルは王族の教養として軍事についても学んでいるが、彼は実際の戦争を知らない。それは全軍を指揮する王も同じであり、その点には不安が残る。国内に敵が侵入すれば当然のことながら死傷者も出るだろう。そうした事態に陥った時、国民を引っ張って行かなければならない王族もどこまで耐えられるのか。だがそれも、国内に敵を入れなければいいだけの話だ。
（護ってみせるさ。先代との約束もあるしな）
何事かを考えこんでいるアゼルを見据え、海雲は言葉にはせずに誓いを立てた。
「姫様！　いけません！！」
「放して！！」
閉ざされた扉の外から突如喧騒が聞こえてきたので海雲はアゼルと顔を見合わせた。アゼルの私室の前で、菜の花と侍従が何やら揉めているようである。
「……仕方のない奴だな」
アゼルが重い腰を上げようとした時、悲鳴と共に扉がぶち破られた。重なり合うように倒れこんで来た菜の花と侍従を、アゼルと海雲はあ然として見る。
「いったぁ～い」
「す、すみません姫様！！」
菜の花の上に圧しかかっていた侍従が慌てて体を退ける。菜の花は不機嫌そうに顔を上げたが、海雲の姿を見つけて目を輝かせた。
「お前、何してるんだ？」
呆れた顔をしつつもアゼルが菜の花に手を差し伸べる。助け起こされた菜の花は兄には礼も言わず、一目散に海雲の元へ走り寄って来た。
「海雲！　やっと会えた」
「姫……その格好は、どうなされたのですか？」

平素とは違う菜の花の姿に戸惑いながら、海雲は慎重に尋ねた。菜の花は何故か、ドレスの上から兵が身に着ける胸甲を着用しているのである。

「海雲、私決めたの。国民が戦うんですもの、私も戦うわ」

一生懸命に、重い鎧まで着て訴える菜の花の表情は真剣そのものである。彼女はおそらく、王や王子が国を護るために奔走している姿を見て自分も何かしたいと思ったのだろう。アゼルは呆れていたが、海雲は菜の花の心遣いを嬉しく思った。

「姫、お心は有り難く頂戴致します。ですが、戦をするのは我ら白影の里の者にお任せ下さい」

「何故？　お兄様もお父様も戦っておられるのよ。私だって王族です、何もせずにいられる訳がないわ」

「だからこそです。王子や姫のように国民に安らぎを与えることは我らには出来ません。戦と一言に言っても、それぞれの戦い方があるのです」

「……そうね」

納得がいったのか、菜の花はまだ考えこむ素振りを見せながらも素直に頷いた。それから、彼女は目を上げて真っ直ぐに海雲を見据える。

「でも、絶対に死んだら駄目よ」

「はい」

不安気な顔を笑顔に変えたくて、海雲は菜の花に優しく微笑みかけた。

夜空に浮かぶは赤い月（9）

アゼルと自衛団の編成に向けて具体的な話し合いをした後、海雲は彼岸の森にある白影の里へと戻って来た。里へ着いたのは夕刻だったのだが片付けなければならない諸事が山積していたため、屋敷に戻れたのは夜半である。屋敷に戻ってからも配下からの報告が続いたため、海雲は疲労を感じてこめかみに指を当てた。だが大聖堂（ルシード）の情勢はもちろんのこと、国内の様子も疎かには出来ないのですぐ真顔に戻る。海雲より若干年上の部下は気遣わしげな素振りを見せることもなく淡々と報告を続けた。

「お疲れ様です。次が本日最後の報告になります」

「そうか。最後は何だ？」

「侵入者です」

「は？」

「客間にお通ししてありますので。では、失礼させていただきます」

部下が一方的に話を終わらせて去って行くので海雲は嫌な予感を覚えた。この話運びからいって、侵入者は警戒するに値しない人物である。さらに屋敷へ通してあるという点を考慮しても、該当する人物は一人しか思い当たらない。

（……来るなと言ったのに）

胸中でぼやきながら、海雲は屋敷の奥にある客間へと向かった。海雲の自宅は全ての部屋に畳が敷いてあり、出入口も扉ではなく襖である。外からでは人の気配もなさそうに静まっている客間の襖を開け、海雲はうな垂れて座っている人物に目を落とした。

「どういうつもりだ？」

「お前って、エライ奴だったんだな」

肩透かしを食らった海雲は思わず脱力しそうになった。いつになく大人しいサイゲートは物言いたげな顔をしており、そんなことを言うためにわざわざ訪れたとは思えない。海雲は反応を返さず、サ

イゲートが次の言葉を発するのを待った。
「……なんとなく、会いたかったから来た」
弱々しい笑みを浮かべるサイゲートの口調には寂しさと自嘲が同居していた。複雑な表情をしているサイゲートを見据え、海雲はまったく別の話題を振ってみる。
「街は、どうだ？」
「街？」
「街の様子を探る者達もいるが、実際その場所で暮らしている者達の方が敏感に異変を感知する。ちょうど、街に暮らす誰かから話を聞きたいと思っていたところだ」
「何も、変わらないよ。少なくともオレの周りでは」
「……そうか」
サイゲートの答えを聞き、海雲は疲れたため息を吐いた。あの演説で共感してくれた者達がいたことも確かだが、全体を見ればまだ効果は薄いようである。だが嘆いていても仕方がないので海雲は早々に話題を変えた。
「若い連中を中心に、兵に志願してきた者達で自衛団を作るつもりだ。お前は行かないのか？」
「オレは、仕事があるから」
「仕事？　この非常時にか？」
「でも、誰もやらなくなったら困るだろ？」
サイゲートの言うように、いくら戦争だからといって全員が兵になってしまったら国内の生産が止まってしまう。そうなると、生活に深刻な影響を及ぼすことも出てくるだろう。こんな時だからこそ、余計な混乱は避けるべきだ。そう思った海雲は納得して頷く。
「なるほどな。一つ、お前に教えられたよ」
「そんな風に考えてる人もいるんだ」
海雲はサイゲートが自分の考えを持っていることに感心していたのだが、この口ぶりからすると彼の意見ではなかったらしい。感心した分、損をした気になった海雲は呆れながらサイゲートに声を投

げる。
「お前自身は、どうなんだ？」
「迷ってる。なあ、どうしてこの里で一番エライ奴だって教えてくれなかったんだ？」
サイゲートが『エライ奴』というものにこだわるので海雲は眉根を寄せた。何を聞きたいのか知らないが、随分な言い草である。
「そんなこと関係ないだろ。ちゃんと答えろよ」
「関係ないもんか！」
俯きがちだったサイゲートが急に叫んだので海雲は瞠目した。顔を上げているサイゲートはまるで、敵でも見るかのように睨みつけてくる。煮え切らないサイゲートの態度に腹立たしさがこみ上げてきて、海雲も声を荒げた。
「少なくとも今は関係ないね！　お前、何なんだよ！　何か言いたい事があって来たんじゃないのかよ！！」
「わかんねーよ、そんなこと！！」
「はあ？　意味わかんねえ」
「……オレだって、訳わかんねーんだよ」
蚊の鳴くような声で呟き、再び顔を伏せたサイゲートはそのまま沈黙する。佇んだまま口論していた海雲はサイゲートの前に座り、無理矢理顔を覗き込んだ。
「そこまで言うなら教えてやるよ。俺が白影の里の棟梁だから何だって言うんだ。俺とお前の関係にそんなもの関係ないだろ。だから言わなかった」
「……そうだな、そんなもの関係なかった」
「過去形かよ。お前、何をそんなに気にしてんだ？」
答えられないのか答えたくないのか、サイゲートは唇を引き結ぶ。サイゲートの真意が解らないことに苛立ちが募り、海雲は乱暴な言葉を吐いた。
「俺が王子と一緒にいた時からだろ？　嫉妬か？」
「ちがう！」

「じゃあ他にどう説明するんだよ！」
「……」
「ほらみろ！　嫉妬じゃないか！」
「ちがうって言ってんだろ！！」
　涙目になりながら立ち上がったサイゲートは、そのままの勢いで殴りかかってきた。手加減もない拳を頬に食らった海雲はギラついた目を上げ、静かに立ち上がる。
「……ってぇな。上等だ！」
　海雲も本気で殴り返したので、サイゲートは吹っ飛んだ。だがすぐ、彼は起き上がって応酬してくる。乱闘で客間の調度品を派手に壊しながら海雲は怒声を発した。
「大体な！　男に妬いてどうすんだよ！」
「男とか女とか！　そういう問題じゃない！！」
「じゃあ何なんだよ！　言ってみろよ！！」
「お前が！　ちがう世界の奴なのに親しげだったからだろ！！」
「はあ？」
　前も見ずに突進して来たサイゲートを受け止め、海雲はそのまま畳に倒した。うつ伏せに倒れたサイゲートは荒い呼吸をするばかりで起き上がってこない。久しぶりに乱れた呼吸を整えてから海雲はサイゲートを見下ろした。
「お前、なにバカなこと言ってんだ？」
　同じ国内に住みながら、どうして違う世界などという発想が出てくるのか。サイゲートはおそらく身分の違いのようなことを言っているのだろうが、海雲には理解出来なかった。
「確かに俺は白影の里の……赤月帝国の軍隊の棟梁だけどな、偉いなんてことはない」
「……ふつうの人間から見ればじゅうぶんだ」
「俺は自分が偉い人間だとは思ってないし、王族を偉いと思ったこともない。王族だって、それは同じだ。お前らが勝手にそうしただけだろ？」

責められていると感じたのか、サイゲートは反応を示さなかった。痛む唇に指を当て、付着した自身の血液を見た海雲は顔を歪めながら唇を拭う。唇が切れたせいで喋り辛かったが、海雲は言葉を次いだ。

「人間には誰しも役割がある。偉いとか、そんなものには関係なくだ。ただ、それだけのことだろ」

白影の里で生まれ育った海雲にはサイゲートの言っていることがよく解らなかったが、そういう考え方が国民の間に浸透しているのかもしれない。人間が大勢で暮らすには役割を決めた方が効率がいい、ただそれだけのことがいつの間にか歪んでいく。それが歳月というものなのかと、海雲は小さくため息をついた。

「……起きろよ」

這いつくばったままのサイゲートを無理に起こし、海雲は彼と共に腰を下ろす。胡坐をかいたサイゲートはまだ顔を背けていたが、それも強引にこちらを向かせた。

「いいか、俺は怒ってる」

海雲が淡白に本心を語ると、サイゲートの目がようやくこちらを向いた。真正面から瞳をぶつからせ、海雲は言葉を続ける。

「お前とは初めて会った時からケンカしたな？　それからもしょっちゅうケンカしたよな？　白影の里の者は皆、幼い頃から殺人術を仕込まれる。だからケンカなんか出来なくなる訳だ。久し振りに普通のケンカが出来た時、俺は嬉しかった。それからも、ケンカする度に楽しかった。お前は違うのかよ？　俺といる時は楽しくなかったのか？」

「……楽しかった」

「じゃあ、それでいいじゃん。つまんない事にこだわって、せっかくの関係を壊そうとするなよな」

関係の修復には異論がないようで、サイゲートは黙っていた。しかしはっきりとした返事を聞きたかった海雲はサイゲートが本心を語るのを無言で待つ。しばらくの沈黙の後、サイゲートはぽつりぽ

つりと話し出した。
「お前が王子と一緒にいた時や家でおとなしくしてろって言われた時、すごく遠く感じたんだ」
「それで寂しかったのか？」
サイゲートが素直に頷いたので海雲は堪えきれずに吹き出した。
「おまっ……お前、可愛い奴だな」
「うるさい！　そんなに笑わなくてもいいだろ！」
顔を真っ赤にして、サイゲートはそっぽを向く。直接的に向けられる視線がなくなったことで海雲は真顔に戻った。ずっと、言おうかと思っていた言葉がある。今ならば言えるのではないかと思い、海雲は口火を切った。
「サイゲート、お前この里に来るか？」
サイゲートにしてみれば唐突な誘いだっただろう、彼は目を丸くして振り返った。海雲は表情を動かすことなく真顔のまま言葉を続ける。
「前々から思ってたんだが、家にいたくないんだろ？」
帰り際の顔がやるせなく見え始めた時から、海雲にはそんな気がしていた。そしてそれはサイゲートの家に行った時、確信へと変わった。だが白影の里は女子供でさえ常に死を覚悟しなければならないようなところなのである。里で生まれ育ち、物心つく前からそれが当たり前な者はいいが、そうでない者には過酷すぎる環境だ。だからずっと、海雲は迷っていたのである。
「里の者になるなら、色々と厳しい条件を呑まなければならないが」
「いや、それは出来ないよ」
熟考するでもなく、サイゲートはあっさり答えた。ここまで迷いのない返答がくるとは思っていなかった海雲は軽く眉をひそめる。
「何か、理由でもあるのか？」
「あんな家だけど、育ててもらった恩があるから」
「そうか」
「ごめん、ありがとう」

「いや、気にしなくていい。忘れてくれ」
海雲が閉口するとサイゲートも言葉を次ぐことをしなかった。乱雑な室内には沈黙が流れたが、それは苦痛を伴うものではない。しかしそれも長くは続かず、サイゲートが沈黙を破った。
「しばらく、ここには来ないよ。戦が終わったら、また会いに来る」
「ああ。なに、戦などすぐに終わる」
「頼りにしてるよ」
ふっきれた笑みを置き去りに、サイゲートが姿を消す。海雲はサイゲートが去った後をしばらく見つめていたが、やがて散らかった室内に目を留めて大きくため息をついた。

夜空に浮かぶは赤い月（１０）

自宅の客間でサイゲートと盛大な喧嘩をした数日後、緊急の連絡が入ったので海雲は王に謁見を願い出た。謁見はすぐに許されて対面が叶ったのだが、王は海雲の顔を見るなり眉根を寄せた。その理由は、未だ生々しい海雲の傷である。

「その傷は何事だ？」

「少々、ケンカをいたしまして。それより王、大聖堂（ルシード）が進軍を開始しました」

海雲が早々に本題を口にすると、眉をひそめていた王はそのまま渋面を作った。

「報告は受けている。やはり、目標は我が国のようだな」

「進路から見て、そのようです。既にかげろうの森には部下を配しておりますが、到着までにはまだ数日かかるでしょう」

「その間に、何をする？」

「足留めの準備は既に進めております。軍が到着する前に国内を固めておくのが得策かと」

赤月帝国を抱くかげろうの森は天然の迷路になっているが、攻められるのであればそれだけでは少々心もとない。そのため海雲は、戦になりそうだと予感した時からかげろうの森にも罠を張れるよう準備を進めてきた。かげろうの森は広大なので全てを監視することは不可能だが、進軍ともなれば大体のルートを把握することは可能である。それよりもむしろ、問題なのは街の方なのだ。王も同じ考えのようで、彼はすぐ海雲の意見に同意した。

「そうだな。無駄な混乱は引き起こしたくない」

「戦況を国民に伝える者達を組織して下さい。逐一情報を送れば、国民も素早く対応出来るでしょう」

「うむ。既にある程度の組織は整っている」

「後は大聖堂の戦い方を見てからでないと、判断出来ません」

防衛戦とはいえ大聖堂は初めての敵である。また攻め込んで来る者達も普通の軍隊とは違うので、現時点では予想を立てることも難しい。しかし海雲には戦いを長引かせる気はなかった。防衛戦の要は、早い段階で諦めさせることだからだ。

「自衛団はどれ程のものか？」

そのような問いが出てくるところを見ると王は白兵戦も視野に入れているようである。様々な事態を想定しておくことは有意義だが、海雲はあっさり切り捨てた。

「戦を知らぬ民です。あまりアテになさらない方がよろしいかと」

「……そうだな。戦い方を知っている者は少ない」

「緊急の場合の自衛団です。しかし実際に攻め込まれた時、どれほど機能するかは未知数です」

「誰が指揮をとっている？」

「王子です。日頃から民衆の前に姿を見せておられたので、支持を集めております」

「……そうか」

我が子の頼もしさに気を緩んだのか、王は口調に嬉しさを滲ませながら呟く。まだ王の弛緩を咎めるほどの時期ではなかったので海雲も笑みを浮かべ、一礼してから謁見の間を退出した。

仕事を終えて酒場へ行き、飲んだくれた親方を引きずりながら家へ戻ったサイゲートは水汲みを言いつけられて再び外へ出た。たった今閉ざしたばかりの扉からは早くも金切り声が漏れてきている。

酔いつぶれた親方を罵っている妻の姿が目に浮かび、サイゲートは微苦笑を浮かべながら歩き出した。
空のバケツを担いで森に入ったサイゲートは、川面に映りこんだ月に目を奪われて空を仰いだ。天空には今宵も、赤い月がぽっかりと浮かんでいる。赤月帝国の由来ともなった紅の月を仰ぎながら、サイゲートは同じ月の下にいるはずの友人を思い浮かべた。
先日盛大なケンカをした友人は、飾らない人である。それは初対面でケンカをした時から変わらず、いつでもそうだった。そのことを知っていながら、サイゲートはつまらない意地やプライドで自分を傷つけたのだ。その傷はまだ体のあちこちに残っており、前触れもなく痛んだような気がしたサイゲートはビクッと体を震わせてから苦笑を零す。
（……バカだよな、ほんと）
自分の想いもうまく口に出来なくて、せっかく差し延べてくれた手もはね除けた。だが彼はぐちゃぐちゃだった想いをすくい上げてくれ、手を握り返さなかったことも許してくれたのだ。
（オレも、うれしかったんだ。初めて自分の居場所が出来たような気がした）
だから本当は、居心地のいい場所を作り出してくれる彼と一緒にいたいと言いたかった。だが血の繋がりのない自分をここまで育ててくれた親方を裏切るような真似はしたくない。そう思ったから、サイゲートは海雲の誘いを断ったのだった。
（でもきっと、これでいいんだよな）
人間にはそれぞれ役割があるのだと、海雲も言っていた。海雲が白影の里の棟梁として出来ることをしているように、自分も赤月帝国の一国民として出来ることをするしかないのだ。そうして心が決まってしまえば痛みも晴れやかなもので、サイゲートはまだ腫れている頬に手を当てながら片手で水をすくい上げた。

まもりたい（1）

赤月帝国を抱くように広がっているかげろうの森は、国内と外界を結ぶ交通路である。だが人の往来に必要な道などは整備されておらず、平素であれば国内外を問わず進入しようとする者は少ない。鬱蒼とした木々が茂るかげろうの森は密林であり、天然の迷路となっているため土地勘のある者でも一歩道を誤れば迷ってしまうからだ。だが未開拓で人の踏み込めない森は敵を迎え撃つのに都合がいい。侵入口もここしかないので、白影の里はかげろうの森に罠を張り巡らせて敵を迎えたのだった。

赤月帝国に侵攻してきた大聖堂軍（ルシード）は幾度となく罠にはまった。その度に人数を減らし、一度退却し、それでもまた日を改めて攻めて来る。罠の種類なども日々変えてはいるのだが、それでも幾度となく攻めてくる度に慣れ始めてきているようだった。

自ら森に赴いて指揮を執っていた海雲は大聖堂軍の思わぬしつこさに考え込んでいた。早期に諦めさせることが重要であったが、その機会はもう逸してしまっている。小競り合いに時間がかかっている分だけ実力の差が雲泥であることは大聖堂軍にも解っているはずなのだが、それでも彼らは諦めようとしないのである。何かが彼らを駆り立てているのか疑問を抱いていた海雲の元に妙な報せがもたらされた。

「聖地？」

配下の口から飛び出した耳慣れない単語に海雲は眉根を寄せる。聖地というものが宗教用語であることは知識として得ているものの、それが何を意味しているのか海雲には理解出来なかったのだ。大聖堂軍の様子を探りに行っていた配下は頷いてから言葉を次ぐ。

「大聖堂軍は皆、赤月帝国こそ聖地だと叫んでいました」

「それはどういうことだ？」

「どうも、大聖堂の上層部が赤月帝国の様子を大袈裟に説明したよ

うです」
報告によると、大聖堂の上層部は戦線に赴く兵達にこう言い含めたらしい。『赤月帝国は長く戦のない平和な地で、それは神に護られた聖地だからに違いない』と。
信仰を抱く兵達は神に護られた地ならば変わらぬ平穏を約束してくれると思い込み、また聖地に先住民がいるのが許せないのだ。我らが死の淵を這いずり回っている時に何故お前達だけが平和を手にしていたのかと、彼らは憎悪しているのである。そうした説明を受けた海雲は理解に苦しみながら空を仰いだ。
（予想はしていたが……）
想像以上にその、聖地という言葉が効いている。海雲には宗教というものがよく解らないが、大聖堂の上層部が追い詰められた民の心をうまく利用していることだけは嫌というほど感じられた。
「警戒を強めろ。敵は民ではない」
本当の敵は赤月帝国に侵入してきている輩ではなく、大聖堂という組織そのものだ。報告に戻って来ていた配下に再び大聖堂陣営に潜り込むよう指示を出し、海雲は険しい表情で地図を睨んだ。

信憑性に乏しかった会戦宣言が程なく現実のものとなり、赤月帝国と大聖堂の戦争が始まった。会戦の舞台は赤月帝国を包囲するように広がっているかげろうの森である。だが森は広大なため街からは戦雲を窺うことも出来ず、赤月帝国内は未だ平穏を保ち続けていた。敵が攻め込んで来ているという情報だけは常に流れて来るが、

街まで侵攻されたことはない。初めのうちは敵兵の来襲に緊張感を高めていた国民も近頃では安心しきっており、街に暮らすサイゲートは空気が緩んでいるのを肌で感じていた。
「戦が始まるっていうから張り切って行ったのによ」
「まったく、無駄足だったな」
「白影の里があるかぎり赤月帝国は安泰だ」
戦の準備をすると言って森から姿を消していた仕事仲間もいつの間にか戻って来ており、意気込んだことを無駄な労力だったと言わんばかりに愚痴を零している。その状態はもはや、公布がなされる前とまったく同じであった。兵に志願した若者で結成した自衛団も散会状態のままのようである。
（……戦はまだ続いてるのに）
すっかり安心しきっている仲間達に違和感を覚えずにはいられず、サイゲートは胸中でそう呟いた。終戦宣言がない以上、戦はまだ続いているのである。
開戦前、海雲は戦などすぐに終わると言っていた。だが現実は、戦はすぐには終わらなかった。それは大聖堂（ルシード）軍が何度も何度も攻め込んできているからである。何度押し返しても再び攻め寄せて来る敵の情報を得るたび、サイゲートの中では敵の存在が次第に大きくなってきていた。だが安全な場所で護られているだけの人々は、そうではないらしい。
「サイゲート、手伝え」
「あ、はい」
親方に声をかけられたので、森の奥を気にしていたサイゲートは急いで仕事に戻った。親方と二人で幹の両側から斧を入れ、切り倒した木の枝を落としていく。だが力いっぱい斧を振るっていても、枝を落とすという細かい作業をしていても、サイゲートは戦場となっている森の向こうが気になって仕方なかった。
「……親方」
「なんだ？」

黙っていられなくなったサイゲートが話しかけると親方は無愛想な返事を寄越した。親方は戦が始まると聞いた時から顔色一つ変えたことがなく、いつもとまったく変わらない。それまで気が弱いとばかり思っていた親方がここぞという時は堂々としているので、サイゲートは羨ましく思いながら言葉を次いだ。

「親方は怖くないですか？」

「何がだ？」

「ルシードって、追い返しても追い返しても攻めて来てるみたいじゃないですか」

「それだけ生きるために必死なんだろ」

「それは……そうですけど」

「戦争なんてもんがなくても、誰もが生きるために必死だ」

手を動かしながら親方と会話していたサイゲートは驚いて顔を上げた。親方は木に目を落としたまま黙々と作業を続けていて、自身が発した言葉にも感慨はない様子である。だからこそサイゲートには、先程の言葉が自然な考えのように感じられた。

生きるために必死なのは、なにも戦をしている者達だけではない。こうして森で木を切り倒しているサイゲート達も生活のために身を粉にして働いているのである。だが人間同士が命を奪い合っている戦と日々の暮らしを同列と考え、結び付けられる発想が凄い。そこが親方の秀逸な点であり、他の人とは違うと思ったサイゲートは嬉しくなって笑みを浮かべた。

「親方」

「……まだ何かあるのか？」

「育ててくれて、ありがとうございます」

嫌そうな表情で顔を上げた親方はサイゲートの率直な言葉に面食らったような顔をした。だがそれも束の間のことであり、すぐ無表情に戻った親方は何も言わずに作業を再開させる。返ってくる言葉はなくとも心は通じたと感じたサイゲートも笑みを浮かべたまま仕事に戻ったのだった。

まもりたい（2）

太陽が昇ってすぐ森へ繰り出していたサイゲートは日暮れ前に仕事を終え、仲間達と酒場へ向かっていた。街から遠く離れた森では未だに戦が行われているが、夕暮れの街は安寧の空気に包まれている。あちこちから漂う夕餉のにおいも、人々の笑い合う声も、戦時中だという緊迫感に欠けていた。

仕事終わりで上機嫌の仲間達の背を見ながら歩いていたサイゲートはふと、街中に人だかりが出来ていたので足を止めた。夕暮れの街で見るこの光景は、いつかの風景を彷彿とさせる。気になったサイゲートは仲間達から外れ、人の輪の外側から背伸びをして中心ある物を覗き見た。するとそこには予想通りの姿があったので、足を地に着けたサイゲートは口元に手を当てて考えこむ。

人だかりの中心にいるのは、王子である。会戦宣言のあった日から彼はしばしば、国民に演説を聞かせるために街へ出てきていた。サイゲートも幾度か王子が人を集めている姿を見かけたが、彼の話を聞いたことはまだない。王子は街の緩み切った空気を断ち切ろうと努力しているようだったが、国民には戦の攻防が見えないのでうまくはいっていないようだ。それは今、王子を囲んで和やかに微笑んでいる人々を見ても一目瞭然である。

考えを巡らせていたサイゲートは意を決し、人だかりを離れて仲間の元へ戻った。そしてすぐさま、親方に声をかける。

「親方、少しいいですか？」

「ああ。先に戻っててもいいぞ」

親方に許可をもらってから、サイゲートは改めて王子を囲む人混みに加わった。今度は輪の外から見るのではなく人の壁を崩しながら進み、王子がよく見える場所まで移動する。よくよく見ると、王子は数人の若者相手に剣の稽古をつけているようだった。

真剣を手にしている若者の一人が、王子に斬りかかる。だが王子

は水が流れるような動きで相手の攻撃を制し、若者が持っていた剣を叩き落した。王子の美技に、観衆から歓声が上がる。だがそれは珍しい芸でも見たかのような声であり、負けた若者もヘラヘラと笑っていた。

サイゲートは直感的に、この空気は王子が求めているものではないと思った。これでは、ただの遊びである。王子は国民を鼓舞したいのであって、親睦を深めるために街へ下りて来ているのではない。笑っている王子が苛立っているように感じた時、サイゲートは自ら輪の中心に進み出ていた。

「オレも相手してもらっていいですか？」

その場の視線を一手に引き受けていることを感じながらも、サイゲートは王子だけを見据えて言った。王子は顔に笑みを貼り付けたまま、半ば自棄気味に頷く。

「ああ。この剣を使うといい」

民家の壁に立てかけてあった剣を王子が差し出してきたので、サイゲートはそれを受け取って感触を確かめた。初めて握る、抜き身の剣。斧を握る感覚とも違う、ずしりとした重さがあった。

「構えろ。俺が撃つから受け止めるんだ。反撃してもいい」

笑みを消した王子を構えをとったので、サイゲートも見よう見真似で構えた。ケンカの時と同じく、腰を落として相手を見据える。どんなに小さな動きも見逃すまいと目を凝らし、サイゲートは王子が動き出すのを待った。

構えをとってからさほど間を置かず、王子が斬り込んできた。受け止めた感覚から察するに、彼はそう力を入れていない。まだ安穏さを引きずっているのかと、サイゲートは力任せに王子の剣を押し返した。サイゲートが本気であることが伝わったためか、王子が目を瞬かせる。サイゲートは王子を睨みつけ、渾身の力をこめて大上段から剣を振り下ろした。

サイゲートが放った一撃は、避けられてしまった。だがサイゲートは幾度となく、王子に斬り込んでいく。王子が防戦一方だったた

め観衆から野次が飛んだ。女子供を中心に王子を応援する声、面白半分の男達がサイゲートを応援する声と、野次の内容も様々である。だがその場にいる誰もが、サイゲートと王子の対決を楽しんでいた。

ようやく王子が攻撃に転じてきたので、サイゲートは際どい身のこなしで剣を躱す。その後サイゲートが再び斬り込んでいくと歓声は悲鳴に変わった。

「王子さま！！」

「大変だわ！　血が！！」

腕から血を流している王子に女達が慌てて駆け寄る。肉を斬る感触をまだ手に受けながら、サイゲートは構えを崩さなかった。

「お前！　王子になんてことするんだ！！」

誰かが叫び、王子を案じていた人々の非難がサイゲートに集中した。しかしサイゲートは、それでも動かない。自分の身を案じてくれている女達への対応に追われていた王子もサイゲートの様子に気が付いて顔を上げた。

「……少し、離れていてくれ」

手当てをしようとしていた女達を押し退け、王子も再び構えをとる。互いに真剣を手にしているサイゲートと王子の間には不穏な空気が漂った。彼らが本気だと認識した観衆は青ざめて閉口する。

王子が構えたまま動こうとしなかったので今度はサイゲートから動いた。サイゲートが振り下ろした一撃を、王子は歯を食いしばって受け止める。そのまましばらく力比べが続いたが、勝ったのは王子の方だった。サイゲートの剣を横へと流し、王子は仕返しとばかりに腕を斬り付けてくる。

「っ、」

自分にしか聞こえないように呻き、サイゲートは顔を歪めた。もう剣を持っていられる力もなく、サイゲートの手を離れた剣が地に落ちて乾いた音を立てる。唇を噛んで周囲を見回すと、先程までの和やかさが嘘のように人々は重い沈黙に支配されていた。目的は達したようだったので、サイゲートは傷口を押さえながら歩き出す。

腕から血を滴らせているサイゲートに触れたくないと言わんばかりに、誰もが道を譲った。
人だかりを後にしたサイゲートは路地裏へと入り込み、周囲に人気がないことを確認してから体を投げ出した。民家の壁に背を預け、顔を歪めたまま傷口を見る。腕からの出血はまだ止まらず、血が地面を染めていった。
頭まで壁に預けたサイゲートは息を吐き、傷口を押さえている手に力をこめた。しかしいくら強く握ろうと、傷口を押さえている手も、腕も、傷とは無関係な脚すら感覚がない。だがそんなことより、何よりも堪えがたかったのは全身の震えだった。
「ここに居たのか」
不意に声が降ってきたのでサイゲートは目を開けた。瞼を持ち上げるなり飛び込んできた王子の顔に、サイゲートは少し嫌な顔をする。
「傷を見せてくれ」
言うが早いか、王子はサイゲートの傍らにしゃがみ込んだ。懐からハンカチを取り出した王子は、それをサイゲートの傷口に巻いていく。手当てをしながら、王子は話しかけてきた。
「名は？」
「……サイゲート」
「サイゲート、随分剣の扱いに手慣れていたな。誰かに習ったのか？」
「はじめてだよ」
「初めて？」
ちょうどハンカチを結んでいた王子の指に力が入り、それが痛かったのでサイゲートは顔を歪めた。サイゲートの苦悶の表情を見た王子は慌てて手を退ける。
「すまない。驚いて力が入った」
「……いたい」
「悪かったよ。それで、本当に初めてなのか？」

「剣は初めてだけど、オノなら毎日使ってる」
「樵か。どうりで力があるはずだ」
よほど不可解に思っていたのか、王子は納得したように頷いた。サイゲートが反応を返さないでいると、王子はすっと立ち上がる。
「応急処置はしたが、家できちんと手当てをしてもらってくれ」
すでに立ち上がっているのでそのまま去って行くのかと思いや、王子はサイゲートが起き上がろうとしないのを見て再び腰を下ろした。隣に座り込んだ王子を見てサイゲートは嫌な表情を作る。
「なに、となりに座ってんの？」
「いけないか？　少し、話をしたいと思っているのだが」
「……何の？」
「サイゲート、本気だったな？」
王子が真顔で尋ねてくるのでサイゲートはふいっとそっぽを向いた。
「さあな。そっちは手当てしてもらったのか？」
「ああ、それで足留めをくった。本当はすぐに追いたかったのだが」
「そんなカッコ悪いことするな。あんたは王子なんだから、カッコ良くしとけ」
「面白い奴だな」
笑いもせずしみじみと呟いた後、王子は黙ってしまった。サイゲートから話しかけることもなかったので、しばらく沈黙が流れる。だが会話がなくとも王子が立ち去る様子もなかったので、仕方なくサイゲートから口火を切った。
「あんたさ、オレが出てく前まで相手してた奴にイライラしてただろ？」
「……分かったか」
自身ではうまく隠せたと思っていたのか、王子は微苦笑を浮かべた。しかしすぐに笑みを消し、彼は真剣な口調で言葉を次ぐ。
「あまりの緊張感のなさに苛立っていた。だが、サイゲートがそれまでの緩みきった空気を一変させてくれた」

「剣なんか使ったことなくても、本気でやればあれくらい出来る」
「それを解らせたかったのか？」
「あんたがわからせたかったんだろ？」
「その通りだ」
素直に苦笑いをする王子に、サイゲートも素直に好感を抱いた。
こうして話をする以前、サイゲートは王子のことを『エライ奴』だと思っていた。それはサイゲートの周囲が皆そう思っていたからなのだが、何がどう偉いのかも解らず、王族だというだけで尊大に見えてしまい煙たがっていたに過ぎない。だがそのような思い込みは間違いなのだと、サイゲートは海雲に教えられた。そして等身大の王子と接して初めて、海雲の言葉を本当の意味で理解することが出来たのである。
「名前、聞いてもいいか？」
サイゲートが邪険な態度を改めると王子も自然な笑みを浮かべながら快く応じてくれた。
「これは失礼した。俺の名はアゼルという」
「アゼルか。そう呼んでもいいか？」
「好きにするといい」
「アゼル、ルシードって怖いな」
彼になら胸の内を明かせるような気がして、サイゲートはそれまで誰にも語ったことのなかった本心を口にした。話題が急に飛んだこともあり、アゼルは眉根を寄せる。
「恐ろしいと、感じるのか？」
しばらくしてからサイゲートの独白に応じたアゼルも、心なしか顔を強張らせている。やはり恐怖を感じていたのは自分だけではなかったと思いながら、サイゲートは怪我をしていない方の腕を持ち上げて見せた。
「さっきアゼルにやられた時と同じだ。まだ、止まらない」
体全体の震えは治まったものの、サイゲートの手は未だ小刻みに震え続けている。アゼルが無言で震える腕を見つめていたので、サ

イゲートも為す術なく自身の腕に目を落としていた。

まもりたい（3）

かげろうの森での攻防が始まってから、白影の里は大聖堂兵（ルシード）の命を相当数奪ってきた。しかし大聖堂兵はもともと流民の集まりであるうえ女子供、老人まで兵として使っているので一向に数が減ったという感じはない。その出来事が起きたのは、戦が始まってから何日目のことだっただろう。敵兵に不審な動きがあるという報告を受けた海雲が動向を探らせようと配下に指示を出していた時、異変は起きた。

「なんだ、この臭いは？」

異様な臭いが鼻につき、地図を見ながら指示を出していた海雲は眉根を寄せながら顔を上げた。海雲達がいるのはかげろうの森の中に特設された白影の里の幕営である。同じく異変を察した配下の一人が様子を見てこようかと海雲に尋ねた時、別の者が天幕に飛び込んで来た。

「大聖堂軍が森に火を放ちました！！」

「馬鹿な！！」

報告を受けた海雲は思わず、叫んでいた。自らの目で真偽を確認するため、海雲は天幕を飛び出す。そうして目にしたものは、夕暮れのように赤く染まっている空と森の入口付近に立ち上っている炎だった。

火を放つのであれば味方を撤退させてから行うのが普通である。そうした前兆があればもっと早く敵兵の動きを察せられただろうが、大聖堂軍にはそうした動きがまったくなかった。つまり彼らは、すでに多くの仲間が侵入している森に火を放ったのである。

（仲間まで焼き殺す気か！）

物が焼ける臭いが強まってくる中、海雲は熱風に立ち向かいながら非難の声を上げた。敵味方を問わず焼き殺そうなど、正気の沙汰とは思えない暴挙である。

「消火だ！　水を用意しろ！！」
怒声を散らしながら、海雲も消火のために走り出す。連中は狂っている、その呟きは誰にも届かず熱い風に消えた。

彼岸の森の浅いところでいつものように仕事をしていたサイゲートは、普段は姿を見せない動物達が群れを成して走り去って行く様を目にして眉根を寄せた。そうした動物達の異変は何かが起こる前兆である。サイゲートにはそこまでの知識はなかったが、尋常でない動物達の行動は不安を抱かせるのに十分な効力を発揮していた。
「何か、臭くねえか？」
「それに、いつもより熱いぞ」
異変を察知したのはサイゲートだけではなく、仕事仲間達も手を休めて不審そうな顔をしている。親方に周囲を窺うよう言いつけられたサイゲートは大木にとり付き、枝に足をかけて器用に登っていった。
地上からではよく分からなかったが、サイゲートが登った木は周囲の木よりも背が高かった。そのおかげで頂辺まで登らずとも周囲を見渡すことが出来たのである。北の空に目を留めて、サイゲートは愕然とした。夕方でもないのに紅に染まった空の下で、森が燃えている。
「親方、火事です！」
急いで地上に戻ったサイゲートは着地に失敗してよろけながら叫んだ。異変の原因が森林火災と聞いた仲間達は一様に狼狽したが、親方は一人涼しい表情をしている。
「とにかく、今日の仕事は終いだな。街に戻るぞ」

「はい」
親方が片付けろと指示を出したので、サイゲートはすぐに動き出す。突然の出来事に動きが鈍っていた仲間達も慌てて片付けを始めた。撤収の準備をしつつもサイゲートは考えを巡らせる。
（でも、何で……）
火事が起こる原因は落雷か火の不始末である。今日は朝から晴れていて雷など発生していないので、落雷が原因ということは有り得ない。それならば火の不始末によって森が焼かれる事態となっているはずだが、サイゲートにはその考えもしっくりこなかった。その理由は、火災の起きているかげろうの森が戦場となっているからである。
（……海雲）
斧を肩に担いだサイゲートは北の空を仰ぎ、その場所へ赴いているはずの友人の無事を祈りながら街へ向かって歩き出した。

街のほぼ中央に位置している赤月帝国の王城には、その日も平穏な空気が流れていた。王城の二階部分までは一般人でも立ち入ることが出来るが、それより上階は王族の私室などがあるため進入者は厳選される。そんな四階の一室、赤月帝国の王女である菜の花の私室にはこの国の次期王位継承者であるアゼルの姿もあった。
「世界地図で見た赤月帝国の所在地は？」
分厚い本を片手に窓辺に佇んでいるアゼルは書物に目を落とすこともなく問いを口にした。それに答える菜の花も、特に考える様子もなく言葉を紡ぐ。
「知っています。ドクロの左目から東でしょう？」

世界地図を開いた時、そこに大陸が一つしかない。大陸の西部には大きな湖が二つあり、これが地図の向きを右に九十度回転させると髑髏の双眼のように見えるのである。そのことから西北の湖を右目、西南の湖を左目と呼ぶことがあるのだ。菜の花がそうした俗称まで知っていたのでアゼルは頷き、それから問いを重ねた。

「では、左目の別称は？」

「陸の孤島と言うそうですね。湖に浮かぶ島なのに、陸の孤島なんておかしな話だわ。どうしてなのかしら？」

「……よく、勉強してあるな。今日はここまでだ」

菜の花が発した問いの答えは分からなかったので、アゼルは本を閉ざして白旗を上げた。王位に無関係な菜の花は世界の地理など学ぶ必要がないのだが、率先して様々なことを学んでいる彼女は下手をするとアゼルより博学であるかもしれない。妹の出来が良すぎることに兄としての複雑な思いもあるのだが、何故菜の花が勉強をしたがるのか知っているアゼルは仄かな笑みを口元に浮かべた。想い人に見合うよう知識をつけたいなどとは、なかなかに可愛い考えである。

「なんですか、お兄様？」

顔色を読まれてしまったのか、菜の花が鋭い視線を向けてくる。アゼルは苦笑しながら首を振った。

「あら？」

ふいっとそっぽを向いた先で、菜の花が声を上げた。彼女はそのまま窓辺に寄ったので、アゼルは首を傾げながら隣に並ぶ。

「どうした？」

「煙が上がっています。火事かしら？」

「火事？」

菜の花の思いがけない言葉に、アゼルは眉をひそめながら外を窺った。北に面している窓からは、遠くで火の手が上がっているのが見える。その出所がかげろうの森だったのでアゼルは顔を強張らせた。

「……お兄様」
アゼルと同じ危惧を抱いたようで、菜の花が不安そうな声を上げる。アゼルは見上げてくる菜の花の目をしっかりと見つめ返し、頷いて見せた。
「大丈夫だ。菜の花は城にいろ」
菜の花に言い置いてから、アゼルは彼女の私室を後にした。廊下へ出た途端、彼は厳しい顔つきになる。戦場で、何かがあったのだ。

まもりたい（4）

仲間と共に街へ戻ったサイゲートが目にしたのは、慌てふためく国民の姿だった。街からでは火災の様子を窺うことは出来ないが北の空が異様に赤く染まっており、焼け焦げた臭いは熱風に乗って街にまで吹き付けてきている。王から公表されたわけでもないのに敵が来るという情報が飛び交っていて、そのせいで混乱に陥った人々は何かを叫びながら走り回っているのだ。

「親方、城に行きましょう」

混乱を目の当たりにした時、サイゲートは真っ先に頭に浮かんだ提案を親方に話した。城へ行けば、アゼルがいる。彼ならばこの混乱を収めてくれるはずである。サイゲートはそう思ったのだった。

少し考える間を置いた後、親方はサイゲートの提案に頷いた。親方や仕事仲間に先に行って欲しい旨を伝え、サイゲートは彼らと別れて走り出す。人々は正気を失っているので誰かが誘導した方がいいと思ったからだった。

サイゲートは街を走り回りながら手当たり次第に王城への避難を呼びかけた。だが国民の数に対するのに一人では、どうにもならない。誰かいないかと思い周囲を見回したサイゲートは逃げ惑っている一人の青年に目を留めて傍へ寄った。

「あんた、確か自衛団に入ってたよな？　今、どうなってる？」

サイゲート自身は加入していないが、自衛団はよく街中を巡回していたので構成員の顔は何となく把握していた。だが青年は、忌々しいと言わんばかりの顔をサイゲートに向けてくる。

「そんなこと知るかよ！　逃げなきゃ、早く逃げなきゃ！」

青年の反応から察するに、敵が来るという情報に踊らされているのは自衛団も同じなようだった。サイゲートは青年のあまりの情けなさに眉根を寄せる。

「しっかりしろよ。逃げてる場合じゃないだろ」

「放せよ！！」
及び腰の青年の腕を掴んだ刹那、サイゲートの手は振り払われた。反射的に、サイゲートは青年を殴り飛ばす。力の加減など何もしていなかったので青年は倒れこんでしまった。
「しっかりしろ！！」
尻もちをついて呆然と頬を押さえている青年に、サイゲートは大声で呼びかけた。それでもまだ呆然としている青年を助け起こし、周囲のざわめきにかき消されないようさらに声を張り上げる。
「仲間を探して声をかけろ！！　逃げるなら城だ！！」
まだ我に返れていない青年の背を叩いて送り出し、サイゲートは周囲を見回した。呼びかけも虚しく、街ではまだ至る所で人々が逃げ惑っている。この調子では、いつ何処で問題が起こるか分からない。
（何とかしないと）
無駄かもしれないが、今は人々に城への避難を呼びかけることしか出来ない。ならば出来ることをやるしかないと、サイゲートは再び駆け出した。

私兵を引き連れて街へ出たアゼルは直属の配下である者達に城への避難を呼びかけるよう言い含め、自らも走り出した。この場合は散開した方が効率がいいので、アゼルも単身である。平和慣れした国民が不測の事態にどれほど対応出来るか甚だ疑問であったが、街では思ったよりも混乱が広がっていなかった。ここ数日の気の緩みからいって、もっと大規模な混乱が起きていてもおかしくなかったはずである。それを危惧して城を飛び出して来たアゼルは正直なと

ころ、首を傾げていた。
城を出てから郊外に向かって走っているアゼルは次第に多くの者とすれ違うようになった。それは人々が王城に向かって逃げているからである。どうやらアゼルが来る前に自衛団が、率先して避難を呼びかけていたらしい。
（……これほど機能出来るとはな）
自衛団は一般の若者達で構成された組織である。設立してから日が浅く、また訓練を積んでもいないので、アゼルはあまり当てにしていなかった。だが避難を呼びかけている者の中に見知った姿を発見し、アゼルは納得する。彼が動いてくれたことを嬉しく思いながら、アゼルは先日知り合ったばかりの人物の元へ走り寄った。
「サイゲート！」
「アゼルか！」
アゼルの声に振り返ったサイゲートはホッとしたような表情をした。その彼に、アゼルは笑みを浮かべて応える。
「サイゲートのおかげで避難は順調だ。火も、どうやら収まってきたようだ」
アゼルが指し示した北の空はすでに元の空色を取り戻しつつあった。汗だくで動き回っていたサイゲートにはまだ実感がないかもしれないが、熱風も弱まってきている。だが物が焼け焦げた悪臭だけは、まだ街にまで運ばれてきていた。
「とりあえずは、大丈夫そうか」
北の空を仰いだサイゲートが滴る汗を拭いながら言うのでアゼルも頷いて見せる。
「ああ。火が消えれば、城にいる人々も落ち着くだろう」
それだけを口にして、アゼルは言葉を途切れさせた。サイゲートも言葉を次ぐことをしなかったので沈黙が流れる。だが自衛団が城への避難を叫んでいる声が、未だにあちこちから聞こえてきていた。
「サイゲートが言っていたこと、本当だな」
若者達の懸命な声に耳を傾けながら、アゼルはぽつりと呟いた。

サイゲートが零していたように大聖堂（ルシード）は、恐ろしい。今回の一件で国民も少しは大聖堂の恐ろしさを実感しただろう。それはサイゲートも例外ではないようで、彼は北の空を見上げたまま静かに口を開いた。

「これで、終わりじゃないんだよな」

「ああ。むしろ、始まりかもしれない」

他人事ではない、戦争の始まり。そのことを実感じたのはアゼルもまた同じであった。

まもりたい（5）

かげろうの森で起きた火災を鎮めた後、海雲は幕営を引き払って街へ戻った。白影の里へも寄らずに王城へ急行したのは大聖堂（ルシード）の兵達が未だ近辺に展開しているからである。敵が荒っぽい手段でくるのなら、こちらも早急に対処しなければならない。

王城に到着した海雲は避難してきている国民を尻目に一般人が立ち入ることの出来ない上階を目指した。会議室などのある三階へ上ると、アゼルの姿があったので海雲は足を止める。アゼルの方でもすぐに気がつき、彼は小走りに傍へやって来た。

「海雲」

アゼルの顔には安堵が浮かんでいたが、彼はすぐ表情を改めた。海雲が微笑すら返さなかったからである。ぴりぴりとした空気を纏ったまま、海雲は不快を露わに口を開いた。

「街はどうだ？」

「自衛団が思ったより機能したので大きな混乱は起こらなかった」

「ほう。それは意外だ」

「俺もだ。ある人物の尽力によるところが大きい」

「国民の中にもまともな奴がいたんだな」

「そのようだ。それで、何が起こったのだ？」

「奴ら、いかれてやがる」

戦場での不愉快さを押さえきれず、海雲は毒を吐き出すように言った。海雲の激しい語気にアゼルが少し顔をしかめる。

「父は会議室だ。続きはそこで聞く」

「ああ」

海雲とアゼルはどちらからともなく歩き出し、その後は一言も交わさず目的の場所へと達した。アゼルが会議室の扉を開いたので、海雲は儀礼的に頭を下げてから入室する。室内にはすでに王や大臣達の姿があり、彼らは一様に海雲を見つめていた。海雲が険しい顔

つきのまま着座すると、王が口火を切る。
「状況を説明してくれ」
「はい。まず、かげろうの森において幾度かの攻防戦があったことをお伝えしておきます。大聖堂兵は曲り形にも軍人です、彼らは一応隊列を組んで森に侵入して来ました。そうした手合いは全て退けておりますが、隊もなく森に侵入してきている者も確認しております。個人で行動している者まで排除することは極めて困難ですが、かげろうの森は天然の迷路になっていますので放置しておいても問題はないでしょう」
ここまでは、すでに王城にも届けられている情報である。会議室にいる者は全て耳にしているはずなので驚きやざわつきはなかった。沈黙が先を促していたので、海雲は報告を続ける。
「大聖堂軍は幾度目かの侵攻を開始しました。先に述べました通り具体的な数は把握していませんが、先行して森に侵入している者も合わせますとかなりの数になるかと思われます。敵は、かげろうの森を前に攻めあぐねていました。いっこうに進軍しないことに痺れを切らしたのでしょう、彼らは森に火を放ったのです。先行している仲間もろとも、我らを焼き殺すために」
そこで海雲が言葉を切ると室内には息を呑む気配が漂った。王もアゼルも大臣達も、絶句している。
火災自体は、実は大したことのないものであった。とは言っても、それはかげろうの森の規模と消失した面積を比較しての見解である。消失してしまった面積と白影の里が割ける人員を比較すれば、それはまた違う見解を生じさせる。だが人員不足より問題だったのは、火災に対する準備をしていなかったことだ。森に火を放たれるなどということは想像もしていなかったので水を用意するだけで時間がかかってしまい、それが結果として被害を拡大させてしまった。対応が後手に回ってしまったのは自身のミスであるので、海雲は鎮火に時間を要してしまったことを詫びてから報告を続ける。
「焼け野原からは夥しい数の焼死体が発見されております。我が里

に人的被害は確認されていませんので、それらは全て大聖堂の兵です」
戦の現状が想像を遥かに超えてしまったのだろう、誰からも反応は返ってこなかった。一様に沈黙している面々を見回し、海雲は言葉を次ぐ。
「大聖堂の上層部は赤月帝国を聖地と信じ込ませ、兵達を動かしています。長く平和な時代の続いた我が国を、神に守護された場所だと広言しているのです」
「……都合の良いことばかりを。よく言えたものだな」
そこでようやく、アゼルの口から怒りとも呆れともつかない呟きが洩れた。赤月帝国は神が治める地でもなんでもなく、争いを嫌う人々が長い歳月をかけて護ってきた土地である。アゼルのそうした考えには同感だったが一瞥するに止め、海雲は王を振り返った。
「大聖堂の上層部は宗教をうまく操っているのです。だから兵である彼らに罪はないと、そう思ってきました。しかし、いくら追い詰められているとはいえ森に火を放つなど限度を超えた暴挙です」
判断を仰ぐというのではなく、海雲は王に語りかけるように説いた。海雲が何を言いたいのか察したようで、王は無駄な問答を挟まず核心に触れる。
「ならば、どうする？」
「今の彼らは聖地というまやかしに目が眩み、何をするか解りません。こちらも対策を練るための時間が必要です。ですから、一度壊滅させて追い返したいと思います」
「……そなたに任せよう。火の対策はこちらでも考えておく」
「承知致しました」
打てば響くような王の聡明さに敬意を表し、海雲は立ち上がって一礼する。その足で踵を返し、海雲は足早に会議室を後にした。

海雲が立ち去ってからも会議室はしばらく静寂を保っていた。最前線で戦う者からの報告は平和に慣れている者達の想像を遥かに超えており、誰も意見することが出来なかったのである。しかしやがて、王が重苦しい沈黙を破った。

「アゼルよ、そなたの友は怒っておるな」

父に苦笑を向けられたアゼルは海雲が去った扉から目を外し、そちらに視線を傾けた。

「そのようですね。いくら戦乱の世とはいえ、何をしても許されるという訳ではありません」

「大聖堂（ルシード）は痛手を被るな」

「よい薬でしょう」

敵を勢いづかせてはならない、というのが海雲の考えだろう。それは道理であり、自国の被害を抑えるためには敵兵の心情にまで気を配っていてはならないのである。海雲がどうやって敵兵を殲滅するのかは分からないが、彼の冷酷さは至極真っ当なものと言わざるを得なかった。だが王は、敵兵が命を落とすことにまで心を痛めている様子である。困ったような笑みを浮かべている父の顔を見据え、アゼルは一抹の不安に駆られていた。

（父は、優しすぎる）

追い返されたからといって、彼らは赤月帝国から手を引こうとはしないだろう。そのことは今まで幾度か繰り返されてきた攻防戦からも明らかであり、戦はまだ続くのだ。長期化すればするほど弱っていくのは赤月帝国の方だと実感したアゼルは、口にはせずに戦の早期終焉を願ったのだった。

赤月帝国の由来ともなった血を流したような紅い月が、今宵も虚空に浮かんでいる。その月が間もなく姿を消そうとしている夜明け前、一日の中で最も暗い時分に海雲は白影の里の者を集めた。かげろうの森の深奥に集った者達は白装束に身を包んでいるため、彼らがいる場所だけ闇が影を潜めている。

「相手は女子供、老人も混じっているが我等の赤月帝国を侵略しようという敵だ」

全ての者が白い布で顔を覆い隠している中、唯一顔を晒している者が発する声はよく通り、暗闇へと消えていった。白装束の者達は黙して、その時を待っている。

「殺せ。一人残らずだ」

棟梁である海雲の言葉を合図に、白い影達は闇へ溶けていく。首元の布を持ち上げて顔を隠した海雲も短刀を抜き、すぐさま月の消えた夜に潜り込んだ。

まもりたい（6）

森林火災から数日後、王城に避難していた人々も街に戻り、赤月帝国は本来の静けさを取り戻していた。公式な発表では森の一部分が消失しただけで街に影響などはなく、敵兵が街に迫って来ていたという噂もでたらめであるとのことだった。敵兵は現在、かげろうの森からも撤退しているらしい。だが国に帰ることはせず、未だに赤月帝国の交通路を遮断するように展開しているというのが実情である。そうした情報を得たサイゲートは、ある不可解さに首を捻っていた。

大聖堂（ルシード）軍は、かげろうの森を焼いた。それは彼らが攻勢に出たということである。サイゲートには軍事のことは分からないが、勢いに乗ったはずの敵がどうして撤退を決めたのか不思議だった。喧嘩の時でさえ、勝つためには相手の弱みにつけ込む。相手が受身になった時こそが攻勢に出るチャンスなのだが、大聖堂軍はそれをしなかった。その理由を考えた時、サイゲートの脳裏には自然と海雲の顔が浮かんできていた。

サイゲート自身捕らえられた経験があるだけに、白影の里の者達が気配を殺すことに長けていることを知っていた。彼らを相手にすると知らぬ間に接近を許し、気付いた時には手も足も出ない状態にまで追い込まれているのだ。さらには海雲が、里の者は全員が殺人術を使いこなすのだと言っていた。だからおそらく、森を焼いた勢いに乗っていた時ですら大聖堂軍は勝てなかったのだ。

（でも、きっとまた攻めて来る）

それはもはや推測ではなく確信であり、サイゲートは粘着質な恐ろしさを肌で感じながら胸中で独白した。

火災の後始末も終わり、諸事が一段落した海雲は報告のために王城を訪れていた。そこで王の口から出た言葉は、海雲も考えていたものだった。
「対火用に堀を作ろうと思うのだが」
失敗から学ぶ王の姿勢は謙虚であり、また提案自体も有益だったので海雲は即座に頷いて見せた。その後さっそく、実施の具体案を検討する。
「ならば、街全体を囲うように水を引きましょう。王宮の周囲は二重になるよう、さらに水を引きたいと思います」
赤月帝国にはすでに、街中を流れている川がある。この流れを変えるように工事を行えば、一から造り上げるのとは比べ物にならないほど早く堀が完成するだろう。王も無論、そのことを視野に入れての提案のようだった。
「どの程度の時間を要するであろう？」
「昼夜交代制で国民を総動員し、二月で完成させましょう」
「大聖堂（ルシード）が再び軍を出してくるには、どれほどの時間がかかると見る？」
「仕置きがだいぶ堪えたでしょうから軍の再編などで、やはり二月ほどかと。無理を押してでも冬になる前には来るでしょう」
赤月帝国周辺は豪雪地帯である。ただでさえ深い森や切り立った崖のせいで天然の要塞だというのに、雪にまで阻まれてしまっては侵攻どころではなくなる。だから必ず、冬になる前に攻めてくるはずなのだ。そうした海雲の考えは通じているようだったが、王は眉根を寄せた。
「際どいな」

「なんとか致します」
「指揮はアゼルにやらせる」
「適任でしょう。里からも王子を補佐する者を数名派遣します。後は余裕があればということで、よろしいでしょうか？」
「うむ。よろしく頼む」
「かしこまりました。では、早速手配致します」
王に一礼して、海雲は謁見の間を後にした。しかし考えを巡らせているのは王だけではなく、海雲もまた眉根を寄せて腕を組む。
（問題は水だな）
赤月帝国は生活に使用する水の全てを森の恵みに頼っている。街中を流れている川も源泉は森にあり、この水を使って水路を巡らせることは対火対策に限らず有益である。だが街全体を取り囲む堀を作るとなると、それでは到底足りない。それに水源が一つに限られていると籠城戦になった時に水路を断たれる恐れがある。
（新たな水源を確保しなければならないな）
城内二階にある謁見の間を後にした海雲は考えこみながら歩を進めて階段を上り、四階にあるアゼルの私室の扉を開けた。思案を巡らせている海雲の顔を見たアゼルは、すぐに事態を察した様子で声をかけてくる。
「父に難題を突きつけられたか？」
「それを背負い込むのは俺じゃない。お前だよ、アゼル」
「それは是非、こちらへ来て茶でも飲みながら聞かせてもらいたいものだ」
長話になると感じたのか、アゼルは茶の準備を始める。海雲はアゼルの部屋にある長椅子に腰掛け、準備が整うのを待った。
「それで、どのような話だ？」
水出しの茶をグラスで差し出された海雲はアゼルに礼を言いながら受け取り、一息に干した。よほど喉が乾いていたのかと笑いながら、アゼルは空になったグラスに褐色の液体を満たす。今度は口をつけることをせず、海雲は本題を切り出した。

「街全体を囲むように堀を造ることになった。その工事の指揮をとるのがお前だ」
「それは、随分大掛かりな作業になるな」
「二月で完成させてくれ」
「また無茶なことを」
街を取り囲む堀を造るなど、本来であれば半年はかかる大事業である。アゼルが呆れ顔をするのは無理もないことだったが、海雲は淡々と説明を続けた。
「昼夜交代制で国民を総動員すれば出来ない話じゃない。対火用だけでなく罠や飲用としても重要なものだ。里からも技巧に優れた者を補佐として出そう」
「ならば、そう難題でもないのではないか？」
「問題は水だ」
「ああ、なるほど」
海雲は何故水が問題となるのか説明しようと思っていたのだが、アゼルはあっさり納得してしまった。戦が始まる前はしょっちゅう街に繰り出していた彼は、もしかしたら海雲よりも国内の地理に詳しいのかもしれない。
「そういうことならば国民の方が詳しそうだ。樵に知り合いがいる、聞いてみよう」
何処でどう知り合いになるのか、アゼルの交友関係は幅が広い。海雲が呆れと感心を含ませながら「顔が広いな」と言うとアゼルは笑って見せた。
「面白い奴だよ。今度紹介する」
「そりゃ楽しみだ」
アゼルの言う『今度』は、少なくとも戦が終わって後の話になるだろう。こんな和やかな空気は長く続かないと解っていたため、海雲は束の間の憩いにゆっくりと茶を味わった。

まもりたい（7）

街が落ち着きを取り戻してから数日後、王から街全体を囲む堀を造るとの通達があった。通達によると国民総出、昼夜交代制で働かなくてはならないらしいが、かげろうの森を焼かれたこともあって反対する者はいなかった。しかしまだ具体的な動きはないので、サイゲートはいつも通り彼岸の森で斧を振るっている。アゼルが訪ねて来たのは、ちょうど背の高い木を一本切り倒した直後の出来事だった。

「水源？」

アゼルが再会の挨拶もそこそこに本題を切り出したのでサイゲートは汗を拭いながら首を傾げた。アゼルは真顔のまま頷いて見せる。

「堀にはある程度の深さがいる。それに水源を一つにしておくことは危険なんだ。だから新たな水源を見つけたい」

「なるほどな。ちょっと待ってくれ」

アゼルに言い置いてから、サイゲートは森の奥へ向かって声を掛けた。返答はなかったものの、やがて森の奥から親方が姿を見せる。親方はアゼルを一瞥しただけですぐに視線を逸らし、サイゲートを見た。

「なんだ？」

「今使ってる川以外に水源って思い当たりますか？」

「この森の川は全て一つの源泉から分かれている。新しい水源を探すなら、掘るしかないな」

「だ、そうだ」

親方の解説をそのままアゼルに流すためにサイゲートは彼を振り向いた。アゼルは何かを考えている様子で沈黙していたが、やがて目を上げてサイゲートを見る。

「サイゲート、ご家族の方に話がある」

アゼルが唐突にそんなことを言い出したのでサイゲートは意図が

解らないまま親方を見た。サイゲートの視線を追ったアゼルも親方を振り向いたので、親方は無表情のままアゼルを見る。
「こちらが、ご家族の方か？」
サイゲートに顔を戻したアゼルは念を押すように尋ねてきた。サイゲートが頷くと、アゼルは表情を改めて親方に向き直る。
「しばらく、彼を貸していただけないでしょうか？」
「どういうことだ？」
アゼルの申し出に応えたのは親方ではなくサイゲート本人だった。サイゲートが口を挟んだので、アゼルは意図を明かす。
「工事の指揮を任された。俺一人では見えないこともあるだろう、労働者である国民の代表が補佐に欲しい」
「ああ、そういうこと。親方、行ってもいいですか？」
「……好きにすればいい」
親方は素っ気なく言うと森の中へ戻って行った。彼が無愛想なのはいつものことなので気にせず、サイゲートはアゼルを促して歩き出す。
「あの人が父親だったのだな。親方と呼んでいたので気付かなかった」
二人きりになると、アゼルはそんなことを口にした。アゼルが何を気にしていたのか納得のいったサイゲートは淡々とした気持ちで話に応じる。
「血のつながりはないからそう呼んでるんだ」
「……悪いことを聞いたか？」
「別に、気にしてない」
意表を突かれて困ったような表情をしているアゼルにサイゲートは首を振って見せた。一時は気にしていたこともあるが、事実は事実でしかないのである。だがアゼルの方が気にしてしまったようだったので、サイゲートは早々に話題を変えた。
「それより、二月で完成させるって本気なのか？」
「ああ。それが、次に敵が攻め込んで来るまでの目安らしい」

「そっか。冬が来れば雪にジャマされるもんな」
赤月帝国は豪雪地帯である。冬になれば雪が進路を阻み、退路を消してしまう。それは何も軍隊だけに限った話ではなく、森と共に生きているサイゲートは雪の脅威を自然なこととして知っていたのだ。だがアゼルにはサイゲートの発言が意外だったらしく、彼は目を瞬かせている。
「頭の回転が速いな。樵にしておくのは勿体ない」
アゼルが妙な褒め方をするので、どう反応を示したらいいか分からなかったサイゲートは軽口で濁した。
「口がうまいな」
「世辞ではない。俺はサイゲートを評価している」
今度は事のほか真剣な表情に出会い、サイゲートは言葉を詰まらせる。アゼルは本気で言っているようで、彼は真面目な顔つきのまま言葉を次いだ。
「城に召して、俺の伴をしてくれてもいいのだぞ？」
ついには率直に誘われてしまったのでサイゲートは苦笑いを零す。だがアゼルが真剣な目で見ていたので、サイゲートは笑いを収めて肩を竦めた。
「なんか、最近やたらとさそわれるな」
「他にも勧誘があったのか？」
「あったけど、ことわった。親方に育ててもらった恩があるから俺は何処にも行けないよ」
「……そうか。無理を言って悪かったな」
アゼルの謝罪には今回手伝いをすることになったことも含まれているようだったのでサイゲートは即座に首を振った。
「堀を造るのはみんなの安全のためだし、二月くらいなら大丈夫だよ」
「そう言ってもらえるとありがたい。では、存分に働いてもらうぞ」
今度はうって変わった爽やかさで、アゼルは白い歯を見せて笑う。まるで子供のようにころころと変わるアゼルの態度がおかしくて、

サイゲートは本気で笑った。

見張りの人員だけを残してかげろうの森を引き払った後、海雲は白影の里へ戻って来ていた。今のところ再び森へ侵攻してくる気配もないので、今はまだ自宅と王城を往復する生活を続けていられる。だが程なく、再び衝突する時が来るだろう。それまでにやっておかなければならないことは山積しており、海雲はあれこれと思案を巡らせていた。現在、最優先に考えなければならないのは堀の造成である。ひいては堀の完成に不可欠な水源の確保が最大の課題だった。

冬になると雪の多い赤月帝国周辺は地下水が豊富であり、森に湧いている水に全てを頼ってきた。これが街中を流れる川の源泉である。戦争もなく爆発的に人口が増えることもなかったので、今まではそれで充分だったのだ。だが街全体を囲う堀を満たすとなると、それでは足りない。現在使用している泉の他に水脈がないか探っているが、今のところいい報告はなされていなかった。

「西の崖の方は見てきたのか？」

屋敷へやって来た配下の報告を聞き、海雲は難しい表情をしながら問いかけた。赤月帝国の西端は絶壁になっており、まだあまり調査が進んでいない。期待をかけるのであればそこくらいなものだが、配下の返事は色好いものではなかった。

「はい。崖の向こうには山が連なっておりましたが、こちらに向いている流れはないようです」

配下の言葉を聞いた海雲はふと、世界には「火器」という武器があることを思い出していた。爆発を任意に引き起こせるという火器でも使えば水の流れを変えることが出来るだろうが、残念ながら白

影の里にはその技術がない。人力で立ち向かうには西の崖は強敵であり、時間もあまりないので諦めるしかなさそうである。
「やはり地下水脈を掘り当てて、それでなんとかするしかないな」
「はい。それでは、調査を続けます」
配下が退出して屋敷の中に人気がなくなってから、海雲は腕を組んだ。地下水脈を掘り当てたところで水源は同じである可能性が高い。堀を完成させることは出来るかもしれないが、籠城戦となった場合に水源を押さえられると命取りになりかねないことは変わらないのだ。
（問題は数だ）
籠城戦になるほど接近を許すつもりもなかったが、大聖堂（ルシード）が赤月帝国の三倍以上の人手を抱えていることも事実である。兵の質はこちらの方が高くても、一度に攻め寄せて来られたらひとたまりもない。森で敵を食い止めることが防衛線の要だが、広大な森の全てを監視出来るほどの人手はないのだ。
（……細かな問題を挙げていても、きりがないか）
少し頭を休めようと、海雲は息を吐いて首を振った。
人手不足は様々な箇所に見受けられるが、国民に戦争をさせる訳にはいかない。必死で、狂いかけている連中に、それでどこまで対処出来るのか。仲間もろとも敵を焼き殺そうとする凶行を目の当たりにしてから、海雲が抱える不安は日増しに強まってきていた。
（いっそ、こちらから攻めて出れば簡単に片がつく）
かげろうの森を焼かれた日から幾度となく考えてきた科白が脳裏を掠めていく。だがそれは赤月帝国の軍隊として、してはならない行為なのだ。だから海雲は赤月帝国の領土であるかげろうの森より外では敵兵に攻撃を仕掛けないよう里の者に命じている。森を焼かれて後の掃討戦ですら、忠実にそれを守ったのだ。だがもはや王城に上ったら進言してしまいそうで、海雲は人知れず唇を噛みしめた。

まもりたい（8）

突然の撤退以来、大聖堂（ルシード）軍が再び攻めて来る気配はなかった。そのおかげで街は平穏を保っており、治水工事も順調に捗っている。

『サイゲートのおかげだよ』

堀を造る工事を始めてから、アゼルはよくそんなことを口にした。かげろうの森が焼かれて街が混乱に陥った時のサイゲートの働きが若者達の支持を集めており、自衛団が機能し始めたことが工事を捗らせている要因だからだ。サイゲートにその気はなかったのだが、いつの間にか自衛団のリーダーのように扱われている。集団の力が生きるなら今はそれでいいと、サイゲートも拒否しないでいた。

夕暮れが迫っているにもかかわらず、水の入っていない堀の中では多くの国民が作業をしている。短い秋が過ぎ去ろうとしている時分、国民総出で掘り進んだ道は間もなく完成を迎えようとしていた。

「彼らはよくやってくれたよ」

造成の様子を眼下に見るために特設された高台の上で、泥だらけの顔を夕陽に染めているアゼルが笑みを浮かべながら言った。サイゲートも口元に笑みを浮かべ、隣に佇むアゼルを振り返る。

「お前がいたからだよ、アゼル」

アゼルは工事の指揮者としてだけでなく、肉体労働者としての働きもしてきた。次期王位継承者のくせに、彼は朝から晩まで国民と共に汗を流してきたのである。先導する者がそうした姿勢を見せていたからこそ、国民も挫けることなく頑張ってこられたのだ。

「人間って正直だよな。気に入らなければやらないし、気に入ればいっしょうけんめいになる」

多くの人間が集まれば反りが合わない者の一人や二人いるのが当然であり、トラブルも生じてくる。実際、工事を進めている途中では幾度も問題に直面した。そうした問題を解決してきたのはアゼルなのだが、彼は諍いが起きた場合、工事を中断させてでも当事者同

士に話し合いをさせるのだ。双方の言い分を聞き、どちらが悪いとも決め付けず、柔軟な対応をする。そうしたアゼルの姿を間近で見てきたサイゲートは、いい勉強をさせてもらったと思っていた。
「人間は感情の生き物だ。扱い易いのか扱い難いのか、未だに判らないな」
アゼルが理屈っぽい返事を寄越したのでサイゲートは呆れた顔をした。
「ほんとは、あんまりそーゆーこと考えてないだろ？」
「解るか？」
アゼルがイタズラっぽい笑みを浮かべたのでサイゲートも声を上げて笑った。たまに王子らしいことを言ってみても、アゼルはアゼルでしかない。それは、いつか海雲が言っていたことでもあった。
再び堀の方へ顔を戻したアゼルは夕陽に晒されて目を細め、和やかな調子で言葉を紡いだ。
「今年は収穫祭が流れてしまったからな、注水時には祭でもやるか。頑張ってくれた国民を労いたい」
「さんせい。一日くらい息抜きさせてもらいたいな」
「その際には是非、城の方へ来てくれ。サイゲートを父にも紹介したい」
「オレはいいよ。レイギとか苦手だし」
アゼルが言葉を続けようとした時、下から声が掛かった。これ幸いと、サイゲートは話を切り上げる。
「ちょっと行ってくるな」
短く言い置いた後はアゼルの返事を待たずに踵を返し、サイゲートは木製の階段を駆け下りた。

当初の予定通り、二月で堀は完成した。すでに注水も終わっているので労働者であった国民も平素の生活に戻っている。街は平穏な静けさを保っていたが王城の二階にある謁見の間から見える景色は様変わりしており、大事業の成功を示していた。

赤月帝国内のほぼ中央に位置している王城の周囲には二重になるように水路を巡らせた。そして堀の上に橋を渡し、侵入口を限定したのである。この吊橋を通って王城へやって来た海雲は、強行軍だった工事を予定通り終わらせたアゼルに密かな賞賛を送っていた。だが注水の際に国民を労う意味を込めて祭をしたいという案は却下した。休息を与えることは必要だが浮かれられても困るからだ。そもそも、何のために堀を造らなければならなかったのか。完成したことに有頂天となっている今、その本来の意味は忘れ去られている。敵の姿が見えない長い膠着状態に、アゼルでさえ緊張の糸が緩んでいるようだった。

（敵はもっと恐ろしいものなんだ）

常に気を張りながら言葉に出来ない恐怖に耐えてきた海雲は苛立ちを隠せなかった。おそらくアゼルも少なからず恐怖心は抱いているのだろうが、度合いが違いすぎる。

「大聖堂（ルシード）も準備が整った様子だな」

王が口火を切ったので窓辺を離れた海雲は改めて玉座の下に跪いた。自国の軍隊とは別に個人的な間諜を放つほど警戒している王は、楽観視できる事態ではないことを理解しているようである。そうした王の態度に救われたような気がしながら、海雲は報告を始めた。

「大聖堂は全勢力を一つ所に集めております。まもなく冬になりますので、おそらく演習ではないかと思われますが」

「全軍を使った攻撃の演習、か……」

「一見しただけで、まだ倍以上の兵力差があります。一度に攻め込

まれると思うと、恐ろしい限りです」
「やはり、かげろうの森から来るか？」
「西の崖は相当に訓練を積んだ軍であっても困難な道です。侵入口はかげろうの森しかありません。ですが森ならば、こちらも手の打ちようがあります」
「もし、崖を越えて来たのなら？」
「西の崖は足場が悪く、小隊ごとでないと進行することが出来ません。その場合、森と同時進行でないと意味がないと思われます。どちらか一方からですと刻をかけずに追い払えます。ですがもし、崖を越えた軍に街を占拠され森からも進撃されるとなると……」
「いや、結果は聞くまでもないな」
海雲が言いかけた内容を汲んで、王は首を振った。
挟撃された場合、街は混乱の渦に呑み込まれるだろう。城にまで白影の里の者を配備する余裕はないので、街中の防衛は王族の私兵や自衛団に頼らざるを得ない。しかし職業軍人である白影の里の者とは違い、王族の私兵や自衛団は戦を知らない民である。あまり当てにはならないので、街に侵入された場合は森を引き払うより他ないだろう。そうなれば森からの侵入を許し、街中で大聖堂軍は合流する。あとは籠城するしかないが、倍以上の兵力にいつまで耐えられるのか。
（一度侵入されれば、負けだ）
海雲の考えを理解して同意しているからこそ、王も口を閉ざしている。海雲も口を噤んだので謁見の間には重苦しい沈黙が漂った。
「……恐ろしいな」
巨大な、抵抗出来ないほどの波が押し寄せて来ようとしている。王が発した呟きに似た言葉に、海雲は真顔で頷いた。

まもりたい（9）

堀の工事も無事に終了したので、サイゲートは樵の仕事に戻っていた。近頃は日中に太陽が出ていても風が冷たく、気温が上がらない。そして今日は森で斧を握る手が、一段と冷たかった。

（……？）

ふと、何かが視界をよぎったような気がしてサイゲートは顔を上げた。薄日に照らされた白い曇り空からは、ひらひらと小粒が舞い降りてきている。

（どうりで、寒いと思った）

斧を振るう手を休めたサイゲートは凍えそうな両手に息を吐きかけた。呼気もまた白く、曇天に上っていく。

空から舞い落ちて来る頼りなげな白い粒が量を増すと、森に入れないくらいに降り積もる。それが赤月帝国の冬なのだ。

この日、赤月帝国に冬の訪れを告げる初雪が降った。

初雪の到来と共に赤月帝国は白く染まった。進路を雪に阻まれた大聖堂（ルシード）軍はもう、春の雪解けまで進軍して来ないだろう。念のための監視は怠らずにいるが、雪が森を染めたことで海雲もようやく一息ついていた。

「痩せたな」

久し振りにアゼルの元を訪れると、顔を合わせるなりそんなこと

を言われた。海雲は苦笑いを零しながら王城にあるアゼルの私室へ進入する。
「戦が終われば元に戻るさ」
「雪に閉ざされたのだ、もう少し気を休めても良いのではないか？」
「そうも言っていられない。自然とは、気まぐれなものだからな」
雪の多い赤月帝国では毎年、何かしらの雪害が発生する。戦とは別に、これからは自然災害にも備えなければならないのだ。海雲がそのことを伝えるとアゼルも真顔に戻って頷いた。しかしすぐ、アゼルは表情を崩す。
「今日は、時間があるのか？」
「至急の連絡が届かなければな」
「だったら街へ行かないか？　紹介したい人物がいる」
アゼルは以前にもそんなことを言っていたが、海雲が特に用事もなく訪れる機会を待っていたようだった。アゼルには海雲の知らない友人も多いが、彼が誰かを紹介したいと言い出すことは稀である。アゼルにそれほど気に入られた人物とはどんな奴なのか、興味を抱いた海雲は頷いて見せた。
「いいだろう。ちょうど街の様子も見たいと思っていた」
「では、さっそく行こう」
思い立ったら即行動に移すのがアゼルであり、彼はさっそく外套を着込んでいる。外からやって来たばかりの海雲はアゼルの支度の早さに呆れた。彼は扉の所に佇んでいた海雲の脇を通り過ぎ、もう廊下に出ているのである。海雲も後を追い、先を行くアゼルの背中に声を投げた。
「街へ出る前に、姫にも挨拶しておかないとまずいだろ」
「やめろやめろ。街へ出るどころではなくなる」
振り向きもせずに言うアゼルはどんどん歩を進めて行く。海雲は進行方向とは逆を振り向いたが、アゼルが歩みを止める気配もなかったので仕方なく後を追った。
「これからは今までのように外出できなくなるな」

堀に掛けられた橋を渡っている時にアゼルの日頃を思い出した海雲は何気なく声をかけてみた。戦が始まる前までは、アゼルは供回りも連れずに街へ出かけていたのである。だが堀のせいで交通路が限られてしまい、橋を渡らなければ街へ行くことが出来なくなった。今までのように城を抜け出すのは困難なはずだが、アゼルは何とも思っていない様子で平然と応える。

「なに、抜け道を使えばいいだけだ」

「……そんなもの造ってたのか。俺は聞いてないぞ」

「後で設計図を渡そう。城の者には内緒にしておいてくれよ」

軽快に笑うアゼルは、今後も城を抜け出す気が満々のようである。抜け道の本意は万が一の時の脱出路だろうが、海雲は呆れて閉口した。

西日の差さない夕暮れの街は家路を行く人々を急き立てていた。街には早くから明りが灯されており、雪の中で淡い暖色が揺れている。街道には人が少ないので寂れた印象を与えるが、海雲には家々の窓から零れる明かりが平素よりも存在感を持っているよう感じられた。

「毎年、雪の時期は静かだな」

自身の呼気が上空へ昇っていくのを眺めながら、海雲は独白を零した。外にいても寒いばかりなので、人々はそれぞれの家にこもり家族と食卓を囲むのである。体を芯から温めようとする男達で酒場も繁盛しているはずだ。

「活気が見える方がいい。人間(ひと)が生きているという感じがする」

「お前は本当に人間(ひと)が好きなんだな」

いつでも、許されさえすればアゼルは人の輪の中にいた。支配者が監視するというのではなく、彼は純粋に人間が好きなのだ。その証拠に、アゼルはいい笑顔を浮かべた。

「ああ。もっと多くの人と話がしてみたい」

その科白を聞いたとき海雲はふと、アゼルはいつかこの国を出て行くのかもしれないと思った。

「……それで、そいつはどんな奴なんだ？」
「破天荒な奴だよ。初対面から印象的だった」
話を逸らした海雲を訝るでもなく、アゼルは話に乗ってきた。海雲もあれこれと考えるのは止め、表情を明るくする。
「ほう。何かやらかしたのか？」
「俺が経緯を説明するより本人に会った方が早い。きっと、海雲も気に入ると思う」
喜々として語るアゼルは城を出てから東に向かって歩を進めている。海雲はこれから会う人物に思いを馳せていたがふと、あることに気がついて眉根を寄せた。
「このまま彼岸の森の方へ行くのか？」
「ああ。樵だからな、森の近くに住んでいる」
「樵……」
アゼルの科白を繰り返しながら海雲は思案に沈んだ。この辺りは彼岸の森が近いが、海雲が王城へ上るために使っている道ではない。だが近頃、海雲は彼岸の森からこの近辺に出向いたことがあった。
（まさか……）
ある友人の顔が浮かんできて、海雲は嫌な予感とも嬉しさともつかない奇妙な感覚に襲われた。アゼルがどんどん東へ進んで行くので推測は次第に確信へと変わっていく。そしてアゼルの足は、知った家の前で止まった。久しぶりに訪れる手狭な家を見渡していると海雲はどんな表情をしていいのか分からなくなってしまった。
「ここだ。家にいるといいのだが」
アゼルが扉を叩くと、しばらくしてから応答があった。姿を現したのは中年の女であり、彼女はアゼルの顔を見ると置物のように固まってしまった。アゼルが柔らかい口調で話しかけているのを横目に、海雲はこの家で聞いた破壊音と金切り声を思い返して人知れず苦笑する。
アゼルの意を受けた女は慌てて家の中に引き返して行った。程なくしてサイゲートが姿を現したのだが、その背後には先程の女と娘

と思われる若い女の姿がある。後ろから好奇の視線が送られてきていることに気付いたサイゲートは家を出て、扉を閉ざしてから改めてアゼルに向かった。
「ビックリした。急にどうしたんだ？」
「食事時にすまない。今日は友人を紹介しようと思って訪ねたんだ」
友人と聞き、サイゲートの視線がアゼルから離れる。海雲と目が合うとサイゲートは驚きを収めて真顔になった。サイゲートから向けられているまなざしを正面から受け止めながらも海雲は無言でいる。誰も口を開かなかったので仲介人であるアゼルが口火を切った。
「紹介しよう。白影の里の棟梁で、俺の友人の海雲だ」
すでに面識のある者に改めて紹介されると、海雲はくすぐったい気分になった。それはサイゲートも同じなようで、彼も妙な表情をしている。だがお互いに言葉はなかったのでアゼルが一人、話を続けた。
「サイゲートだ。堀の工事の時は世話になった」
アゼルに引き合わされた形で、海雲とサイゲートはお互いに歩み寄る。黙っていることに耐えられなくなった海雲はサイゲートに先立って口を開いた。
「お前、樵だったのか」
「言ってなかったか？」
「知らなかった。それで、何で黙ってたんだ？　隠してたのか？」
「まさか」
「人が悪くなったな」
「誰かさんのおかげかもな」
サイゲートが平然と言ってのけるので堪えきれなくなった海雲は吹き出した。それを合図に、サイゲートも笑い出す。
「久し振りだな、サイゲート。そうか、お前がまともな国民か」
「久しぶり。雪が降ったから、またつかまりに行こうかと思ってた」
ようやく再会の挨拶を交わし、海雲とサイゲートは笑い合う。訳が分からないのはアゼル一人だけであり、彼は親しげな海雲とサイ

ゲートを呆然と眺めていた。

まもりたい（１０）

それぞれに再会を果たしたサイゲート、海雲、アゼルの三人は王城に場所を移して酒盛りをすることにした。城に戻る途中で海雲とサイゲートの双方から話を聞いたアゼルは、私室へ辿り着くまでずっと顔を赤らめて憤慨していた。

「知り合いなら知り合いだと初めから言ってくれ。おかげで恥をかいた」

アゼルがずっと不満を口にしっぱなしだったのでサイゲートは苦笑いを浮かべながら応えた。

「聞かなかったじゃん」

「面識があると思う方がおかしい」

アゼルの言うように一国民であるサイゲートと白影の里の棟梁である海雲が知り合いだとは、当人達から聞かされない限りなかなか思い当たることではない。もっともだと思ったサイゲートが思わず頷くと、アゼルは怒ったまま席を立った。

「今日は堅い話は抜きだ。目一杯飲んでくれ」

大股で歩き出したアゼルは酒を運ばせると言って出て行った。開け放されたまま放置されている扉を見つめ、海雲が小さな声でぼやく。

「あの調子じゃ、今夜は帰してくれないな」

「大変だったんだろ？　たまにはいいじゃん」

サイゲートが問うと長椅子に腰掛けている海雲は苦い笑みを零した。

「分かるか？」

「やせたな。顔がこけてる」

「戦争だからな、仕方がない」

「頭の使いすぎなんじゃないのか？」

海雲がやつれているのは肉体的な疲労よりも精神的な疲労の方が

原因のように思える。そう感じたサイゲートは久しぶりに『普通のケンカ』でもしてみるかと誘った。すると海雲も、不敵な笑みを口元に浮かべて見せる。
「話によると腕が上がったそうじゃないか。受けて立つぜ」
「工事のおかげできたえ直された。剣も、ちょっとにぎったんだぜ」
サイゲートが大袈裟な動作で剣を構える真似をすると海雲は声を上げて笑った。彼とこうして軽口を言い合うのは本当に久しぶりのことで、嬉しくなったサイゲートも笑みを零す。しばらく二人で笑い合っていたが、やがて海雲が少し口調を改めた。
「アゼルとも仲良くやってるみたいじゃないか」
「それなりにな。アゼルと話してみて、海雲が言ってたことがよくわかった」
「お前は余計なことを考えすぎるんだ」
「かもな。なあ、冬の間は戦争ないんだろ？」
「もともと防衛戦だ、相手の動きに合わせて状況も変わってくる。まあ、一応そう考えてはいるが」
「だったら、また里に行ってもいいか？　本が読みたい」
「熱心だな。そんなに歴史に興味があるのか？」
「最後に読んだ本がさ、気になる終わり方してたから」
サイゲートが内容を思い出しながら聞かせると海雲は次第に険しい表情になり、最終的には口元に手を当てたまま考え込んでしまった。それまでの和やかな空気が一変してしまったのでサイゲートは眉根を寄せる。
「どうかしたのか？」
「その続き、知りたいか？」
「そりゃ、まあ……」
「死ぬ覚悟が必要でも？」
「……死ぬ？」
海雲の口から物騒な発言が飛び出したのでサイゲートは目を瞬かせる。海雲は含みを持たせた息を吐き、仕方がないなという風に髪

を乱しながら言葉を続けた。
「どの書物を読んでも続きは知れない。何故ならそれは口伝でのみ継承される極秘事項だからだ。何でそんな本が書庫にあったのか知らないが、里に戻ったら処分しないとな」
「……そんなにヤバイのか？」
「この戦も、それが原因で始まった」
軽い調子の話が思いも寄らぬ展開になり、サイゲートは目を見開いた。
開戦前の演説では、戦が始まる原因は大聖堂（ルシード）という集団が領地を求めて侵攻して来るから自分達の国を護るために戦うのだと言っていた。だがサイゲートが海雲に聞かせた内容は領地を欲することとは何の関係もない。不審に思ったサイゲートは顔をしかめながら海雲に問いかけた。
「オレ達に話したことはウソだったってことか？」
サイゲートが不信感を露にしたので海雲は小さく首を振ってから語りかけるように言葉を紡ぐ。
「嘘じゃない。大聖堂という組織は指揮をしている人間と兵との間に距離がある。兵は大半が流民、彼らが掲げるこの戦の理由が国民に公言したものだ」
「じゃあ、どっちも本当なのか？」
「戦が始まる時には様々な思惑が複雑に絡んでいるものだ」
お互いに真剣な表情で話をしている所に、ちょうどアゼルが戻って来た。室内の異様な空気を察したのか、アゼルは眉間に皺を寄せる。
「深刻な話は抜きだと言っただろう」
「サイゲートが極秘事項を聞きたがるもんで、ついな」
急におどけた口調になり、海雲はさっさと一抜けたと宣言をする。アゼルの鋭いまなざしがこちらを向いたのでサイゲートはたじろいだ。傍まで歩み寄って来たアゼルはわざわざサイゲートの目を見据えながら口火を切る。

「そうなのか？」
「たしかに知りたいって言ったけどさ、もういいよ」
追いつめられたサイゲートが投げやりに言うとアゼルは嘆息しながら体を遠ざけた。アゼルに凄まれていたサイゲートもホッと息をつく。
「まったく、菜の花でも呼んで場を華やかにでもするか？」
その話は終わりだとばかりにアゼルが口調を一変させた。話題に上った知らぬ名に、サイゲートは首を傾げる。
「菜の花って誰？」
「呼び捨てとは度胸があるな。アゼルの妹、つまり姫君だ」
「げっ、姫君……？」
意地の悪い海雲の科白に、サイゲートは顔を強張らせる。それを見てアゼルが笑った。
「あまり城の外へは出ないが、祭の時などに見掛けたことはあるだろう？」
「見たことはあると思うけど、顔までは……」
「そうか？　ならば呼んできてやろう」
「いい！　いい！」
「遠慮すんな。姫はお綺麗でいらっしゃるぞ」
慌てふためくサイゲートをよそに、アゼルの従者と思しき青年が酒を運び入れてきた。二人してさっそく酒に手を伸ばしているところを見ると、初めから姫を呼ぶつもりはなかったようだ。サイゲートはからかわれたことに頬を膨らませていたが、アゼルがグラスを差し出してきたので反射的に受け取る。そこへ海雲が酒を注いだのでサイゲートもふて腐れるのをやめて乾杯に応じた。

まもりたい（11）

それぞれに親交を深めていたこともあり、アゼルの私室に集った者達の話は尽きることがなかった。特に酒が入ってからのアゼルの喋りっぷりは、凄かった。

「海雲、家庭を築く気はないか？」

しまいには真顔でそんなことを言い出したので、適当にあしらいながら酒を口に運んでいた海雲は吹き出しそうになった。海雲がむせているのにも構わず、アゼルは話を続ける。

「お前も年頃だろう？　家庭を築いてもおかしくない」

「それを言うならお前の方が先だろ。誰かいい人、いないのか？」

「俺のことはいい。この戦が終わったら、菜の花を貰ってやってくれないか？」

軽く躱そうとしても流されてしまったので海雲は仕方なく黙り込む。アゼルはグラスに残っていた液体を一気に干してから、真剣な表情のまま言葉を次いだ。

「菜の花はあの通り、お前に好意を寄せている。俺も父も菜の花には幸せになってもらいたいと思っているし、相手がお前なら何も言うことはない。無論、お前の気持ち次第だが」

「……もう、そのくらいでやめとけ」

空になったグラスに新たな酒を注ごうとしていたアゼルを制し、海雲は静かに言った。酒瓶を取り上げられてしまったアゼルはグラスを置き、正気なのか酔っているのか判らない瞳で見上げてくる。

「菜の花が幸せになった姿を見届けたら……」

後半は聞き取れないほどの小声で、アゼルは何かを呟いていた。瞼を下ろした彼は腰掛けていた長椅子に体を預け、そのまま規則正しい寝息を立て始める。

「……寝たみたいだな」

途中から完全なる聞き役に徹していたサイゲートがアゼルの顔を

覗き込みながら小声で言った。海雲は座りながら眠りこけているアゼルの体を長椅子に横たわらせ、寝台から運んできた寝具をかけてやる。それからサイゲートを促し、うるさくしないようバルコニーへ移動した。

「王子も、いろいろ大変なんだな」

グラスを片手で弄びながら欄干に腕を乗せ、その上に顎を置いたサイゲートがぽつりと独白を零す。海雲は何を考えているのか読み取れないサイゲートの横顔を一瞥し、雪の降りしきる街並みへ視線を転じてから話に応じた。

「他人(ひと)の上に立たなければならない人間は他人(ひと)より苦労が多い」

「お前も、大変なんだな」

少しも感情が入っていない呟きを口にするサイゲートが、突然孤独に見えた。サイゲートが何かを嘆いているような気がして、海雲は閉口する。サイゲートは隣に佇む海雲を見ることもなく街の方を見つめている。彼の視線の先を追って見ると雪に映えて淡い灯火が、揺れていた。

「……訊いても、いいか？」

短い沈黙の後、海雲は結局そんな言葉を口にした。欄干から顔を上げ、サイゲートは海雲を見る。

「なに？」

「お前、どうして彼岸の森にいたんだ？」

サイゲートとの出会いは、彼岸の森である。立入禁止である場所に入り込んだ彼は樵だ、森の奥が進入を制限されていることを知らなかったはずはない。危険だとも、聞いていたはずなのだ。

「……聞きたい？」

海雲が目を向けると、サイゲートはこちらを見てはいなかった。街の灯りでもなく、彼の瞳はもっと遠くを見つめている。

「ずっと、気になってはいた。だが言いたくないのなら、いい」

「酒、もっと飲まないか？」

「……取ってこよう。ちょっと待ってろ」

サイゲートの要望を受けて海雲はアゼルの私室へ引き返した。逃げ出したくなった、と言い換えてもいいかもしれない。素面では話せないほど口にしたくないことをサイゲートに語らせようとしたことに後悔が生まれたのだ。だが、一度口にしてしまった科白を取り消すことは出来ない。戻らないわけにはいかなかったので海雲は酒瓶を掴むとバルコニーへ引き返した。

「オレがさ、あの家に居たくない理由」

海雲がバルコニーへ戻るとサイゲートは背を向けたまま語り始めた。海雲は隣に並び、サイゲートが手にしているグラスに酒を注いでやる。自分から酒が足りないと言い出したサイゲートはグラスを傾けることをせずに言葉を次いだ。

「知ってるかもしれないけど、オレ、あの家の子じゃないんだ」

育ててもらった恩がある、サイゲートがそんな風に言っていたので気が付かなかった訳ではない。だがサイゲートは海雲が家を調べたから家族構成まで調べたのだと、思っているのかもしれなかった。しかし下手に否定しても白々しくなってしまうだけなので海雲は沈黙を守る。サイゲートは欄干に置いた腕に顔を沈めながら、くぐもった声で話を続けた。

「どこかへ、行ってしまいたかった。彼岸の森が立入禁止なのは外の世界につながってるからだって、勝手に思いこんでた」

「……そうか」

サイゲートがどんな気持ちだったのか、そんなことは解らない。だが白影の里へ来いという誘いを断ってまであの家にいるのに、何処かへ行ってしまいたいと思うことはひどく苦しいことなのだろう。

「オレさ、こんな雪の日に捨てられてたんだって」

サイゲートの話は続く。酔っているのか、顔を上げた彼の口元には自虐的な笑みが浮かんでいた。

「拾ったのは親方じゃないみたいなんだけど、どういう訳かあの家で育てられることになったんだって。奥さんがすごい反対したらしいんだ、いつもの金切り声で」

十数年も前から、あの家は何も変わっていないらしい。サイゲートがどのように扱われて育てられてきたのか、彼の家で耳にした様子からも想像することが出来る。海雲はそう思ったが言葉にはしなかった。

「親方はいつも何も言わない。仕事仲間にこの話を聞いた時は、ありがたくて泣きそうになったよ」

「……泣いてるのか？」

伏目がちだったサイゲートが不意に、がばっと顔を上げた。彼はその勢いのまま振り返るので、海雲は瞬きを繰り返しながらサイゲートの顔を見る。

「オレ、泣いてるか？」

「……泣いてる」

「どうりで。顔が冷たいと思った」

サイゲートは冗談とも本気ともつかない科白を零しながら笑っているが、目だけは動かさない。あまりにも凝視されるので海雲は困って苦笑を返した。海雲の無表情が崩れたのでサイゲートも自然な笑みを浮かべる。

「オレの血は、この国のものじゃないかもしれない。でも、ここを家だと思ってる。この気持ちは、みんなと変わらないよな？」

「当たり前のことを訊くな」

「海雲、オレ、何も出来ないかもしれないけどこの国をまもりたい。親方や街の人達が平和に暮らしていけるこの場所を、まもりたい」

「解ってる。それ以上言うな」

頬を流れる涙を拭いもせずに訴えかけてくるサイゲートに海雲は顔を歪めた。平和を願い、祖国を愛し、真剣に考えている者達がいる。例え一握りでもそういう者達がいる限り、必ず護らなければならない。白影の里の長としてではなくサイゲートの友人として、海雲は今一度そのことを心に深く刻んだ。

まもりたい（12）

冬を迎えた赤月帝国には雪が、降り続いていた。今年は例年より積雪量が多いようで朝となく晩となく、とにかくよく降る。身動きが取れないのは大聖堂（ルシード）軍も同じであり、彼らは一度まとまった軍を幾つかの隊に分けて個別訓練を行っているらしい。個々の能力は比べ物にならないので、まとまっていないうちはそう警戒する必要もないだろうと海雲は考えていた。見張りだけは常につけているが、里の者にも休息が必要である。この冬には、様々な意味で感謝しなければならない。

（焼失してしまった森が再び育つには長い歳月を要します。けれど春には、雪融け水が大地を潤すでしょう）

雪は、彼岸の森をも白く染めている。白雪を被った墓に向けて、海雲は無言の内に語りかけた。

棟梁の座に納まってから何年が経過したのか。やれるだけのことは、やってきたつもりだった。それでも時折訪れるこの場所には不安や苛立ち、喜びや呪いの言葉などを浴びせてきた。里の死者、敵の死体、動物の死骸、そして捨て去った感情。それらが埋まっているこの場所は、全ての墓。死んでしまえば敵も味方も関係がない、ただ土に還るだけだとあの人がよく口にしていたので、海雲は大聖堂の兵達もここに埋葬させた。

（あなたなら、もっとうまいやり方を見出せましたか？）

問い掛けに返ってくる言葉はない。もっとも、生前でも答えをくれたかどうかは微妙なところである。それでも問い掛けてしまうのは、自信がないから。恐怖で押し潰されそうになるから。

墓標も何もない均された地に目を落としていた海雲は背後で雪を踏む音がするのに気がついて振り返った。そうして目にした人物に、海雲は驚きのあまり瞠目する。

「おや、先客か」

姿を現したのは質素な格好をした王であり、彼は海雲を見て微笑みを浮かべた。海雲は慌てて王に向き直り、一礼してから言葉を紡ぐ。
「このような場所にお一人でいらっしゃったのですか？」
「いや、伴の者をそこで待たせてある」
そうは言うものの、周囲を見回しても従者らしき影は見えない。おそらく王は白影の里から一人で彼岸の森へと入って来たのだろう。全ての墓へと続く道は教えてあったものの、王が日常的にこの場所を訪れているようだったので海雲は驚きを隠せなかった。
海雲の隣に並んだ王は、墓標も何もない平地に向かって静かに手を合わせた。その姿に何も言えなくなり、海雲も白い床に顔を傾ける。
「先日、アゼルの部屋で酒宴をしたそうだな」
「申し訳ございません」
「咎めているのではない。少し、近況を報告しようと思ってな」
王の言葉には主語がなかったが、海雲には誰のことを言っているのかすぐに解った。何とも言えない気持ちになった海雲が黙っていると王が言葉を次ぐ。
「私は今、彼の友としてここにいる。少し、規則を緩めないか？」
「……はい」
王の提言に従い、海雲は笑み返す。長い月日が経った今日でも、自然に友と言ってくれたことが嬉しかった。
「彼に、何を語りかけていたのだ？」
「近況です。戦の状況や里の様子、あと友人のことを報告しようと思っていました」
「友人とは、アゼルも言っていたサイゲートという名の少年のことであろう？」
「はい」
「頼もしい若者だと聞く」
「彼は強い意志を持っています。アゼルにとっても、きっと良い友

となったことでしょう」
「嬉しい限りだな」
言葉とは裏腹に王は寂しそうに笑む。複雑な心境を覗かせている王を見た海雲はアゼルが口にしていたことを思い出した。
『俺も、安心して行ける』
サイゲートと三人で酒盛りをした時、アゼルが思わず零した本音。それを誰よりも肌で感じているのが、王なのだろう。
「海雲よ、私はお前のことを息子だと思っている。……いや、身勝手なことを言っているな。すまない」
「……いえ。そのお言葉、有り難く頂戴致します」
「大聖堂は恐ろしい敵だな。知れば知るほど、恐怖に体の震えが止まらぬ」
「お気を、確かに持って下さい。我らが必ず防いでみせます」
「私ですらこの有様なのだ、お前は誰よりも強くそう感じていることだろう。不甲斐無い私を、許してほしい」
赤月帝国の指導者として、望みを聞き入れる訳にはいかない。海雲はそう、王に言われた気がした。だがそれでも、彼は誰よりも心中を察してくれるのだ。
（あなたは、良き王だ。どうにもならないことは俺とて知っています）
海雲の考えは赤月帝国の方針に反する。そして白影の里が赤月帝国の軍隊である以上、国の方針に逆らってはならないのである。だからこそ海雲は思っていることを口に出来なかったのだが、王は無言の叫びをすくい上げてくれた。結果として否定されることになってしまったがそれだけで十分だと、海雲は思う。
祈るように手を合わせている王を盗み見ていた海雲は、王が祈りを捧げている故人に思いを馳せた。代わりになる者などいない。しかし、同じように想ってくれる人はいるのだ。
（父上、あなたもまた良き友人をお持ちだ。俺はこの国を誇りに思う）

胸中で呟いた時ふと、もうあまり思い出せない父の顔が見えたような気がした。そこで感傷を振り切り、海雲は王を振り返る。
「もう行きましょう。この寒さでは待たされている従者も凍えてしまいます」
促す海雲がいつもの彼に戻っていたので、王も微笑みを浮かべながら頷いていた。

友（1）

厳しい冬を迎えて雪に閉ざされていた赤月帝国にある日、暖かい風が吹き抜けた。南からの乾いた風は赤月帝国に春の訪れを告げるものであるが、まだその時ではない。例年よりだいぶ早く訪れた温暖な風に、自宅近くの窯で木材を炭にする作業をしていたサイゲートは思わず作業の手を止めていた。

冬は雪の日が多い赤月帝国にしては珍しく、本日は晴天である。ちょうど頭上に昇っている太陽を仰ぎ、サイゲートはその日差しの強さを確認した。頬を過ぎていく風は生暖かいが、陽光は未だ冬の様相を呈している。サイゲートの周囲には掻き分けられた雪が小山のようになっているのだが、それも平素と同じように地面の色を吸って黒く固まっていた。風だけが、他国からの来訪者のように異質なのである。

（……いやな風だな）

この季節に、こんな風は感じたことがない。何かよくないものを運ぶように思い、サイゲートは眉をひそめて白く染まっている森を遠望した。

街でサイゲートが異変を感じていた頃、王城へ赴こうと屋敷を出た海雲も眉をひそめていた。

（なんだ、今の風は）

頬を過ぎていったのはまるで、春の訪れを告げるように暖かな風だった。だが今はまだ、赤月帝国は厳冬期である。雪融けを待たぬ

季節にそのような風が吹きつけるなど、海雲が知る限りでは初めてのことであった。自然の変異は漠然とした嫌な予感を生じさせる。王城へ行くことを取りやめた海雲が屋敷へ引き返そうとすると、急を報せる者が駆け寄って来た。

「ご報告致します。大聖堂軍（ルシード）が侵攻を開始しておりました」

配下から報告を受けた海雲は耳を疑った。まだ雪融けも始まっていないこの時期に侵攻など、有り得ない。だがそれ以上に、海雲は配下の報告が過去形であることに憤りを隠せなかった。侵攻を開始していたとは、一体どういうことなのか。

「敵が接近しているとの報せは受けていない。何故気付かなかった！」

「この冬は積雪も多く、誰もが雪融けまで侵攻は有り得ないと思いこんでおりました。申し訳ございません」

彼の言う通り、確かに今年の冬は積雪が多い。そしてこの積雪の中、しかもいつ天候が変わるかも分からぬ中での侵攻などは死に等しい。だから海雲は里の者にも休養をとらせ、監視も交代制にしていたのだ。だが他国との唯一の接点であるかげろうの森には常に気を配っていた。接近を許したのには何か理由があるはずだ。それを突き止めなければならないと思った海雲は配下に詳細な報告を促した。

「数日前から流民と思しき者達がかげろうの森へ侵入したことは確認しておりました。大聖堂軍も流民から編成されておりますので気を配ってはいたのですが、彼等は狩りをするばかりで罠にもかかってしまうような者達でしたので冬の貧困にみまわれた流民であると判断いたしました。食料を求めて冬の森に立ち入る者がいるのは毎年のことですので、棟梁のお耳に入れるまでもないと報告を怠っておりました。それが気付いた時には数を増し、集団を形成していたのです」

詳細を聞けば聞くほど言い訳めいてくる説明に、海雲は唇を噛んだ。海雲は街の者達を甘いと罵ってきたが、緩みは白影の里にまで

及んでいたようである。それは同時に、冬の間は大丈夫と過信した己の慢心なのだ。
「もういい。数は？」
「おそらく、大聖堂軍の大半かと」
大半が森へ侵入して来たと聞き、海雲は口元に手を当てて考えを巡らせた。
全軍を使った攻撃演習をしていた大聖堂は冬が訪れると同時に軍を幾つもの小隊に編成し直した。海雲はそれを冬越えの準備として捉えていたのだが、小隊に分けた目的は別のところにあったらしい。
（冬越えのためではなく、こちらの目をくらませるのが目的か）
読み違いであることには違いないのだが、冷静になってみればそれほど脅威を感じはしなかった。敵は不意をついたつもりなのだろうが罠と雪に阻まれた森でどれだけの働きが出来るのか。ただの流民に見せかけて少しずつ兵を入れるなど、手間をかけるのなら春まで待つべきだったのだ。
（好都合だ）
自ら侵攻することは出来ずとも、赤月帝国の領土に踏み入ってきたのならば壊滅させてやることも出来る。今までは王のやり方を憚ってなるべく死者を出さずに済ませてきたが、軍事における最終的な決定権は白影の里にあるのだから。
（二度と、馬鹿な考えは起させないようにしてやる）
未だに跪いている配下を促し、海雲は怒りにぎらついた瞳をまだ見ぬ敵兵へ向け歩き出した。

友（2）

凶兆を告げるような南風が吹いた翌日も空気は温んでいて、赤月帝国は春とも冬ともつかない奇妙な季節の中に浸されていた。温暖な風は降り積もった雪を融かしており、街が水浸しになるかと思われるほどあちこちで雫が滴っている。そんな日中、サイゲートは所用を言いつけられて街のほぼ中央に位置している王城付近にまで出向いてきていた。

街は平素と変わらぬ様相を呈していたのだが、異変は唐突に訪れた。南の方角から上がった悲鳴に、サイゲートを含め街中を歩いていた者達は一様に足を止める。群集の中には何が起きたのかと悲鳴のした方へ走り去って行く者もいた。だがそれも、悲鳴が大きくなるに従って自然と途絶えていった。尋常ではない人々の声が、南から押し寄せてきている。

周囲の人々と同じように呆然と足を止めていたサイゲートは、やがて南の方角に立ち上った煙を目にした。何かが、あったのだ。そう確信したサイゲートは何が起きているのかを確かめるため悲鳴の発生源に向かって走り出した。

南へ向かったサイゲートが目にしたものは、武器を振り回す人々と凶刃から逃れようと必死に逃げ惑う人々の姿だった。さらには火が放たれており、民家が燃えている。何が起きたのかとっさに判断をすることは難しかったが、サイゲートは無意識の内に自宅のある東へと走り出していた。

（火は、なんとかなる）

そのために、国を挙げて堀を巡らせたのだ。それよりも問題なのは、あの武器を振り回す人々が誰であるかということだった。武器を持って街の人間を追いまわすなど敵でなければするはずがない。そう思いつつも、サイゲートにはまだ敵兵の襲撃が信じられなかった。

（どうやって……）
戦が始まってから敵兵の襲撃は幾度となくあったが、街まで達せられたことは一度もない。加えて、例え戦場が街から見えない森であろうと敵が来た時には必ず国民に一報があったのだ。だが今回は、それすらもなかった。
（まさか、海雲たちが……）
そこまで考えて、サイゲートは頭を振った。あの海雲が、簡単にやられるはずがない。そう自分に言い聞かせ、サイゲートは混乱している頭を落ち着かせるために足を止めて息を吐いた。
（とにかく、城に行かないと）
無意識に自宅の方へと走り出してしまったが、今は城へ向かうべきである。何が起きているのか、アゼルに会えばはっきりするはずだからだ。サイゲートは親方達の無事を祈りながら踵を返し、城のある西へ向かって再び走り出した。
つい先程まで悲鳴が上がっていた街も、サイゲートが通行する頃にはひっそりと静まり返っていた。家に閉じこもっているのか避難をした後なのか、人気は皆無である。辺りを窺いながら慎重に歩を進めていたサイゲートは、角を曲がったところで不意に足を止めた。その先に広がっていた光景はあまりにも惨たらしく、歩みを止めざるを得なかったのである。
無造作に捨てられた塵芥のように、路上には人間が転がっていた。ある者は頭から、またある者は腹からといった具合に血を流しており、倒れている人々は一様に血だまりの中にいる。動く者はなく、誰もがすでに息絶えているようだった。
殺された死体を目にしたのは初めてのことであり、サイゲートは衝撃のあまり動けなくなってしまった。逸らすことも出来ない目に、血だまりと死体が焼きついていく。時の経過と共に少しずつ衝撃が引いていくと替わりに激しい憤りがこみ上げてきたのでサイゲートは拳を民家の壁に叩きつけた。
（くそっ……！）

これが、戦争というものなのか。戦うことの出来ない者を一方的に殺めるのが、戦争というものなのか。

血の臭気と憤慨が眩暈を引き起こし、サイゲートは頭を抱えてしゃがみ込んだ。刹那、天をも切り裂くような女の悲鳴が街中に響き渡る。とっさに体を起こしたサイゲートは考える間もなく悲鳴がした方向へ走り出していた。

現場に駆けつけたサイゲートが見たものは泣き叫んで取り乱している女と、その女を見下ろしている集団だった。真冬だというのにボロボロの薄布を纏っている集団は全員が手に得物を握っている。敵の数が多かったので、サイゲートは飛び出すことを躊躇した。すると、その間隙を狙いすましていたかのように貧相な集団が女に武器を突き立てる。もう一歩を踏み出すことさえ出来ない、一瞬の凶行だった。

敵が立ち去ってから、サイゲートは倒れている女の傍へ寄った。女の体からは真新しい鮮血が流出しており、地を赤く染めていく。

（……息は、ある）

呼吸と心音を確かめ、サイゲートは女を背に負った。浅い呼吸を繰り返している女はもう助からないかもしれないが、ここでは応急処置も出来ない。自己満足なのかもしれないが、二度も見殺しにすることはサイゲートには出来なかった。

（あんな、かんたんに……）

無抵抗の人間に躊躇もなく武器を振り下ろした人々の姿が、蘇る。あんな簡単に人間は人間を殺めることが出来るものなのか。殺してもいい、ものなのか。

背中に滲む命の暖かさに歯噛みしながら、サイゲートは王城への道を急いだ。

敵の侵入を許したことを知ってすぐ、王城では会議が開かれた。議題はもちろん、この事態にどう対処するかということである。だが白影の里からの連絡もまだない状態では決断を下しようもなく、話し合いは行き詰っていた。今は動くことが先決だと感じたアゼルは席を立ちながら声を上げる。

「父上、橋へ行きます」

森林火災の一件で逃げるなら城だという意識が国民に植え付けられたのか、王城は避難してきた人々であふれている。それを追うように、王城へと続く橋には敵が殺到していた。今はとにかく、城内への侵入を許さないことである。アゼルがそう提案すると王は慎重に頷いて見せた。

「うむ。気をつけよ」

止めないでくれた父に深く頭を下げることで黙礼し、アゼルは会議室を後にした。そのまますぐ橋へ向かうつもりでいたのだが、廊下に整列している兵達を目にして足を止める。彼らはアゼルの私兵であり、一番年長の者が全員を代表して口火を切った。

「橋へ、行かれるのですね」

「ああ」

「お供させてください」

年長の者が顔を傾けたことを合図に、下手に控えていた者が防具を持って進み出てくる。他の者達も心は決まっている様子で頭を垂れたので、一人でも臨むつもりだったアゼルは胸が詰まった。だが今は、感慨を露わにしている時間はない。腹の底からこみ上げてくる熱い感情を押さえ込み、アゼルは平静を装って私兵達に応じた。

「命の保障は出来ない。それでも着いて来るか？」

「お供します」

迷いない配下の一言に、アゼルは防具を受け取った。

「よし、行くぞ！」

防具を身に着けたアゼルは掛け声と共に王城の廊下を歩き出す。その後に、隊列を組んで私兵達が従った。
「王子だ！」
「王子、お気をつけて！」
「がんばってください、王子！」
アゼルの姿を目にした民衆から激励の声が上がる。現状を打破してくれという期待のこもった目を嫌というほど感じながら、アゼルは私兵達と共に王城一階にある正面門へと向かった。
「兄上！」
人だかりの中から不意に、知った姿が飛び出して来た。妹の姿に目を留めたアゼルは複雑な思いで走り寄って来る彼女を迎える。
「菜の花……」
父は許してくれたが、菜の花には止められるかもしれない。アゼルはそうした危惧を抱いていたのだが、しかし菜の花は毅然として言った。
「お気をつけて。ご無理は、なさらないでくださいね」
不安を感じていないはずはないのだが、菜の花は怯えた様子など微塵も見せなかった。それはおそらく、ここで自分が動揺する姿を見せれば国民を不安にさせると思ったからだろう。健気にも彼女なりの戦いをしている妹を、アゼルは思わず抱き締めた。
これから赴く戦場はアゼルにとって初めての実戦である。自身の命を失うかもしれないということも、他人の命を奪うことも、本当は恐ろしかった。だが行かない訳にはいかない。護るべきものが、あるから。
「行ってくる」
「ご無事を、お祈りしています」
密かに別れを交わし、アゼルは菜の花から体を離した。そして再び、振り返らずに歩き出す。城の正面入口である扉の前で門番が敬礼した。アゼルは扉を開くよう指示を出し、二人の門番によって少しずつ開かれていく扉の先を見据える。狂乱と怒号の叫びが、すで

に聞こえてきていた。

友（3）

赤月帝国は冬がくる前、国民総出で街に堀をめぐらせた。その工事をした際、密かに抜け道を用意していたのである。城への表立った入口である吊橋には狂気じみた人々が殺到していたので、サイゲートは大きく迂回して城の西側を目指した。そこに、抜け道の出入口があるのである。

堀の工事をした時、万が一のためにと抜け道を用意した。表立っている橋には狂気じみた人達が殺到していたので、サイゲートはまだ発見されていなかった裏道から王宮へと入った。

（……アゼル）

東に見える城を仰ぎながら走っていたサイゲートはアゼルの身を案じていた。彼はきっと、率先して戦っていると思われるからだ。一刻も早く合流したかったので、一度足を止めて背に負っていた女を下ろした。ここへ辿り着くまでに、彼女はすでに絶命してしまっている。死体を負ったままではどうしても足が鈍るので、サイゲートは罪の意識に苛まれながらも女を捨て置くことにした。

仰向けに倒れている死体を一瞥した後、サイゲートは苦い思いで顔を背けて走り出した。胸に広がっていく息苦しさに似た感覚を振り払うように、ひたすら足を動かす。そうして辿り着いた場所は王城の西側にあたる外堀だった。その場所には、常緑の植物で覆い隠されていて傍目には解り辛いが竪穴が掘られている。その竪穴は横穴と連結しており、その出口は外堀の水面すれすれにあるのだ。横穴の出口には小舟が隠されているのだが、時間が惜しいと思ったサイゲートは堀を泳いで渡った。内堀にも同じ仕組みの抜け道があり、それを越えると王城内の片隅に出現することが出来るのである。

王城内にある抜け道の出入口には常時監視が立っている。監視の兵は抜け穴から出現したサイゲートを見るなり剣を突きつけてきた。サイゲートは自らのものではないが血にまみれ、ボロボロの格好を

している。敵である流民と間違われても、無理もないことであった。
抜け道を使ったのが裏目に出てしまい、サイゲートは拘束されてしまった。今まさに敵と対峙している状態では兵が神経質になるのも仕方がなく、何度説明をしても耳を傾けようともしてくれない。少しでも早くアゼルに会いたかったサイゲートは苛立ちを隠せなかった。
「だから！　アゼルに会わせてくれって言ってるだろ！！」
「黙れ！　貴様らのせいでどれだけの命が失われたと思っている！」
「オレは敵じゃない！！」
「黙れ黙れ！！　この人殺しが！！」
王城は避難してきた国民でごった返しており、連行されながら口論をしているサイゲート達は自然と人目を引いた。兵がサイゲートを敵と思い込んでいるので、その態度を受けた国民も怒りを噴出する。あまりにも多くの敵意に晒されたサイゲートはゾッとして閉口した。しかし、兵や国民の感情は鎮まらない。ついには物が飛んできたのでサイゲートは頭を庇って蹲った。
「やめなさい！！」
サイゲートを救ったのは凛とした女の声だった。群集の怒号にもかき消されなかった声音は威厳に満ち溢れていて、頼もしさすら覚える。周囲が静まり返り、物を投げつけられなくなったのでサイゲートは顔を上げた。群集の中から歩み出て来た少女が傍へ来たので、サイゲートは彼女の顔を凝視する。
「怪我はありませんか？」
そう言って、少女が手を差し伸べてくる。投げつけられた物がぶつかって痣になっていたが、サイゲートは平然を装って立ち上がった。立ち上がればサイゲートの方が背が高いので、少女はサイゲートを見上げながら言葉を次ぐ。
「あなたは先程、兄上の名を口にされていましたね。兄上は堀を渡る吊橋へ行かれました。赴かれるのでしたら、どうぞお気をつけて」
アゼルを兄と呼ぶ人物は、姫しかいない。サイゲートは初めて目

にする菜の花に驚き、目を瞬かせた。間近に見れば菜の花は可憐な少女だったが、瞳が強い意志を湛えている。
「姫様！　この者は……」
「この方は敵ではない。先程、そう申されていたではありませんか」
サイゲートを連行していた兵が非難の声を上げたが菜の花は毅然と一蹴する。兵はまだ何かを言いたそうにしていたが王族には強く出られないようで身を引いた。菜の花の目が再びこちらを向いたので、サイゲートは心の底から湧いてきた言葉を口にする。
「ありがとう」
兄によく似ている菜の花に笑みを返し、サイゲートは走り出した。目指す先は王城の正面入口である。しかし狂気する人々の間をすり抜けて辿り着いた扉は、閉ざされていた。
「開けてくれ。アゼルのところへ行きたいんだ」
サイゲートがそう申し出ても、門番をしている兵は首を横に振った。
「危険です。お戻りください」
門番の態度が淡々としているからこそ、サイゲートは頭にきた。加勢に出ようという者まで退けていては外で戦っている者を見殺しにしているも同じである。兵が聞く耳を持たないことはすでに解っていたのでサイゲートはすぐさま実力行使に出た。門番の一人に体当たりを食らわせて彼が佩いていた剣を奪い、切っ先を丸腰の者に向けながら叫ぶ。
「オレが出たら閉じていい！　だから開けてくれ！！」
半ば脅迫であったサイゲートの懇願が通じ、扉は開かれた。だがその先にあったのは、無造作に死体が転がっている街中よりも鬼気迫る状況だった。
（これだけしか、いないのか）
敵はすでに内堀にまで達していて、吊橋の袂で応戦している者達が最後の砦である。しかし自らの国を護ろうと戦っている者の数が、あまりにも少なすぎた。サイゲートは絶望感を覚えながら、それで

も走り出す。
「アゼル！」
応戦している者達の中には案の定、アゼルの姿があった。サイゲートはすぐさま彼の傍へ寄り、剣を振り回して敵兵を退ける。サイゲートが参戦したことが転機となったのか、アゼルは味方を下がらせて吊橋の縄を切り落とした。橋の上に転がっていた負傷者や死体、それらを踏み台にしてまで押し寄せて来ていた敵兵が吸い込まれるように堀へ落ちていく。痛々しい表情をして堀から顔を背けたアゼルを促し、サイゲートは城の方へと引き返した。
「怪我を、したのか？」
アゼルに問われて初めて、サイゲートは自分がひどい格好をしていることに気がついた。ボロボロになるまでに経験した女の死や民衆の敵意が脳裏をよぎっていき、サイゲートは苦い気持ちで首を振る。だが痛みに溺れるより前にするべきことがあると思い直し、サイゲートは口を開いた。
「それより、これは何なんだ？」
まずは状況を把握しなければ動きようがない。サイゲートはそう思っていたのだが、アゼルもまた首を振った。
「解らない」
「海雲は？」
「それも解らない。白影の里も混乱しているようだ」
「自衛団はどうした？」
「負傷している者が多い」
「それでも動ける奴はいるだろ」
「皆、突然の凶行に震え上がっている。無理もない」
「じゃあ、この人達は？」
サイゲートとアゼルの周囲には数名の若者がいる。彼らはアゼルと共に戦っていた者達だが、普通の国民のようには思えなかった。サイゲートが感じた通り、彼らはアゼルの私兵であるらしい。つまり、自衛団を初め国民は誰一人として動いていないということだ。

不動の人々を、アゼルは責めない。しかしサイゲートは憤りを隠せなかった。一般の若者から構成される自衛団はもともと、開戦宣言に乗じて自ら兵となることを望んだ者の集団だ。それなのに、いざ戦闘となれば怯えて動けないのでは役立たずもいいところである。

「……アゼル、話をしに行こう。取り残されてる人達を助けないと」

サイゲートが凶行を目にしたように、街にはまだ多くの人が取り残されているだろう。だがサイゲート達だけで助けに行くには人数が心もとない。どうしても国民の協力が必要なのだ。アゼルもそのことは承知しているようで、彼は苦い表情のまま城へと足を向ける。サイゲートとアゼルの私兵達は無言でその後を追った。

敵の侵攻を知ってすぐかげろうの森へ赴いた海雲は最前線で指揮をとっていた。街に接近していた敵兵はあらかた殲滅したと思われるが、大聖堂（ルシード）は次から次へと兵を送り込んでくるので攻防戦の終わりが見えない。海雲の耳に信じられない情報がもたらされたのは、何か打開策はないかと考えを巡らせていた時だった。

街が、急襲された。それも突然の出来事だったらしく、対応が遅れている。そうした報告を受けた海雲は苛立ちを隠せず、声を荒げた。

「街はどうなった！」

「避難した国民は王城に、逃げ遅れ息のある者は里へ運びました」

そのために報告が遅れたのだと、配下は言う。冷静さを取り戻すために一つ息を吐き、海雲は頭を切り替えてから問いを重ねた。

「侵入したのはどれ程か？」

「敵はおそらく軍を幾つかの小隊に分けた後、個別に行動させ何処

かで合流したものと思われます。よって、森の兵力を除いた残りかと」
「不確かな推測はいい。被害の状況は？」
「はっ。詳しい数は判りませんが、死傷者が出たとのことです」
死傷者が出たと聞き、海雲は唇を噛んだ。白影の里がこの体たらくであるのに、国民が自衛の手段を講じられたと考える方がおかしいのである。一人でも死者を出してしまった今、次はいかに死傷者を抑えるか考えるべきなのだ。そう思った海雲は次なる行動を即決した。
「森を引き払う。水源は死守しろ」
海雲の意を受け、報告に来ていた配下が他の者への指示に走る。後悔は後だと自身に言い聞かせ、海雲は撤退をする配下に先立って街へと急いだ。

友（4）

王城一階にある大広間へ足を踏み入れた刹那、サイゲートは思わず顔を歪めていた。この場所は避難してきた国民で溢れかえっているのだが、大広間に集っている人々は老若男女を問わず誰もが恐怖に震えて縮こまっている。一様に閉口している人々の重たい視線が、広間に進入してきたアゼルに向けられた。人々に縋るような瞳を向けられたアゼルは王族らしい堂々とした態度で口火を切る。

「皆、聞いて欲しい」

アゼルの凛とした声が静寂に包まれて消えていく。人々が真剣に耳を傾けていたので、アゼルは言葉を続けた。

「突然のことに狼狽えるのは無理もない。だが街には、まだ多くの人が取り残されているだろう。彼等を救うために協力してもらいたい」

アゼルが協力を乞う発言をした刹那、室内には異様な空気が漂った。アゼルを見据える人々の視線はすでに、先程までの救いを求めるものから非難のまなざしへと変わっている。つい先刻、同じような状況で物を投げつけられるという体験をしているサイゲートはいつでもアゼルの前へ出られるよう警戒を強めた。

（……同じだ）

赤月帝国の国民も、橋に殺到していた大聖堂（ルシード）の兵達も、同じ目をしている。余裕のないギラついた瞳はまるで空腹時の獣のようだ。追い詰められた人間は絶望して、誰かを責めるしかないのだろうか。そして何のためらいもなく人間を殺せる人間になっていくのか。

「もう、死んでるよ」

誰かが発した一言が静寂に重みを加える。何もしようとしない人々はその後、自らの無力ではなく他人の非力を罵り始めた。アゼルは呆然と、浴びせられる罵詈雑言の中に佇んでいる。

「うるさい！！」

悪言は聞くに堪えず、サイゲートは民衆を一喝した。今ここでアゼルを責めたところで何かが変わるわけではない。無意味な話し合いに見切りをつけたサイゲートは、まだ呆然としているアゼルを振り返った。

「アゼル、行こう」

「……サイゲート」

サイゲートに呼びかけられたアゼルはどういう表情をしたらいいのか解らないといった風に、ぽつりと呟く。彼の様子は明らかに冷静さを欠いており、サイゲートは顔を歪めながら言葉を紡いだ。

「城へ来る途中、オレは助けを待ってる人を見た」

目の前で、凶行に晒された人を見た。見ていたのに、何も出来なかった。その時に感じた強い後悔が感情を支配しているサイゲートはアゼルを蘇らせるべく話を続ける。

「オレは、何もしようとしないで大切なものを失いたくない。だから、行こう」

何も出来ず途方に暮れるのは、たまらない。その思いはアゼルも同じなようで、空虚だった彼の瞳には次第に光が蘇った。

「……そうだな。行こう、サイゲート」

使命感からか、アゼルも力を取り戻して頷く。だがその場を立ち去るサイゲートとアゼルに従う者は、誰もいなかった。この分ではアゼルの私兵だけを頼りに街へ出ることになりそうである。多勢に無勢ではあるが嘆いていても始まらない。今出来ることをするだけだと、サイゲートは心を固めた。

「人間（ヒト）とは、恐ろしい生き物だな」

ふと、アゼルが独白を零したのでサイゲートは顔を傾ける。アゼルの表情には皮肉が滲んでいたが、あんなことがあった後では無理もないとサイゲートは思った。

「キライになりそうか？」

「かもしれん。だが醜い部分までを愛せて初めて、人間が好きだと言えるのだろうな」

「追いつめられた人間は、きっとみんな同じなんだよ。オレにはあの部屋にいた人たちがルシードの奴らと同じに見えた」
「……そうだな」
「きっとあいつらは、オレたちなんかが想像も出来ない世界で生きてきたんだろうけど、何も出来ない人を平気で殺せる人間はゆるせない」
「ああ。許しては、ならない」
他人の平和を壊してまで得る安楽など、あるはずがない。同じ想いで、サイゲートとアゼルは口を噤んだ。

街に取り残されていた負傷者は回収したと聞いていたので、かげろうの森を後にした海雲は脇目も振らず王城を目指した。森を放棄してきた以上、早く城の護りを固めないと陥落してしまうという危惧を抱いていたからである。果たして、街のほぼ中央に位置している王城は敵に取り囲まれていた。外堀を渡る吊橋付近には敵兵がうろついていたので、海雲は抜け道から王城への進入を試みた。抜け「道」と言うには少々困難が伴う通路だが、こうなってくると堀の工事をした時に抜け道を用意していたことは功績と言わざるを得ない。
二度ほど水泳をして城へ辿り着いた海雲は着替えの暇を惜しんで全身から水を滴らせながら城内に進入した。日が傾くごとに外気は冷たさを増していたが城内は人いきれのためにむっとしている。通行に邪魔な人々を器用に避けながら先を急いでいた海雲は、負傷者の手当てをしている者の中に菜の花の姿を見つけて足を止めた。視線を感じたのか菜の花もすぐに気がつき、こちらへ走り寄って来る。

「海雲！　無事だったのね！」
「姫様……」
自身の無事を心から喜んでくれている菜の花に向け、海雲は膝をついて頭を垂れた。まずは出で立ちが不恰好である非礼を詫び、それから本題を口にする。
「この度は私共の不始末でこのようなことになってしまい、申し訳ございません」
「今はそんなことを言っている場合ではないでしょう。早く、父上の元に」
駆け寄って来た時は素顔の彼女だったが、海雲が公の場であることを意識していることを察して菜の花もすぐに口調を改めた。あまり時間を割くことが出来なかったので菜の花の切り替えの早さに感謝しながら海雲は頭を上げる。
「承知致しました。王子はどうなさっているか、ご存知ですか？」
「兄上は橋へ行かれました。なるべく敵を防ぐのだと」
「解りました。急ぎ、王の下へ参ります」
立ち上がってから改めて一礼し、海雲は踵を返そうとした。しかし視線を外す間際に菜の花が瞠目したので海雲は動きを止める。背後から制止する声が聞こえてきたのは、その直後のことだった。
「その必要はない」
「父上！」
菜の花が発した驚愕の声に驚きながら海雲も慌てて背後を振り返る。そこには、護衛を引き連れて自らも武装した王が凛然と佇んでいた。
「状況を報告してくれ」
王に促され、海雲はハッとして跪いた。面目がなくて低頭したまま、海雲は報告を始める。
「街に取り残されておりました人々は里へ収容致しました。我等はかげろうの森を放棄してこちらへ参りましたので、間もなく森の戦力もこちらへ参ります」

「そうか。ならば城の護りを固めよ。これ以上、民を死なせてはならん」
「はい。すぐに手配致します」
立ち上がって王に一礼した後、海雲は菜の花にも目礼してから歩き出した。ひとまずアゼルと合流することが先決だと思った海雲はその足で橋へ行こうとしたのだが、誰かに呼び止められて再び歩みを止める。
「そのカッコ……あんた、白影の？」
声をかけてきたのは若い男だった。男は軟弱そうな体つきをしており、海雲に声をかけることすら勇気が必要だったようで小刻みに震えている。煩わしいと思ったが王族の手前では無下に扱うことも出来ず、海雲は一応話を聞く態度をつくった。
「そうだが。何か用か？」
「助けてくれ！　オヤジとオフクロがまだ取り残されてるんだ！！」
「落ち着け。生きていた者は助けた」
「じゃあ、ブジなのか！？」
「それは確認してみなければ分からん」
「連れてってくれ！　一緒に！！」
男が縋り付いてきたので海雲は力づくで撥ね退けた。だが男は、歩き出した海雲の背に向かって尚も叫び続ける。
「待ってくれ！！　王子と、誰かが街へ行ったんだ！」
男が発した一言は聞き捨てならないものであり、再度足を止めた海雲は表情を険しくしながら振り返った。男は床にへたりこみ、涙ながらに海雲を見上げている。
「王子が街へ出た、だと？」
「一緒に来てくれって言ってたんだ。だけど、怖くて……」
「おい！」
胸倉を掴み上げると、男の顔はぐしゃぐしゃだった。それでも容赦なく、海雲は男を締め上げる。
「王子が何のために命を懸けていると思ってる！　お前達のためだ

ろう！？　お前達が何もしないから王子がやってるんだ！　違うか！？」
怒鳴り声に集まって来た者だけでなく現在地から程近い大広間に集っている人々も何事かと耳をそばだてているはずである。それこそ城中に響き渡るように、海雲は声を荒げ続けた。
「それを！　助けてくれ？　甘えるな！！　自分の命と自分の大切なものくらい自分で守れ！　もっと本気になって守れ！！」
男は怯えて泣くばかりで、もう言葉すら失っていた。傍目には一人責められることになった男には気の毒な話だが、民衆を叱咤するためにはもう少し厳しくした方がいい。そう思った海雲はさらに詰る科白を重ねようとしたのだが、横からそっと手が伸びてきた。
「海雲、手を離して」
「姫様……」
期待通り仲裁に入ってくれた菜の花の意向に従い、海雲は男の胸倉を掴んでいた手を離した。解放された男は床に蹲り、背中を丸めて泣き崩れる。菜の花は男の背を優しくさすりながら海雲に向かって言葉を紡いだ。
「行って下さい。兄上を助けてあげて」
「はい。無論です」
「それと、無理をしてはなりませんよ」
王族らしく毅然とした態度ながらも菜の花の顔には微かに不安が滲んでいる。本人が押し殺そうとしている細微な恐怖を感じ取ってしまった海雲は小さく頭を下げ、今度こそその場を立ち去った。

友（5）

抜け道を使って城外へ出たサイゲートとアゼルは二人で街中を疾走していた。抜け道を出たところまではアゼルの私兵も一緒だったのだが、分散した方が効率がいいので散開したのである。彼らにも必ず二人以上で動くことを言い含めてあるが何分にも多勢に無勢なので、サイゲート達は極力戦闘を避けるようにしながら街の様子を窺っていた。

街には、無造作に死体が転がっていた。大量の出血の中に横たわっている人々はぴくりとも動かず、生きているとは思えない。国民の亡骸を目にするたびアゼルが辛そうな顔をするので、サイゲートは彼を励ましながら街を見て回っていた。しかしいくら走り回ってみても街には敵兵以外の人影はない。日が傾いて間もなく夜の帳が下りようとしている夕刻になると、サイゲートは取り残されている人々はもういないのではないかと思い始めていた。

「アゼル、他の奴らと合流して城に戻ろう。たぶん、海雲たちが助けてくれたんだ」

アゼルも同じことを考えていたようで、彼はすぐに頷いた。南東に向かって進んでいたサイゲートとアゼルは踵を返し、今度は北西にある王城に向かって走り出す。奇妙な温かさの中にあった赤月帝国も日が傾くと共に冬本来の寒さを取り戻してきていた。呼気が白く天へ昇っていく中、サイゲートはぽつりと独白を零す。

「他の奴ら、大丈夫かな」

「日頃から俺の相手をさせていた。そう簡単にはやられないと思うが」

サイゲートの独白に応えた直後、アゼルは唐突に足を止めた。反射的に立ち止まったサイゲートもアゼルが見つめている先に目をやって、すぐに状況を悟る。サイゲートとアゼルの前方には行く手を阻むようにたむろしている集団がいた。それぞれが武器を手にして

いる彼らは赤月帝国を侵略しようという敵である。
　サイゲートとアゼルは閉口したまま、敵に気付かれないよう慎重に後退した。王城から郊外へ向かう東に進む分には苦もなかったが、敵兵が集まっている西へ戻るには困難が伴いそうである。後退している間にそのようなことを考えたサイゲートは身を潜めるなりアゼルに話しかけた。
「城まで戻れると思うか？」
「分からない。抜け道が発見されていないという保障もないからな」
　万が一抜け道が発見されてしまったとしても少数ずつしか通行出来ない仕組みになっているので、城内に攻め入られる心配はしなくてもいい。だが街へ出てしまったサイゲート達にとっては退路を塞がれたことになってしまうのである。それならばと、サイゲートはアゼルにある提案をした。
「だったら、白影の里へ行かないか？」
「それは俺も考えていた。だが、彼岸の森を無事に抜けられるかどうか……」
　白影の里がある彼岸の森にはいたる所に罠が仕掛けてあり、術を知らない人間が足を踏み入れると危険である。アゼルはそのことを気にしているようだったがサイゲートは問題ないと頷いて見せた。
「それなら大丈夫。何度も白影の里に行ったことがある」
「頼もしいな。ならば、決まりだ」
　民家の物陰に身を潜めていたアゼルは周囲を窺いながら立ち上がった。続いて立ち上がろうとしたらアゼルに手を差し伸べられたので、サイゲートは大人しく引き上げられる。サイゲートと顔を突き合わせ、アゼルは小さく笑みを浮かべた。
「こうしていると、サイゲートに出会った時のことを思い出すよ」
「昔話してる場合じゃないだろ。カッコ悪いことすんな」
　わざと初対面の時のような科白を口にすると、アゼルは吹き出したようだった。口元だけで笑んで、サイゲートは走るよう促す。彼岸の森がある北東に向かって走り出しながらもアゼルは話を続けた。

「王子なんだからカッコ良くしとけ、か。あの言葉は結構堪えたぞ」
尚も緊張感のない態度でいるアゼルを諌めようとして、サイゲートはふと口を噤んだ。こうして自ら街に取り残されている人々を救いに来たように、アゼルは他人のために必死になれる人間である。そして命を賭してまで、彼は自分の考えに忠実であろうとする。そんなアゼルの姿は頼もしく、眩しいほどに輝いていると、サイゲートは思った。
「……お前はじゅうぶんカッコイイよ」
「サイゲート、何か言ったか？」
並走しているアゼルが顔を傾けてきたのでサイゲートは苦笑いを浮かべながら視線を外した。改めて言うような科白でもなかったのでサイゲートはそのまま流したのだが、アゼルは変わらず不思議そうな表情を向けてきている。だが前方から話し声が聞こえてくると、サイゲートもアゼルも真顔に戻った。
サイゲートとアゼルは足を止め、建物の影から声の聞こえる方を窺った。そうして目に飛び込んできた光景にサイゲートは思わず息を呑む。赤い夕陽に照らし出された光景が、目前で凶行に晒された女を彷彿とさせたからだ。敵と思われる集団の一人が、手にしている剣を子供と思しき影に向けている。地に蹲っている小さな影は怯えて顔を上げることも出来ないでいるようだった。
「やめろ！！」
隣で怒声がしたかと思ったらアゼルが敵の中に躍り出た。サイゲートも慌てて後に続き、敵がアゼルに気を取られている隙に子供を抱き取る。敵と距離をとってからサイゲートは腕の中にいる子供を見下ろした。
「大丈夫か？」
サイゲートが声を掛けると子供は顔を歪めて泣き出した。安堵の涙を見たことでサイゲートも改めてホッとする。
（よかった、今度はちゃんと……）
王城に入る前に死体となってしまった女は、助けることが出来な

かった。やむを得ず死体を遺棄した時の苦い思いが再び胸に広がり、サイゲートは唇を噛みながら子供の背を撫でる。そこへ呆けたようなアゼルの声が聞こえてきた。
「あなたが、やったのですか？」
サイゲートが振り向くと、アゼルも敵も動きを止めていた。サイゲートの位置からではアゼルの表情が見えないが、彼が対峙している者を窺うことは出来る。アゼルが言葉を交わしているのは白髪の老人だった。集団の中で一人だけいい身なりをしている老人は淡々とした口調でアゼルの問いに応じている。
「王子、あんたは恵まれとるから分からんのだ」
「何故……どうしてです？」
「ここにいる者達はみな、家族のようなもの」
「だからといって、他人の命を奪って良いはずがないでしょう」
「あんた達は平和だったから、考え方が違いすぎる」
これ以上話すことなどないと言うように、老人がアゼルに背を向けた。それを合図にしたかのように老人の周囲にいる者達がじわじわとアゼルとの距離を詰めていく。アゼルから目を離さないまま、サイゲートは抱いていた子供を地に下ろした。
「ここで、おとなしくしてろ」
子供にそう言い置くと、サイゲートはアゼルに向かって地を蹴った。放心しているのか、アゼルは敵が接近してきても動きを見せない。
「自分だけ良ければいい。そう考えるには、外の世界はあまりに悲惨なのだ」
アゼルが対峙していた老人の声を、聞いたような気がした。だが幾度もの衝撃に晒された体はうまい具合に動かず、サイゲートはその場に倒れ伏した。

間もなく残光が姿を消そうとしている昏い夕暮れ時、呆然と立ち尽くしていたアゼルは瞬きを繰り返していた。彼の前には薄闇と訣別しているかのような白装束を纏っている者が背を向けて佇んでいる。その手には短刀が握られており、黒い雫が滴っている。本来は純白であるはずの白装束もまた、黒い染みに汚されていた。

「……海雲」

次第にはっきりしてきた頭のどこかが汚れた白装束を纏っている者を友人であると認識し、名を呟かせる。だが見慣れているはずの友人の姿は怪しい残光に照らされて禍々しい影となっていた。振り向いた海雲の瞳が夜に光を放つ獣のようだったので、ゾッとしたアゼルは反射的に目を逸らす。そうして落とした視線の先で、アゼルは惨劇を目の当たりにした。濡れた短刀を手に佇んでいる海雲の周囲には飛ばされた首、切断された胴、引き千切られた腕などが散らばっている。五体満足の者は一人もいない、皆殺しだった。

つい先刻まで人間だったはずの肉塊が敵であったことを思い出したアゼルは、同時にもう一人の友人のことを思い出した。取り残されている人々を救うため共に城を出たサイゲートの姿が、見えない。

「そうだ、サイゲート。サイゲートは？」

途端に忙しない気持ちになったアゼルは慌ててサイゲートの姿を探した。無言で近付いて来た海雲が足下にしゃがみ込んだのでアゼルも視線を落とす。するとそこに、粗末な槍や剣を突き立てられたサイゲートが倒れていた。

「サイゲート！！」

悲鳴に近い声を上げ、アゼルはサイゲートの傍らにしゃがみ込んだ。サイゲートが死んでしまうという恐怖に駆られたアゼルは無我夢中で彼に刺さっている剣に手を伸ばしたのだが、体を割り込ませてきた海雲が制する。

「抜くな！！」

間近で怒声を浴びせられたことでアゼルは硬直した。海雲は武器が刺さったままのサイゲートの腕を取り、自分の体を支えにして立ち上がらせる。

「そっちの子供を連れて来い。白影の里へ戻るぞ」

無情なほど静かな声で告げて、海雲は正体のないサイゲートを引きずって歩き出した。海雲の言葉を受け、アゼルは彼が示した方を振り向く。少し離れた所で座り込んでいる子供が、色のない瞳をして見るともなくこちらを見ていた。

（……そうだ、この子供を助けるために飛び出した）

第三者の姿があったことで冷静さを取り戻したアゼルは記憶を確かめようと自分に言い聞かせた。解らないことや聞かなければならないことは山ほどあるが、今は海雲の言う通りにするしかない。そう思ったアゼルは泣きもせず惨劇を直視している子供を抱え上げ、海雲の後を追った。

友（6）

白影の里に戻って、海雲はまず配下に指示を出した。その内容は街中に侵入した敵を殲滅することと、王城の警備を固めるという二点である。この命令を下した際、海雲は敵兵殲滅の手段を厭わないことを里の者達に告げた。冷静な決断だったとは言えないかもしれないが、それが必要だと判断したからである。

かげろうの森から戻った者達をそのまま街へ向かわせてから海雲は屋敷へ戻った。畳敷きの客間には布団が敷いてあり、そこには白い顔をした怪我人が横たわっている。布団の脇には医学に通じている老人の姿があり、海雲は腰を下ろしながら彼に声をかけた。

「様子はどうだ？」

「急所は外れていたようで、出血はそれほどでもありませんでした。しばらく安静にしていれば大丈夫でしょう」

「解った。他の者も診てやってくれ」

老人を急き立てるように追い出し、海雲は手にしてきた薬研を使って薬草をすり潰し始めた。車輪と小舟の底が擦れ合い、静かな室内にごりごりという音を響かせる。そうこうしているうちにアゼルが姿を現したので海雲は作業の手を休めずに話しかけた。

「あの子供はどうした？」

「……口を開こうとしないし、泣きもしない」

「……そうか」

居合わせた子供にまで、惨いものを見せてしまった。だがあの状況で子供の精神状態にまで気を回せる余裕はなかったと、海雲は苦く思いながら閉口する。

「サイゲートが、死んだかと思った」

しばらくの沈黙の後、アゼルがぽつりと独白を零した。ちょうど作業が終わったので海雲も顔を上げ、布団に横たわるサイゲートを注視しているアゼルを見つめる。その頬には涙の跡が見えたが、今

は必要以上に話をしている時間はなかった。
「俺はすぐ王の下へ行かなければならない。だから、必要なことだけ聞いておく」
「……ああ」
「アゼル、お前は襲われる前に誰かと話をしていたな。あれは誰だ？」
「あの人は……流民だ」
サイゲートに目を注いだまま、アゼルは弱々しい声音で答えを口にした。何の表情も表していないアゼルの顔から視線を外し、海雲は考えに沈む。
赤月帝国は厳重に外界との接触を遮断しているが、それでも安全な地を求める者が辿り着いてしまうことがある。海雲自身その事実は把握していたが、捕縛した流民と直接会うことなどはなかった。流民は保護された後、王に謁見することになっている。それで、アゼルは面識があったのだろう。彼のことだ、その後も交流を持っていたに違いない。
流民も一度受け入れられると防犯上の理由から国外へ出ることは許されない。だから、あの老人は赤月帝国内に住んでいた。その気にさえなれば、これほど適任な間諜もいないだろう。
「手を貸したのは、あの老人か」
「自分だけ良ければいい、そう考えるには外の世界はあまりにも悲惨なのだと、言っていた」
忌々しげに独白した海雲に対し、アゼルは淡々と老人の言葉を伝え聞かせた。海雲は閉口し、そのまま唇を噛む。
おそらく老人は、戦火にみまわれた村か何かの長老だったのだろう。彼は赤月帝国の民になりすまし、家族を呼び寄せる機会を狙っていた。大聖堂（ルシード）と連絡をとったのは、おそらくかげろうの森が焼かれた後だ。あの森林火災の混乱の中、生き延びて国内に侵入した輩が連携を取り持った。その目晦ましのために多くの仲間を焼き殺した可能性すらある。それはちょうど、冬が来ると気が緩んでいた時

期でもあったのだ。
（……くそっ、）
いくらでも未然に防ぐ手段はあったはずだと、海雲は胸中で自身を罵った。一瞬の甘さが命取りになる、そんなことは骨身に沁みて解っていたはずなのに。
「アゼル、お前の私兵は何人か殺されていた。生きていた者は里に担ぎ込んである」
「……分かった」
「それから、俺は本気になる。もう容赦はしないつもりだ」
「……仕方ない、と思う」
「サイゲートの傍にいてやってくれ。絶対安静だ」
会話をしている間、決して目を合わせようとしなかったアゼルが俯くように頷いて見せる。後は湯に溶くだけの粉末を薬研ごとアゼルに託し、海雲は静かに立ち上がった。

視線は目前のサイゲートに固定しながらも、アゼルは背中で聞こえた襖を開閉する音に耳をそばだてていた。背後に感じた海雲の様子からは特に変わったところは見受けられない。しかし静かではあっても確実に、彼は怒っていた。
自身に向けられた怒りではないのに、アゼルは過敏なほど神経質になっていた。それは容赦しないと吐き捨てた海雲が恐ろしかったからかもしれない。だがその彼の姿も、もうないのだ。アゼルは深く息を吐き、それから改めてサイゲートを見た。畳の上に敷かれた布団に横たわっているサイゲートは血の気の失せた白い顔をして目を閉ざしている。静寂の世界で沈黙を保っているサイゲートはまる

で死人であり、アゼルは膝の上に置いた手を強く握った。
（……こんな目にあわせたのは、俺だ）
敵の前で自分を見失い、サイゲートに助けられた。彼が身を挺してくれなければ、今頃この布団に横たわっていたのはアゼルの方だっただろう。そして海雲が来てくれなければ間違いなく、二人とも死んでいた。ぴくりとも動かないサイゲートを見つめていると、その思いは痛切に押し寄せてくる。孤独に耐えられなくなったアゼルは静かに立ち上がり、そのままサイゲートのいる部屋を後にした。
（逃げるのだな）
板張りの廊下を歩き出しながら、アゼルは自嘲に唇を歪める。サイゲートからも海雲からも目を逸らし、こうして逃げているのだ。
「アゼル様！」
外へ出ようとしていたアゼルは、ちょうど外から屋敷に入ってきた者の声に伏せていた目を上げた。屋敷の出入口である土間には私兵の一人が喜色を浮かべて佇んでいる。彼はすぐ、アゼルの下へ近寄って来た。
「ご無事だったのですね。よかった」
心からそう思っている様子で、彼は土間に跪く。片腕を三角巾で吊っている若者の姿に、アゼルは思わず顔を歪めた。
「ひどい傷だ」
「私は軽症です。ですが、他の者が……」
私兵は言葉を濁し、痛ましい表情で俯いた。面を伏せて力なくうな垂れている若者を、アゼルはじっと見つめる。
軽症と言うわりには手当ての痕が生々しい彼よりも重症な者とは、どれほどの傷を負っているのだろう。それでも、命があっただけ好しとすべきなのか。五体満足で死ねぬ者もいるのだと思い返し、アゼルは口元に乾いた笑みを上らせた。例え敵であったとしても、海雲が惨殺した死体は見るに耐えない。だが元々はあの老人が裏切ったから制裁が加えられたのだ。そうした支離滅裂な呟きが浮かんでは消えていき、アゼルは為す術なく空を仰いだ。

（どう、思えばいい）
自分の思考すら制御出来ない。そう感じて初めて、アゼルは動揺していることを悟った。
「アゼル様？」
「……他の者は、何処だ。看護の手伝いに行く」
「はい。ご案内致します」
今は、何も考えたくない。そう思うことがすでに逃げているのだと知りながら、アゼルは思考を閉ざして土間に下りた。

友（7）

赤月帝国の軍隊である白影の里は一般的な国に見る軍隊とは役割も在り方も異なる。通常の戦場であれば敵兵の死体などは放置されたままであるが、白影の里と戦って命を落とした者はその死体すら人目に晒されることはないのである。そのため、死体の一つも転がっていない街からは戦闘がすでに終了していることが窺えた。篝火も灯されていない街は昏く、ひっそりと静まり返っている。闇に人間が潜んでいるような気配もない殺伐とした街を通り過ぎた海雲は抜け道を使って王城に入り、そのまま謁見の間を目指した。

王城内も夜を迎え、どこかから話し声が流れてくることもなく静まっている。海雲は足音を忍ばせながら上階へ上り、謁見の間へと歩を進めた。そこではすでに王が着座しており、海雲は玉座の足下に跪く。王の出方を窺うこともなく海雲は早々に口火を切った。

「やり方を、変えさせていただけますね？」

「それは報告を聞いてから決めたい」

ここまで好き勝手をされながら王がまだ甘いことを言うので海雲はありのままを報告した。命を落とした国民が多数いて、負傷者を見てもまだ増えそうなこと。国民は誰一人自ら戦おうとしないので人手が足りないこと。赤月帝国に保護されていた流民が今回の襲撃を手引きをしたこと。街をうろついていた輩は排除したが、森から来る連中が迫っていること。そして、邪魔だと言わんばかりにかげろうの森が切り開かれている。王城からは見ることの出来ないそうした事実を明かすと、さすがに王も閉口した。海雲は表情を変えることなく淡々と言葉を続ける。

「対策が甘すぎたのです。これだけ国民に被害が出てしまったのですから、もう容赦はいらないでしょう」

王が、出来るだけ殺さずに事を運びたいと思っていたことを海雲は知っている。例え、それが敵であったとしてもだ。しかしそれは

実際の戦争をしたことのない人間の認識の甘さと奇麗事の博愛主義である。人間は誰しも自分が殺されそうになれば相手を殺す。肉親が殺されれば立ち上がり、刃を振るう。白影の里の者は幼い頃から戦場に立たされるので、それを骨の髄で知っていた。ただ、そういう感情に呑まれてはならない。王の優しさも人間として捨ててはならないものだと感じていたから、海雲は今まで配慮してきたのだった。だがここまでやられてしまった以上、もはや黙っていることは出来ない。優しさと甘さは違うものだからだ。

「……大聖堂(ルシード)も馬鹿なことを。森を壊してしまっては我が国は要塞ではなくなる」

海雲の言葉を受けた王は嘆きを露わにし、小さく首を振った。かげろうの森を壊すということは開かれた道が出来るということであり、そうなれば赤月帝国とて国を閉ざしておくことは難しくなるだろう。何人にも侵されない聖地としての赤月帝国を欲しているのに、流民達は自らの手でそれを壊しているのだ。そんなことも解らなくなってしまうほど、攻め寄せて来ている連中はまともではない。それが解っても王は何も言わなかったので海雲はさらに言葉を重ねた。

「王よ、白影の里の棟梁として申し上げます。今まで我々は国内を著しく侵した者にのみ、制裁を加えて参りました。それは王を初め、王族の方々のお考えに配慮した結果です。指導者たる王が決断を下されさえすれば、どのような敵も侵入を許すことはなかったでしょう」

自然の要塞ならば、それでもよかった。だが外界との隔たりであった森は焼かれ、道が出来、今までのような態度をとることは難しくなる。いつまでも殺さずを貫きながら我関せずの態度を守るのは、無理なのだ。

「過ぎてしまったことを非難しているのではありません。ですが、それが過ちだったのならば新たな道を選ぶべきでしょう。……ご決断を」

海雲に決断を迫られた王は静かに目を閉ざした。その表情からは

何を考えているか、読み取ることは出来ない。海雲はじっと、王が口を開くのを待った。
「……我が赤月帝国の軍隊、白影の里の棟梁よ」
しばらくの沈黙の後、王は言葉を紡ぎながらゆっくりと目を開けた。無表情を努めようとしているが、彼の瞳には深い悲しみの色が表れている。どのような決断が下されようと動揺することのないよう、海雲は自身に平静を呼びかけながら王の声を聞いていた。
「そなたの言う通りだ。国を……そこに暮らしている民を護るのが我らの使命。私も汝らと共に行こう」
王が自ら戦場に赴くと聞き多少の驚きを覚えたものの、海雲は進言が聞き入れられたことに一礼で感謝を示した。そうと決まれば行動は早い方がいいので、海雲はすっと立ち上がる。
「ご無理は、なさいませんように。王子と姫が心配なさいます」
「民を苦しめたのは私の責任だ。案ずるな、軍権はそなたにある」
苦しい笑みを浮かべて見せ、王も腰を上げる。目前を通り過ぎて行く王を目で追った後、海雲は思いの外しっかりとした足取りで進んでいる王の後に従った。

目を開けてから幾度か瞬きを繰り返して初めて、サイゲートは自分が目を閉じていたことを知った。視界を占めている天井は板が張ってあるだけの自室のものではなく、木枠で造られた珍しい形をしている。手に触れている布団が上質な肌触りをしていることや、独特な青い匂いがすることからも、サイゲートはすぐに自分がいる場

所が自宅では有り得ないという確信を抱いた。
（どこだ……？）
まだぼんやりとしている頭の片隅でそんなことを思い、サイゲートは首だけ動かしてみる。すると近くに、知った姿があった。
「……アゼル？」
布団の脇にアゼルが腰を落ち着けているが俯いているため顔までは見えない。そして呼びかけに対する反応も、なかった。
「アゼ……っ、」
もう一度名を呼びながらサイゲートは体を起こそうとした。だが激痛が走り、一度は浮かした背を再び布団に預ける。しかし腹や背が熱く、顔を歪めずにはいられないほどの痛みにサイゲートはのたうちまわった。
ひとしきり悶えた後、サイゲートはのたうつ力もなくなって脱力した。自身では体位を整えることも出来ないでいるサイゲートに、アゼルが腕を伸ばす。背を抱えられるようにして仰向けにされていると、自然とアゼルの顔が見えた。その表情を見なかったことにしようと思い、サイゲートは目を閉じて体を委ねる。
「薬を作ってくる」
サイゲートが乱した布団を整えた後、アゼルは短く言い置いてから部屋を出て行った。痛みからきているのか酷い眩暈がしたが、サイゲートは懲りずに体を起すことを試みる。痛みが意識を覚醒させ、寝ている場合ではないことを思い出してしまったからだ。
（ああ……）
どうせ痛いのならばと一息に体を起こしたサイゲートはそのまま動けなくなってしまった。立ち上がることも布団に逆戻りすることも出来ず、前のめりになっている状態で荒い呼吸を繰り返す。そうこうしているうちにアゼルが戻って来てしまい、彼に悲鳴のような声を上げさせることになってしまった。
「何をしている！？」
「い、いや……大丈……」

「説得力がないにも程があるぞ！」
「ほんとに、平気。だからクスリ、くれるとうれしい」
サイゲートが脂汗を流しながら無理矢理笑みを作ったのでアゼルは呆れたような顔をした。しかし口論より薬が先だと判断したのか、アゼルは手にしていた湯のみをサイゲートの前に差し出す。
「熱いから気をつけろ」
アゼルが注意を促したように湯呑みからは湯気が立ち上っていた。何か動作をするたびに疼く痛みと戦いながら、サイゲートは少しずつ湯呑みの中身を口に運ぶ。どろどろした液体は決して美味いものではなかったが、サイゲートは時間をかけて何とか湯呑みを干した。
「……いたくない」
湯呑みを干してから少し時間を置いた後、サイゲートは不思議な思いで呟いた。大袈裟な動作をする勇気はなかったものの、今は小さな動きであれば体を動かしていても痛みはない。サイゲートが手を握ったり開いたりしていると、それまで黙っていたアゼルが静かに口を開いた。
「効果はよく知らないが、効いたようだな」
「あのさ、水くれないかな。これ飲んだらよけいのどがかわいた」
「待っていろ。今、持ってくる」
空になった湯呑みを持って、アゼルが再び立ち上がる。襖が閉まるまでアゼルを見送った後、サイゲートは改めて周囲を見回した。サイゲートがいる部屋は畳敷きになっているが、これは街中では見ることのない光景である。街とは異なる独特の建築様式には覚えがあったのでサイゲートは胸中で呟きを零した。
（……白影の里か）
そしておそらく、ここは海雲の家だろう。サイゲートがそう思ったのは意識を失う前に海雲の声を聞いたような気がしたからだった。白影の里にいるということは、あの声は現実のものだったのだろう。
痛みはなくなったが傷が気になったので、サイゲートは自分の体を見下ろした。サイゲートが身につけているのは普段着用している

シャツなどではなく、白影の里で寝具として使われている浴衣である。着慣れない着物の合わせ目を緩めたサイゲートは改めて、違和感のある腹の辺りを眺めた。腹から肩にかけて、上半身はほぼ白い布で覆われている。血の痕などは見えないが、そこに痛みの元凶があることは明白だった。

ふと室外に人の気配を感じて、サイゲートは顔を上げた。間もなく襖が開き、湯呑みを手にしているアゼルが姿を見せる。サイゲートは反射的に着衣の乱れを直したのだが、その行動をアゼルに見咎められてしまった。

「気になるかもしれないが、あまり触るな」

わずかに顔をしかめながらアゼルは釘を刺す。サイゲートは真顔のまま頷き、差し出された湯呑みを受け取った。今度はどろっとした液体ではなく、湯呑みを満たしているのは水である。薬湯の時はあまりの不味さに味覚まで麻痺していたが、水を流し込むと血の味がした。

サイゲートが空になった湯呑みを置いてもアゼルは口を開こうとしなかった。アゼルが目を合わせることもなく黙りこくっているので、仕方なくサイゲートから口火を切る。

「海雲は？」

「……父の元へ行った」

「そっか。心配したけど大丈夫だったみたいだな」

「ああ。白影の里の者は大事無い」

「いっしょに街へ出た連中は？」

「……何人か死んだ。無傷な者もいない」

「……そうか」

共に戦った者の死は心にずしりと重く、サイゲートはそれきり閉口した。進んで喋ろうとしないアゼルも口を噤んだので再び沈黙が流れる。サイゲートは故意に話を途切れさせたわけではないのだが、アゼルが会話を拒んでいるのだった。

アゼルの様子がおかしいことをサイゲートはすでに察していた。

彼が何故そうなってしまったのかも何となく理解していたが、その話題を切り出せるほどの余裕はサイゲートにもアゼルにもない。以前サイゲートが同じような状況にあったとき言葉足らずであったにもかかわらず想いを汲んでくれた海雲であれば、アゼルに対しても的確な対応をしてくれるだろう。この場に海雲がいてくれたらと、サイゲートはつい思ってしまった。

「サイゲートの義父君がここにいる。もう目が覚めたことを伝えてあるから、間もなく来るだろう」

しばらくの沈黙の後、口火を切ったのはアゼルの方だった。その内容が思いもよらないものだったのでサイゲートは瞠目する。

「親方が……」

「また後で来る」

呆けているサイゲートにそれだけを言い残し、アゼルは静かに立ち上がる。アゼルが去ってから少しすると、今度は親方が姿を見せた。

「無茶をしたもんだな」

布団に張り付いているサイゲートを見下ろし、親方は平素と何ら変わらない調子で声をかけてきた。彼の無表情はこんな時でも動くことはなく、無愛想な喋り方も健在である。一見したところ怪我をしている様子もなかったのでサイゲートは心底ホッとした。

「よかった、大丈夫だったんですね」

「ここの連中に助けられた。ずっと街にいたら危なかったかもな」

「奥さんや娘さんも大丈夫ですか？」

「さあな。そう簡単にくたばるとも思えないが」

親方の口調から察するに、未だ連絡も取れない状態が続いているようだ。布団に縛り付けられている状態では状況を把握することすら難しく、サイゲートは歯噛みする。それでも何か出来ることはないかと考えを巡らせていると親方が再び口を開いた。

「俺は少し王族を見直したぞ、サイゲート」

「えっ？　何の話ですか？」

親方の真意を掴み損ねたサイゲートは思考を中断して顔を上げた。布団の脇に立ったままでいる親方は感慨を表すでもなく、淡々と言葉を次ぐ。
「王子がな、泣いて頭下げに来た。お前がこんなになったのは自分のせいだとな」
「アゼルが……」
「友達なんだな、お前ら」
親方の言葉はおそらく、感じたままをただ口にしただけのものだった。だがその一言が驚きだったサイゲートは思わず目を見張る。
（……ともだち……）
街中で初めてアゼルを見た時、彼は『王子』だった。注目される存在で、人を集めていて、羨ましいと思うほどに遠い存在だったのだ。親方や仕事仲間が言っていたように違う世界の人間だと、思ったこともある。だが『王子』ではなく一個人としてのアゼルと付き合ってみて、その考えは一変した。人を集めるのは彼が王族だからではなく、アゼル自身が人間を好きだからなのだ。そうしたことを考えてみて初めて、サイゲートは自分がアゼルを『王子』として見ていないことに気がついた。
（だったら友達、だよな？）
王子と一国民という関係でもなく、ただの知人でもない。ならばすでに『友達』だったのだ。そう思った時、サイゲートは自分がやらなければならないことが見付かったような気がした。
もう寝ていることが出来ず、サイゲートは立ち上がった。それまで呆けていたサイゲートが急に行動を起こしたので親方が微かに眉根を寄せる。
「起きて平気なのか？」
「はい。親方、ありがとうございます」
「……何がだ？」
眉間の皺をいっそう深くした親方は怪訝そうな顔をしている。説明を加えることはせず、サイゲートはただ笑って見せた。

友（8）

王の決断を受けた海雲は里の者を率いて再度かげろうの森に赴き、前線で指揮を執っていた。大聖堂（ルシード）軍は進軍と共に森林を伐採していたが、先頭集団を殲滅したため現在は森から手を引いている。しかし依然として撤退の気配はなく、敵兵は森を出たところで停滞していた。動きがないのは上からの指示を待っているからだろう。

かげろうの森には火を放とうとした跡なども見受けられたが雪を被った森に火攻めは無意味である。だからこそ敵兵はわざわざ労力を使って森を切り開いていたのだが、それも雪が消えれば変わってくるだろう。乾いた森になら、彼らは再び火を放つかもしれない。そうした危惧が捨てきれないからこそ冬のうちに決着をつけるべきだと、海雲は思っていた。

戦場にはすでに冬が戻ってきており、小雪が舞っている。森の中から敵陣を遠望している王は先程から口を開くこともなく、ただ一点を見据えていた。護衛を兼ねて隣に佇んでいる海雲は周囲に気を配りながら王の横顔を盗み見る。王は何事かを考えているのか、意識を留めていない遠い目をしていた。

（……まだ、迷っておられるのだな）

戦陣に赴いてからの王は極端に無口である。それは目前で命が奪われていくことに対する深い嘆きの表れなのかもしれない。自国民の命を奪った敵を目の当たりにしていても、王の慈悲は消えないようだ。

（目の当たりにしてしまうからこそ、なのか）

大聖堂が兵として使っている者達は皆、元は流民である。貧民はこの寒さの中、防寒具も着られずにボロボロの格好をしている者が多い。凍死した者も少なくないだろう。そんな姿に、王は同情を寄せてしまうのか。

（その同情は不要だ）

時には非情になることも覚えさせなければならない。そう思った海雲は静かに口火を切った。
「王よ、この世界で生きているのは人間（ヒト）だけではありません。長い歴史の中、我が国を戦火から護ってくれた森もまた生きているのです。彼等はたやすいことのように森を焼きましたが、元の姿に戻るには気が遠くなるほどの年月が必要なのです」
「人間は自然と共に生きる。彼等はそれを忘れてしまったのだな」
「人間（ヒト）はまた、死して自然に還ります。さすれば、彼等も思い出すでしょう」
「……ここまでしても、彼等は再び攻めて来るだろうか」
「世の中が変わるか、大聖堂を総括している者達が代わらない限り、愚問でしょう」
「その選択肢の中に我が国が変わるということはないのだろうか？」
王の発言に驚きを禁じ得なかった海雲は弾かれたように振り向いた。人間が死ぬことに慣れていない者があまりに多くの死を目の当たりにすると、気が触れてしまうことがある。海雲はそうした心配をしていたのだが、王は澄んだまなざしで敵陣を見つめていた。
「ずっと、考えてきた。大聖堂は我が国が持つ情報が欲しいのであろう？　そして大聖堂の兵である流民は戦火に怯えることなく暮らせる地が欲しい。利害が一致しているから、彼らは我が国を敵としている」
「……王？」
「大聖堂も、だいぶ痛手を被った。無論、我が国も。今ならば交渉の場が持てるのではないだろうか」
交渉などということは考えたこともなく、海雲は絶句して瞠目した。王はだいぶ以前からそうした考えを温めていたようで淀みなく言葉を続ける。
「確かに、我が国は長く平和であった。それゆえ外の国とは馴染まぬかもしれぬ。だが話し合いもしていないのだ。初めから可能性を否定しすぎてはいないだろうか？」

王の言っていることは、一理ある。だが今更そんなことを言い出しても手遅れだと思い、海雲は顔をしかめた。
「王よ、その決断を下されるには殺しすぎました。大聖堂の者達はともかく、流民達は聞き入れてくれないでしょう」
「過ちは正さねばならぬと言ったのは汝だ。これ以上の恨みを増やす前に、この戦を終わらせたい」
本気だと、真っ直ぐに見据えてきた王の瞳が言っている。全身から強い意志を漲らせる王を直視出来ず、海雲は視線を外して考えこんだ。
話し合いという選択肢を海雲は今まで一考したこともなかった。世界では弱肉強食の風潮が主流であり、そのような中で条約を取り決めたところでほとんど意味を成さないからだ。話し合いは無意味に等しいが、このままでは憎しみが憎しみを生み、赤月帝国と大聖堂は争いを繰り返すだろう。長い目で見れば、話し合いでの解決が必要になる時が必然的に訪れるはずなのだ。話し合いの無意味さと共に、それもまた確かなことだった。
(有り得ないなら、どちらかが滅びるしかない)
白影の里が存在する限り、赤月帝国を滅ぼすような真似はしない。しかし大聖堂を滅ぼしたところで憎しみは生き続ける。
「……王よ、」
いつの間にか組んでいた腕を解き、海雲は王を振り返った。

手を貸すと言ってくれた親方に断りを入れ、サイゲートは自分の

足で板張りの廊下を歩いていた。薬湯のおかげで痛みは麻痺しているが失血した後だけに足下がフラついている。それでもサイゲートが進んでいるのは自らの足で動かなければならない想いがあるからだった。

屋敷内にいた白影の里の者に探している人物がどこにいるのかすでに訊いていたので、サイゲートは迷うことなく歩を進めた。そうして辿り着いたのは、サイゲートが寝かされていた客間とよく似た造りの一室である。その部屋の中には街で助けた子供とアゼルの姿があり、来訪者を振り向いたアゼルが驚いたように目を剥いた。

「サイゲート！？」

アゼルは慌てて立ち上がり、サイゲートの傍へ寄って体を支えた。だいぶ体が重かったので支えてくれることに感謝を述べてから、サイゲートは口調を改めて口火を切る。

「アゼル、話がある」

「後で聞く。それより、部屋へ戻るんだ」

「今、聞いてくれ」

サイゲートが強く言うとアゼルは黙りこんだ。しかしアゼルは問答無用でサイゲートの腕を取り、自分の肩へ回す。そのまま口を開くこともなく、アゼルはサイゲートを引きずるようにして歩き出した。

サイゲートがやっとの思いで進んで来た廊下を逆戻りし、彼らは布団が敷いてある客間へと戻って来た。アゼルに何かを言われたわけではなかったが、サイゲートはおとなしく布団の上に座り込む。話をするのに横たわっていたくなかったからなのだが、アゼルもこれに関しては黙認してくれたようだった。話し合いの席は整ったものの、どちらも口を開かなかったので妙な沈黙が流れる。どうやって切り出そうかと思案していたサイゲートが口火を切ろうとすると、そのタイミングを狙い済ましたかのようにアゼルが言葉を重ねた。

「話が、あるのだろう？　大方の察しはつくが」

アゼルの口ぶりは皮肉なものだった。その表情にも平素の清廉さ

はなく、彼は心まで歪めてしまったかのような薄笑いを浮かべている。だがサイゲートは出端を挫かれることもなく、不思議なまでに落ち着いた気持ちでアゼルに語りかけた。
「その前に一つ聞かせてくれ。アゼルはオレのこと、どう思ってる？」
「どう、とは……？」
サイゲートの切り出しが予想と違うものだったのだろう、顔を上げたアゼルは明らかな困惑を見せていた。唐突にこんな問いを投げかけられれば即答出来ないのは無理もないと思い、サイゲートは真意を明かす。
「オレはもうアゼルのことを王子として見てない。さっき、そう気づいたんだ。オレはアゼルのことを友達だと思ってる。アゼルはどうなんだよ？　今でもオレはただの国民か？」
「……待ってくれ、サイゲート」
「待てない。考えるようなことか？」
「そういう訳ではないが……何の話なんだ」
「ちゃんと答えろよ」
アゼルが煮え切らないことを言うのでサイゲートは憤りを表した。サイゲートの語気が激しくなったことに驚いたのかアゼルは瞠目し、呆けているように動きを止めている。サイゲートはアゼルの返事を待ちながら、いつか海雲ともこんな話をしたなと過去を振り返っていた。
この場所で同じような話をした時は今と立場が逆で、海雲にさんざん怒られたのはサイゲートの方だった。あの時はうまく言葉にならない感情を荒っぽくぶつけたサイゲートに対し、海雲もまた素直に感情を露わにしたので殴り合いになってしまったのだ。だがしこたま殴り合って、ようやく目が覚めた。アゼルが相手では流石に殴り合いというわけにはいかないが、言葉で彼の目を覚まさせてやることは出来るだろう。出来る間柄だと、サイゲートは信じていたかった。

「どうなんだよ？　大事なことだぞ」
アゼルがいつまで経っても口を開こうとしないのでサイゲートは念を押した。その一言で我に返ったのか、アゼルは気まずそうにしながら下を向く。しかし小声で、答えは口にした。
「友だと、思っている」
「海雲のことは？」
「……同じだ。友だと、思っている」
海雲の名前が出たことでアゼルは表情を硬くしたが、何とかそれだけを口にした。アゼルが同じ気持ちでいてくれるのならと、サイゲートは言葉を次ぐ。
「今、アゼルが苦しいと思ってることは、なんとなくわかる」
サイゲートが本題を切り出したことでアゼルはさらに表情を硬くした。彼はきつく唇を結び、体をも強張らせながら拒絶を示している。だがここで話をやめることが優しさだと、サイゲートは思わなかった。
「言いたくないなら言わなくていい。だけど言いたいんだったらオレが聞くよ。今は海雲がいないから、一人で聞く」
アゼルに苦しみを打ち明けられたところでサイゲートにはどうすることも出来ないだろう。サイゲート自身にもそのことは解っていたが、吐き出してしまえば楽になることもあるのだ。そうして幾度も、海雲に救ってもらったからこそサイゲートは言葉を重ねた。
「オレは前にどうしようもないことで悩んでた。でも海雲に聞いてもらって、楽になった。それから、友達ってそういうものだと思ってる。オレの言ってること間違ってるか？」
「……間違っているとは、思わない。友とはそういうものだと……俺も思う」
「なら……」
アゼルに言い聞かせようと必死になっていたサイゲートはそこであることに気がつき、呆気に取られた後、口を噤んだ。サイゲートの不可解な動作を目にしたアゼルも背後を振り返り、そのまま絶句

する。
「身分とか、そんなものは関係ない。大事なのは当人達がお互いをどう思っているか、だ。そしてお互いのために何が出来るか考えることだ。これは俺達だけじゃなく、全ての人間に言えることだけどな」
開きっぱなしになっていた襖に背を預けている人物が、悠然とそんなことを言ってのける。いつの間にか、この屋敷の主である海雲がそこに佇んでいた。

友（9）

畳の上に品良く座っていたアゼルは振り向いたきり動きを止めており、布団の上で胡坐をかいているサイゲートはむっつりとした表情で閉口している。二人それぞれの反応がおかしくて、海雲は思わず笑みを零した。そうしてあからさまに驚いてもらえると、わざわざ話の腰を折った甲斐があるというものだ。

「……いつからいた？」

高みの見物をしていたのが気に食わなかったのか、サイゲートが睨みながら尋ねてくる。サイゲートの態度には本心を聞かれた気恥ずかしさが見え隠れしており、海雲は照れ隠しにもなっていないと笑いながら問いに答えた。

「さっきから。だいぶ元気になったみたいだな、サイゲート」

「ああ、だいぶマシになった。それより、お前がここにいるってことは……」

「戦が終わった訳じゃない。まあ、一時休戦って感じだな」

サイゲートと会話をしながら海雲はアゼルの隣に腰を落ち着けた。平素であれば何ということもない距離なのだが、アゼルが不意に身を硬くする。アゼルの緊張を感じ取ってしまった海雲は真顔に戻って隣を振り向いた。

「アゼル、よく聞け。王という立場にある者は孤独と向き合わなければならない。王だけでなく誰かの上に立たなければならない人間は皆、孤独と戦っている。だがお前はまだ王子だ。この意味を、よく考えろ。これは白影の里の棟梁としての言葉だ」

海雲が真面目な話を切り出しても、アゼルは目を合わせることも顔を上げることもしなかった。彼は俯いたまま畳の一点を見つめていたが、耳を塞いでいるような様子はない。その態度にはアゼルの複雑な胸中がありありと表れていた。海雲は間を置かず、強く握りすぎた雪球のように凝り固まってしまったアゼルの心を融かすため

言葉を次ぐ。
「もう一つ。これは友としての発言だが、言いたいことがあるなら顔に出さずに口に出せ。お前の友は、よく見ている」
「……よく、解った」
苦い口調ではあったものの、アゼルがようやく返事を寄越した。必死にアゼルを説得しようとしていたサイゲートもホッとしたような表情をしている。二人の様子を一瞥してから、海雲は改めてアゼルに向き直った。
「俺に何か不満があったんだろ？　いつものお前らしく、率直な言葉で伝えろよ」
一度は顔を上げたものの、海雲が真っ直ぐな視線を向けるとアゼルは再び目を伏せてしまった。またしても沈黙が流れたが、今度はさほど時間を要さずにアゼルが口火を切る。
「感情に、流されすぎてはいないか？」
アゼルの発言は真意を掴みにくいものであり、海雲は眉根を寄せた。
「例えば？」
「サイゲートが俺を庇って飛び込んで来た時、五体満足で死んだ者はいなかった。同じ殺すにしても子供の前だったのだし、もう少しやり方があっただろう」
「では言わせてもらうが、あの場にいたのは俺一人だ。得物を持った数人相手に死にかけのサイゲート、正気を失ったアゼルを救わなければならない。そんな状況で手加減をしている暇も、子供の精神状態に構っている余裕もなかった。お前だったら出来たか？」
「……無理だろうな」
「お前が話していた老人が流民であると事前に知っていれば、もっと別な対応も出来ただろうがな。あの時はあれが精一杯だった」
「……そうだな」
「他には？　まだ何かあるか？」
「……もう容赦はしないと出て行った時、お前の目には怒りが煮え

滾っていた。あれは感情から出た言葉ではなかったのか？」
「白影の里は赤月帝国を護るために存在している。だから棟梁である俺の役目は被害を出さずに敵を撃退することだ。あれ以上好き勝手されると敵は勢いに乗り、被害はもっと増えただろう。そうさせないためには徹底的に叩くしかなかった」
「……」
「感情的に見えただろうが、俺は常に白影の里の棟梁としての役割を優先させている。ただ、どちらの場合も俺は確かに怒っていた。それを消してしまえるほど感情を欠落してもいないし、それが人間だろう」
冷静とは言えなかったかもしれないが、恥ずべきことは何もない。そうした信念を持っている海雲に対し、自身の感情すら制御出来ていないアゼルはあまりにも脆かった。いつしかうな垂れてしまったアゼルを、海雲はじっと見つめる。
アゼルがこうまで落ち込んでいるのには二つの要因がある。その一つは、国民の無力さだ。海雲などは初めから国民を切り捨てて考えていたが、アゼルはどこかで期待をかけてしまっていたのだろう。自分が必死でやれば国民も着いて来てくれるだろう、と。そしてもう一つの要因は、赤月帝国民になりすましていた老人の存在である。アゼルはきっと、どんな人間とも話をすれば解り合えると思っていた。表面上は友好的な態度を装っていたと思われる流民の反応は、アゼルにそう信じさせるだけの力を持っていたはずだ。だが彼は、最悪の形でアゼルを裏切った。
人間が好きで、人間を信じてきたアゼルにとって、現実の無慈悲さを突き付けられることは衝撃だっただろう。それまで愛してきたが故に人間を信じられなくなり、行き場のなくなってしまった想いを海雲への不満という形で吐き出している。それが平和に慣れすぎていた者の甘えであることは、本人が一番よく解っているはずなのだ。
（……責めずに、いられないんだな）

国民を責められず、あの老人を責められず、アゼルは海雲を責めている。だが彼が本当に責めているのは自身なのだ。だからこそアゼルが苦しんでいることを承知している海雲は小さく息を吐いてから話を続けた。

「お前が人間を好きなのは俺も、サイゲートも知っている。だから何に苦しんでいるかは解るつもりだ」

だが、このまま沈んでいられては困る。やるべきことが、アゼルにはあるのだから。そう前置きしたうえで、海雲は王との取り決めをアゼルに伝えた。

血色の和平（1）

まだ降り積もった雪が融け出さない冬の時分、赤月帝国には今日も湿気を含んだ大粒の雪が舞っていた。つい先日、春を予感させるような風が吹き付けたのが嘘のように気候は冬に逆戻りしている。しかしこれが本来あるべき姿であり、凶兆とも吉兆とも言い切れない風は天の手違いだったのだろう。赤月帝国には一時の安息が戻っていたが戦況は新たな局面を迎えようとしていた。王が和解を決意し、そのための使者としてアゼルが敵国へ立つことが決定されたからである。

「むこうも、さんざん揉めてるみたいだ」

王に報告をした後に訪れたアゼルの私室で、海雲はそう告げてみた。交渉の席を整えるための先発隊を大聖堂（ルシード）に送ってから、すでに数日が経過している。伝達系統は確率されているので経過報告は次々ともたらされているのだが、今のところあまりいい反応は得られていなかった。先発隊として大聖堂の本拠地に赴いているのは弁が立つ者ばかりだが会談までこじつけるにはまだ時間がかかりそうである。

「もし、交渉が決裂した場合はどうする？」

様々な可能性を考慮しておかなければならない海雲は立場上、アゼルに悪い結果を予測しておくよう促した。攻撃を仕掛けてくるようなことはないが、大聖堂軍は未だ赤月帝国を包囲するように展開している。万が一の場合も、ないとは言い切れないのだ。

「その時の覚悟は、出来ている」

海雲に言われるまでもなかったようで、アゼルは表情を変えることなく答えた。この発言はアゼルの独断では有り得ない。彼の科白はそのまま王の意思であり、王族も肚を決めたようだった。壁に背を預けている海雲は腕を組み、思案に沈む。

（問題は交渉自体より、無事に戻って来られるかだな）

王が提案した交渉には賛成したものの、海雲は全面的に大聖堂を信用する気にはなれなかった。彼らは平然と味方を焼き殺せるような者達なのである。いくら戦時下とはいえ、大聖堂は許容し難い愚行を犯したのだ。そのように手段を選ばない者が相手では疑いすぎても十分ということはないだろう。しかし深い傷を胸に刻んだまま立ち直ろうとしている者に伝えるべきことではなかったので、海雲は決意だけを独白した。

「必ず守るよ」

自身の命と引き換えにしようと、アゼルを無事に帰国させることが海雲の使命である。白影の里の先代と交わした約束や王への誓い、そして友人としての責務は決して違えてはならないのだ。

「何か言ったか？」

同じく思案に沈んでいたアゼルが独白を聞きつけて顔を上げたので海雲は知らぬ振りを決め込んだ。

「自分が重症にもかかわらず、うろちょろしてる奴がいるから手をやいてると言ったんだ」

「……サイゲートか」

仕方がないといった風に、アゼルはため息をつく。海雲は壁に預けていた体重を足に戻し、扉を指しながら言葉を次いだ。

「無駄だとは思うが、一応覗いて見るか？」

「……そうだな」

アゼルも頷いて立ち上がったので、彼らは共にアゼルの私室を後にした。そしてそのまま、王城四階の廊下を歩き出す。

戦況が一時休戦となったことが宣言されると王城に避難していた国民は街へ戻って行った。それと同時に白影の里で保護していた国民も街へ帰したのである。怪我のなかった者や軽症の者はそうして元の生活に戻っていったのだが、重症の者は城内に残って療養を続けていた。サイゲートも重傷者の一人であり、彼には特別にアゼルの私室に程近い一室を貸し与えているのである。本来であればゆっくりと休養して早く怪我を治してもらいたいところだが、彼の部屋

を訪れてみる時、その姿はいつもない。
「……人の気配がするな」
サイゲートの部屋の前に佇んだ時点で内部に気配が感じられることは珍しいことだったので海雲は眉をひそめた。アゼルもまた、おもむろに顔を歪める。
「まさか、働きすぎて体調が悪化したなどということはないだろうな」
「まあ、大人しくしててくれるならその方がいいんじゃないか？」
「笑えないぞ」
海雲を軽く睨みつけ、アゼルが扉を叩いた。すると内部から女の声が返ってきたので海雲とアゼルは思わず顔を見合わせる。
「いいですって。自分で行きますから」
「ダメ。そこから動いたら痛くするわよ」
サイゲートと女の会話が聞こえてきた後、扉は開かれた。サイゲートに与えられた部屋の中から顔を覗かせたのは、海雲もアゼルもよく知っている人物である。
「あ、海雲。それにお兄様」
扉を開けて二人を迎えた菜の花が、ぱっと顔を輝かせる。すかさず、海雲は頭を下げた。
「菜の花、ここで何をしている？」
付け足しのように言われたアゼルは呆れた顔をして妹を見ている。菜の花は兄の視線を気にするでもなく踵を返しながら問いに答えた。
「サイゲートとお話してたんです。ちょうど良かったわ」
菜の花が室内へ戻って行ったので何が『ちょうど良かった』のか首を傾げながら、海雲とアゼルは彼女の後に従った。アゼルの私室と同じく一人で使うには広すぎる室内には、この部屋の仮の主が無理矢理といった感じで寝台に押し込められている。室内には嗅ぎなれた鉄くさい臭いが漂っていたので海雲は顔をしかめた。
「あれほど無理するなと言っただろ」
臭いの発生源であるサイゲートは海雲に叱られて弱ったように笑

んだ。彼の側に血液が付着した衣服が転がっているのを見てアゼルが黙り込んでしまう。次に口を開いたのは、雑然とした部屋を片付けている菜の花だった。
「信じられない無茶する人ね、この人」
「ご迷惑をおかけしてすみません、姫」
サイゲートに代わって海雲が頭を下げると、菜の花は一度不思議そうな表情をしてから笑った。
「どうして海雲が謝るの？　変なの」
「……言われてみれば、そうですね」
海雲が複雑な思いを抱きながら頷くと菜の花は華やかに笑った。室内に漂っているのはいつも通りの、和やかな空気である。しかしそこに、アゼルの軽口はなかった。
「……お兄様、」
空気を重くしているのが誰なのかは一目瞭然であり、菜の花は眉根を寄せながら顔を伏せている兄に呼びかけた。菜の花の声には多少咎めるような響きが混じっており、アゼルは顔を上げないまま応じる。
「何だ？」
「良い機会ですので言わせて戴きたいことがあります」
「……だから、何だ？」
「サイゲートから聞きました。二度と無茶な真似はなさらないで下さい」
かろうじて応答していたアゼルは、とうとう黙りこくってしまった。菜の花はじっと、うなだれている兄を見つめている。
「……解っている。すまなかった」
しばらくの沈黙の後に発されたアゼルの言葉は、弱々しいものだった。すかさず、菜の花が反発する。
「解っていません。お兄様を失うということが私にとってどういうことか。お父様にとって、どういうことなのか。なによりこの国にとってどういうことなのか、本当にお解りになりますか？」

菜の花が今、辛辣な言葉ばかりを選んでアゼルを諌めなければならない気持ちが海雲には理解できた。同じ心配をしているのだ。

（アゼルがまだ脆いこと、姫は知っていらっしゃる）

アゼルはこれから和解交渉のために敵地へ赴かなければならない。休戦中とはいえ敵の本拠地へ乗り込むことは非常に危険であり、一歩間違えれば死も有り得るだろう。脆い心のままでは付け込まれるだけなのだ。だが、そのために自分がいる。言葉にする代わりに目で、海雲は菜の花に想いを伝えた。

「私が言いたいのはそれだけです。もう一度、よく考えてみて下さい」

海雲の真意をしっかり受け止めた菜の花は、それだけを言うと荷物を抱えて出て行った。アゼルの手前あからさまに謝意を示すわけにはいかなかったので、海雲は菜の花が立ち去った扉に向かって密かに目礼を送る。

「……アゼル、姫は心配してるんだよ」

菜の花が去ってからしばらく沈黙が続いていたが、口火を切ったのはサイゲートだった。サイゲートにまで宥められたアゼルはふっと、苦笑まがいの笑みを浮かべる。

「解っている、つもりだ。菜の花の言うように俺は己の身のことなど何も考えていなかった。それなのに、己のことばかり考えていてサイゲートをこんな目に合わせた。　……妙な話だ」

アゼルの苦笑には自嘲は含まれていなかったので、海雲はそこで一旦話を打ち切った。口調を明るくし、海雲はサイゲートにからかいを含んだ笑みを向ける。

「サイゲート、姫と随分仲良しになったみたいだな」

「仲良しっていうか……アゼルの妹だなって思った」

真面目に応じたサイゲートはそのまま、ここ数日の出来事を話し出した。

菜の花とサイゲートは、お互い負傷者のために王城内を走り回っていた。菜の花の方はサイゲートが怪我人であることを知らず、使

いを頼んだりすることもあったようである。そんな中、調子に乗って動きすぎたサイゲートの傷口が開いてしまった。それを知った菜の花は烈火の勢いで怒り、無理矢理この部屋へ連れて来て手当てをしながらサイゲートをこっぴどく叱ったらしい。
「すまない、サイゲート。あいつはいつもああなんだ」
話を聞くだけで容易に想像がついたようで、アゼルが苦笑混じりに言う。サイゲートも笑みで応え、小さく首を振った。
「いや、いいんだ。それより、聞いてほしいことがある」
笑みを消したサイゲートはいつの間にか、真剣な表情になっている。サイゲートが何か重要なことを言い出そうとしていることは察したものの、その内容に見当のつかなかった海雲とアゼルは首を傾げながら話に耳を傾けたのだった。

血色の和平（2）

「支援、か」

海雲から話を聞いた王は、呟きを零しながら空を仰いだ。その反応から察するに、まったく考えていなかった内容でもないらしい。

（よく、そんなことを思いつく）

もはや苦笑する以外に術がなかったが謁見の間では不謹慎なので、海雲は胸中でそう呟いた。

サイゲートが切り出した話の内容は、未だ赤月帝国を包囲している大聖堂（ルシード）の兵達へ支援を施すというものだった。だがこれは、サイゲートが考えた案ではない。初めに言い出したのは菜の花であり、サイゲートはその考えに賛成したから伝えただけなのだと言っていた。

こちらから攻め込んだのならばまだしも、今回の戦争は理不尽な理由であちらから仕掛けてきたものである。この和解交渉自体こちらから譲歩したものなのに支援までするなど、海雲は考えてもみなかった。だが、これ以上の戦争を回避するための手段として支援は効果的である。言われてから気が付いたのだから己の頭の堅さに笑ってしまうと、海雲は自身を皮肉った。無論、菜の花には意図的な策略など何もないだろう。ただ極寒の中、食べる物もなく着る物にも乏しい流民を哀れだと思ったにすぎない。姫は、それでもいい。しかし王までそうでは困ると、海雲は考えに沈んでいる王を見据えた。

「上策だと思われます」

「大聖堂から民心を引き離す、それが出来ると思うか？」

打てば響くような王の対応に海雲は感心の念を抱いた。

（さすがに、王は考えておられる）

戦争を回避するには相手の兵力を殺いでしまえばいい。大聖堂の兵など土地を失った流民から構成されているのだから、尚更である。

彼等は大聖堂に帰依した訳ではなく、ただ安全に暮らせる場所を欲しているにすぎないのだ。今は、まだ。
「可能だと思われます。またこの機を逃せば、以後は無理でしょう」
「そうだな。人間（ヒト）とは馴染む生き物だ」
王の言葉は核心をついている。今ここで大聖堂から流民を引き離しておかなければ、彼等は次第に帰依するだろう。それは赤月帝国の今後の在り方に大きな闇を投げかけるのだ。
「双方に、あれだけの犠牲を払った後です。流民の受け入れは簡単には進まないでしょう。相互理解にどれ程の時がかかるかは、やってみなければ判りません」
「どちらにしても、これから和解をしようという相手を見殺しには出来ぬ。我が国は大聖堂兵へ食料や衣服を供給する。それで、良いな？」
「はい。すぐにでも里の者を向かわせましょう」
王に深々と一礼し、海雲は謁見の間を後にする。すぐさま王城を出て白影の里へと向かいながら、海雲は支援の持つ複雑な意味合いについて考えを巡らせていた。
一度は敵対した流民に支援をする、それは今、この状況を打破するためには最上の選択かもしれない。だが流民に支援を施すということは各地に溢れている同じ境遇の者達を招き寄せる結果になってしまうだろう。対外的な印象を考慮すると、赤月帝国は流民を受け入れる姿勢を見せなければならないのだ。
（……だが、森はすでに亡（な）い）
秘密を抱える赤月帝国を優しく抱くように護ってくれていたかげろうの森は、先の戦闘でだいぶ焼かれてしまった。これからこの国は流民が流れ込み、大いに栄えてしまうだろう。それはもう、避けられないことだった。
（しかし大聖堂の関与がなかったとしても、いずれは同じ道を辿ったはずだ）
それが早まったにすぎない。やりきれない虚脱感に襲われながら

も、海雲はそう考えることで自身を納得させようとしていた。
今回の一件で、大聖堂は流民という兵力を失う。だがその程度のことで大聖堂の上層部が赤月帝国を諦めるとは思えなかった。
「……そうか」
屋敷へ戻るなりもたらされた報告を聞き終えて、海雲は短く息を吐いた。大聖堂の本拠地でも、和解交渉への動きが濃厚であるらしい。

慎重に審議すると言って結論を先延ばしにしてきた大聖堂（ルシード）から、赤月帝国の王に向けた正式な回答がきた。その内容は交渉の場を持つことは望ましいことであり、こちらも相応の返礼を持って迎えるというものである。会談まで漕ぎつけたのだから形としては一歩前進したことになるが、間を置いての対応に海雲は不信感を募らせていた。新興国家のくせにやたらと仰々しい文言も白々しい。
「出立は三日後か」
アゼルが確かめるように言ったので海雲は彼の顔色を窺いながら頷いて見せた。大聖堂の対応は海雲にとっては満足のいくものではなかったが、アゼルにしてみればそうでもないらしい。早く出発したいと無言の内に言っているアゼルはおそらく、これ以上無駄な血を流したくないと思っているのだろう。
「父は、あの件については何も言わなかったな」
「……そうだな」
アゼルに応えながら、海雲は謁見の間で王と対面した時のことを

思い返していた。
深々と雪が降りしきっていた早朝、大聖堂から使者が来たとの報せを受けた海雲は急いで王城に赴いた。海雲が到着した時にはすでに会合が始まっており、この場では主に使者からの話を聞いた。その後に使者を排した内々の話し合いがあり、謁見の間にてアゼルが使者として赴くことが正式に宣下されたのである。宣下に立ち会ったのはアゼルと海雲だけだったが、王はアゼルの言う『あの件』については一言も触れなかった。
「何故だと思う、海雲？」
王が口外しなかった内容は大聖堂との戦が始まった要因であり、アゼルが疑問に思うのも当然のことであった。意見を求められた海雲は空を仰ぎ、王の真意を慮る。
今回の戦はもともと、赤月帝国がある情報を握っていたために起こったものである。実際に兵として戦っている流民達には半ば無関係ではあるものの、その情報は大聖堂の上層部にとっては脅威なのだ。和解へ向けた交渉をするというのであれば、大聖堂の上層部は必ずその話題に触れてくるだろう。王もそのことは重々承知しているはずである。にもかかわらず、あえて口に出さなかったということは……。
「譲位を、考えておられるのかもしれん」
海雲が熟考した末に出した憶測を伝えるとアゼルは複雑な表情をして目を伏せた。今のアゼルにとって王位は重荷なのだろう。しかし赤月帝国の次代を担うのは間違いなく彼であり、ゆくゆくはアゼルの考えが国を動かしていくのだ。海雲はここで初めて、常々考えていたことを口にしてみた。
「直接お言葉を賜るまでは何とも言えんが、お前はどう考えている？」
赤月帝国の握る『情報』を、どうするのか。もし譲位が行われるのであれば、アゼルの返答次第で白影の里はその役目を終えることになるかもしれない。アゼルがそこまで思いを及ばせていたかは分

からないが、彼は何の躊躇いもなく海雲の問いに答えた。
「大聖堂次第だ」
「……そうか」
話し合い、それほど意見の相違がなければ譲渡してもいい。アゼルはそう、言っていた。
これから敵地へ赴くアゼルには国内のことにまで気を回している余裕はないだろう。今は対外的なことだけを考えていればいいと思っている海雲は胸中を明かすことをしなかったが、密かに拳を握り締めた。

血色の和平（3）

日中でも喧騒から遠い王城は夜になると無音に近い世界となる。一般の者は立ち入ることが出来ない上階では尚更顕著であり、例え息を殺して潜んでいる者がいたとしても微かな呼気すら耳についてしまうような静けさだ。雑然とした狭い室内で夜を過ごすことを常としてきたサイゲートは王城で与えられた広すぎる部屋が落ち着かず、寝台の上で膝を抱えていた。

夜を迎える前、サイゲートの元を訪れた菜の花が支援の話が実行に移されたという情報をもたらした。菜の花は純粋に哀れな流民が救われることを喜んでいるようで嬉しそうな顔をしていたが、サイゲートの抱える想いは複雑である。海雲とアゼルに菜の花の提案を伝えたのは彼女が人間として正しいと思ったからなのだが、サイゲート自身は支援に反対だった。何故、あんな連中を助けてやらなければならないのか。理性ではなく感情が、そう囁き続けているのである。

城内で縮こまっていた人々とは違い、サイゲートは戦場に飛び込んだ。その結果多くの死を目の当たりにして、自身も命を落としそうになったのである。薬が切れると熱く疼く腹の傷よりも、サイゲートは心に痛手を受けていた。狂気に満ちた敵の瞳、他人を責める人々の瞳、虚ろな死体の瞳。一人になるとどうしても、狂乱の中で目にした異様さが蘇ってくるのだ。

眠ることを諦めたサイゲートは寝台を下りて窓辺に寄った。自室は小さな窓が一つあるだけの簡素な造りだが、この部屋には大きく取られた窓が幾つも並んでいる。広すぎて暖の行き届かない室内はそれだけでも寒いのだが、雪の降っている窓辺はよりいっそうだった。

不意に凍てつくような空気が流れ込んできたのでサイゲートは顔を傾けた。突然外気に晒された体が震えたが、それよりも異常な事

態にサイゲートは身構える。四階にある部屋にも関わらず、窓の外から侵入者が現れたのだ。しかしサイゲートのいる部屋に侵入して来た者は静かに窓を閉めたきり動こうとしない。ある可能性が頭に浮かんだので、サイゲートは警戒を解いて侵入者に声を投げた。

「……海雲？」

返事はなく、窓辺に佇んでいた影は室内に向かって歩き出した。その人物はどっかりと椅子に体を預けたので、その動作でサイゲートは確信する。返事くらいしろと呆れながら、サイゲートは燭台に火を灯した。

燭台の淡い明りに映し出された侵入者は、やはり海雲であった。常に背筋を伸ばしている彼らしくなく、海雲は気怠そうに座り込んでいる。そのような無気力な海雲を見るのは初めてのことであり、サイゲートは眉根を寄せた。

「何か、あったのか？」

「いつかの話の続きを聞かせてやろうと思ってな」

「話の続き？」

脈絡のない海雲の一言を受け、サイゲートは記憶の糸を辿った。しかし慌しい日々が続いていたため、何も思い出せない。サイゲートが考えこんでいると海雲は姿勢を正して口調も改めた。

「その前に、一つ報告がある」

「何？」

「交渉の日取りが決まった。使者は、予定通りアゼルが立つ。出立は三日後だ」

「そうか。海雲も？」

「ああ。一人で行かせる訳には、いかない」

「……そうだな」

サイゲートは一時休戦に至るまでの詳しい経緯を知らないが、彼が考えていることも海雲と同じであった。大聖堂（ルシード）は、信用ならない。そんな人間の集う場所へ、アゼルを一人で行かせるわけにはいかないだろう。

「……オレも」
「駄目だ。連れて行けない」
サイゲートが言いかけた科白を遮って、海雲はきっぱりと拒絶した。しかし海雲がサイゲートの申し出を受け入れなかったことには理由があるらしく、彼はすぐに言葉を次ぐ。
「連れて行くわけにはいかないが、お前の体が完治していないことを理由にするつもりはない。それを、話しに来た」
「……わかった」
海雲が何かしらの覚悟を持ってやって来たことを察したサイゲートは食い下がることをしなかった。サイゲートが閉口したので海雲は衣服から何かを取り出す。テーブルの上に置かれたそれは、中身の入った小瓶だった。
「これは？」
意図が分からぬまま、サイゲートは小瓶を指して海雲を見る。海雲は即効性の毒だと答えた。
「……毒？」
「怖いか？」
「……いや、」
明確な回答を避け、サイゲートは口をつぐんだ。テーブルの上にある小瓶に視線を落としてみても、怖いというよりは現実味がない。海雲が受け取れと言うので、サイゲートはとりあえず寝台の脇にある台の上に小瓶を移動させた。自分の元へ戻って来るサイゲートを見据えたまま、海雲は話を続ける。
「この国が建国された理由、以前少し話したが覚えているか？」
「戦火を避けた人たちが自然に集まって、それが国になったってやつか？」
「そうだ。もともと、先人達の暮らしがあった場所に定住したことも話したな」
「ああ」
「この地は、俺達の祖先が移り住んで来た時にはすでに天然の要塞

だった。こちらから攻め込むことをしなければ誰も攻めて来ない、平和な場所だったんだ」
遠い目をして窓辺を振り返り、海雲は降りしきる雪を見つめながら説明を始めた。
人間が集団が生きていくためには多少なりとも規則というものが必要である。赤月帝国はそうした些細な規則を積み重ねて自然発祥的に発生した王国であったが、ここまで外界を遮絶するようになったのにはある理由があった。先人達の遺した記憶……それを見付けてしまった時から赤月帝国は特殊な国への道を歩み始めたのだ。
「キオク？」
「そうだ。遺物、と言った方が解り易いか？」
遺物とは、今に残る昔のものである。それは過去に誰かが使っていた装飾品のような物から住居跡まで、大小様々なものを指す。首を傾げているサイゲートにそう前置きしたうえで、海雲は石碑の存在について語った。
問題となっている石碑は現在も王城の片隅にひっそりと存在している。だが赤月帝国に暮らす者の大半がそのような石碑の存在など知らず、興味も抱いていない。それは長い歳月をかけて、一部の者が人々の記憶から石碑の存在を消し去ってきた結果だった。
「その石碑に刻まれているのは古代の文字だ。どれほど昔に彫られたものなのか、今でも見当はついていない。天然の要塞に護られて戦火から遠ざかった俺達の祖先はやがて、その文字の研究を始めたんだ」
「へえ。じゃあ、今は読めるようになったのか？」
「ああ。そこには、こう書いてあった」
海雲は一度言葉を切り、静かに息を継いでから石碑の内容を口にした。
『全知全能（ゼウス）の神により生み出されし無知なる者達よ、我等は愚者。

この世の果てを垣間見た者。予言しよう、やがて世界は終焉を迎える。だが再び新たな生命を育むだろう。しかし標の先には永久に変わることのない宿命（さだめ）が、既に用意されている。汝等が縛られし糸を断ち切りたいと望むのならば、我等を求めよ。我等七人今一度集う時、人間（ヒト）の歴史は次なる世界への標となるだろう』

これが、石碑に刻まれていた内容である。海雲の口から聞かされた言葉は現在のものには違いなかったが、サイゲートは故人の言葉を耳にしている時だけ過去に身を置いているような不思議な気持ちになった。

意味を理解しようというよりも、石碑に刻まれている言葉は耳に残る。その言葉を口にした者も、石碑という形で残そうとした者も、海雲も、ひどく真剣なのだ。実際に海雲から発せられている空気には放電に晒されているようなピリピリとした感じがあり、サイゲートは眉根を寄せながら未だに続いている話に耳を傾けていた。

「本格的な調査をした結果、他にも幾つか遺物が見付かった。石碑の他にも愚者と名乗った者達に関する記述があったんだ。そして実際、古代の人々が残した通りの現象が今も起きている」

「……どんな？」

「紅く染まった空を艇が泳ぐ。信じられない光景だ」

「海雲は見たことがあるのか？」

「子供の頃に、一度ある」

その光景を目の当たりにした時は肌が粟立ったと、海雲は淡々と語った。実際に見たことのないサイゲートの想像力では限界があるが、それでも愚者という者達が人間以上であるのだということは理解することが出来る。けれど、とサイゲートは顔をしかめた。

「神って、ようするにすごい力を持ってる奴のことなんだろ？　そんな奴がいるなら、どうして戦争なんてあるんだよ」

人間を超越した者がいるのであれば、全てを力でねじ伏せること

も出来るはずである。流民達のように縋る人間の望みを叶えてやることも、大聖堂のように支配することも容易いはずだ。しかし現実には、争いを止めるような者は存在していない。もし人間以上の者が実在しているのならば、彼らは人間の争いを傍観しているということだろう。そんな不確かで残酷な存在は信じたくもないと、サイゲートは思った。

「彼等が仮に実在するのだとしても、神と呼ばれる存在なのかどうかは分からない。だが大聖堂のような連中にとって脅威だということは確かだ」

神を餌に人間の心を操っているのは人間である。偶像だからこそ神という存在には利用価値があるのだ。本物がいては困るのだと、海雲は言った。

「じゃあ、大聖堂が戦争をしかけてきた本当の理由って……」

「赤月帝国の持つ情報を奪うことと、神の抹殺が目的だ」

「そんなことで」

真実を理解して初めて、サイゲートは絶句した。一部の人間が利益を得るために、どれだけ無関係な命が奪われたのか。そのことを思えば冷静ではいられず、サイゲートは肩を震わせて憤慨した。無言で激昂しているサイゲートに対し、海雲は平静さを保ったまま言葉を紡ぐ。

「むきになるなよ。少し、落ち着け」

「落ち着いてられるかよ。お前、そんな連中と話が出来るって、本当に思ってるのか？」

「……最初から、思っていない」

「だったら意味ないじゃないか！」

「なら他にどうしろって言うんだよ！！」

お互いに張り上げてしまった声は、静かな夜に大きく響き渡った。怒声が消えてからの静寂が異様なほど痛く、サイゲートも海雲も口を噤んだままでいる。しばらく経っても室外に動きがないことを確認してから、サイゲートは小声で口火を切った。

「……ごめん」
冷静になってみると海雲に悪いことをしたという思いがこみ上げてきた。和解交渉は海雲が独断で決めたことではなく、またサイゲートが怒りを感じているのも大聖堂にである。憤りを海雲にぶつけること自体、間違っているのだ。
「……俺は、そう思っている。だがアゼルや王は、それでも信じたがっているのだと思う」
どこか諦めを思わせる海雲の口調にサイゲートは何も言えなくなった。普段のアゼルを知っている者ならば、海雲の言っていることは解りすぎるくらいに明白だったからだ。サイゲートの返事を待たず、海雲は淡々と言葉を続ける。
「交渉次第では全てを明け渡しても構わない、アゼルはそう考えている。そうなれば赤月帝国という国は、消滅する」
「……海雲？」
今まで一度たりとも聞いたことのない悲壮な声を聞いて初めて、サイゲートは海雲の様子がおかしいことに気がついた。燭台の炎に照らされている海雲の顔は、陰影のせいなのかもしれないが泣きそうに見える。
「赤月帝国という国がなくなれば白影の里はその存在理由を失う。だがお前は違う。王を、アゼルを、この地の暮らす者達を、護ってやってくれ」
海雲の弱々しい微笑みを見た刹那、サイゲートは頭に血が上るような感覚を覚えた。怒りなのか憤りなのか、自分でも分からない感情が体を動かす。サイゲートは衝動のままに、海雲の腕を取って無理矢理引き寄せた。
「なに、言ってんだよ」
「サイゲート……」
「オレを連れてかないとか言ってるくせに、なんだよそれ。いつもエラそうに説教するくせに、自分はそれでいいのかよ」
「……すまない」

「ずるいぞ！　あやまるなんて、みとめるってことじゃないか！　許さないからな。オレは絶対そんなの許さない」
締め上げるように拘束している海雲から反応が途切れてしまったが、サイゲートは構わずに言葉を続けた。
「理由なんて、なくなったってまた探せばいいだろ。弱気になるなよ。らしくないことばっかり言うなよ」
「……サイゲート、」
「お前がどうしても考えを改めないって言うんなら、オレにだって考えがあるからな！」
「サイゲート、解った。解ったから、放してくれ」
それまで大人しかった海雲があがき出したのでサイゲートは言われた通りにした。彼の口調はいつもの調子に戻りかけているようだったが、それでもまだ腕は捕まえたままで尋ねる。
「本当にわかったんだな？」
海雲は頷くこともなく真顔のままでいたが、不意に顔を背けて吹き出した。抑えた笑い声が、静かな室内に響き渡る。サイゲートはムッとして唇を尖らせた。
「なに笑ってんだよ」
「いや、悪い。つい、な」
まだ完全には笑いを堪えきれずに、海雲の顔は引きつっている。真面目に言い聞かせようとしていたサイゲートはムスッとしたまま押し黙った。しかし海雲は、悪びれることもなく言葉を紡ぐ。
「そうだよな。お前にこんな話すれば、そりゃ説教するよな」
「……」
「少し考えれば解りそうなものなのに、どうして思い付かなかったのか」
「……」
「怒るなよ。ふざけてる訳じゃない」
「……まだ声が笑ってる」
「嬉しいんだよ。説教なんて、しばらくされたことなかったから」

海雲が笑みを見せる時は茶化すような小馬鹿にするような、そういった別の感情を含ませていることが多い。だが今の彼が見せている笑顔には照れ隠しのようなものが一切含まれていなかった。こんな笑みを見るのは初めてだなと思いながら、それでも簡単に許す気のなかったサイゲートはぶっきらぼうに応じる。

「オレの言ったこと、本当にわかったのか？」

「ああ。　……ありがとう」

もう取り繕うこともなく、海雲は素直に頷いて見せる。心の底からの想いを感じ取ったサイゲートはそこでようやく捕まえていた海雲の腕を解放した。

血色の和平（4）

赤月帝国を抱く腕であるかげろうの森は降り積もった雪によって白く染まっていた。それは白影の里がある彼岸の森も同じであり、一面の銀世界へと姿を変えている。新雪を踏み固めながら彼岸の森を歩いていた海雲は樹木のない開けた場所で歩みを止めた。雪はすでに止んでいて、空に浮かんでいた厚い雲も取り払われている。月光によってキラキラと輝いている雪面に目を落とし、海雲はしばらくそのまま立ち尽くしていた。

（……困ったな、何を言っていいのか分からない）

語りかける言葉を探していたものの、結局見付からなかったので海雲は苦笑を浮かべた。この場所を訪れる時は大抵心中が穏やかではないので、探すまでもなく言葉が溢れてきたものだ。しかし今は、本当に何もない。

海雲は今まで、様々な想いを全ての墓に葬ってきた。何かあった時、一番に訪れるのはこの場所だったのだ。それが今回は、真っ先にサイゲートの元へ行ってしまった。そのおかげで説教をされてしまったのだが、海雲の心はいつになく満たされていた。

（説教されるなんて、本当に久々だったな）

普段は説教をする側である海雲にとって、それは貴重な体験だった。サイゲートと別れて里へ戻って来てからも、まだ胸の中に新鮮さが息衝いている。案外説教されることを求めていたのかもしれないと思った海雲は苦笑いを零したが、背後で雪を踏む音がしたので真顔に戻った。

「迷いが、ありました。今もまだ、迷っているのかもしれません」

目前に広がる白い墓に目を留めたまま、海雲は独白を声に出した。応えるのは、背後から歩み寄って来ている人物。それが誰であるのか、海雲は振り返る前に知っていた。

「迷わせているのは、私だな」

しばらくの後、海雲の隣に並んだ王が先程の独白に対する言葉を返す。海雲は体の向きを変え、王に向かって深々と頭を下げた。
「このような雪の降る夜にいらっしゃらずとも、呼んでいただければこちらから参りましたのに」
「……頭を、上げてくれ」
王に促された海雲は頭を上げ、そのまま瞠目した。雪の上に膝をついた王は海雲と目を合わせ、その後、雪面に額をこすりつける。
「王！！　何をなさるのです！？」
海雲は慌てて王の傍へ寄ったが、彼は土下座をしたままでいた。低頭したまま呻くように、王は苦しい声を絞り出す。
「すまない」
いたたまれない気持ちが先立って胸苦しくなり、王の傍にしゃがみこんだ海雲も雪に額をこすりつけた。
「どうか、お立ち上がり下さい。この様なお姿を誰かに見られては困ります」
「では、共に立ち上がってくれ」
王が固辞することもなく頭を上げたので海雲はホッとした。しかし共に立ち上がることは出来ず、王が立ち上がったことを確認してから海雲も姿勢を正す。お互い低頭したために額が濡れており、冷たい雫が滴った。
「里へ参りましょう。このようなお姿でお帰しする訳にはまいりません」
「いや。もともと、余人を交えず話をするつもりでここへ来た」
「ですが、お体にもしものことがあれば……」
「そのように、」
遮るように言葉を重ねた王の口調は、いつになく強いものだった。これほど強く意思を示されたのは初めてのことであり、海雲は思わず閉口する。海雲が口を噤んだのを見て王は言葉の続きを口にした。
「そのように、いつも苦労をかけてきた」
「王……」

「私の決断がお前に更なる苦悩を強いていることは、知っている」
「……」
「そうしていつも、いつも、お前は己を殺しながら私に尽くしてくれた」
「……そのような……」
「当然だと、お前は言うのだろう。白影の里の棟梁として。だが、それは違う。白影の里の棟梁としての判断ならば国を滅ぼしかねない私の決断に従うべきではない。私を、殺してでも阻止するべきだ。違うか？」
　王の意見は正論であり、だからこそ海雲には答えることが出来なかった。白影の里の先代であれば、王が言うような決断を下したかもしれない。海雲もまた選択肢の一つとして考えたことはあるのだが、彼にはその決断を下せない理由があった。王はそのことすら知っていて本心を曝け出しているのかもしれないと、海雲は話に耳を傾けながら唇を噛む。
「我ら王族の考えがお前の行動を縛っている。そのために、死なずに済んだ者も命を落とした。国の頂点に据えられた者として国のことを第一に考えなければならないことは承知しているのだ。だが私は、そのために非情にはなれなかった。私は王としては失格者だ。だが人間としてそれでいいと、私の心が言う。これ以上、私は王であることが出来ない」
「では、やはり……」
「息子に……アゼルが戻ってきたら譲位をと思っている。だがアゼルもまた、王には向いていない」
「……」
「代が替わっても同じ苦悩を続けさせることに、私はおかしくなりそうだ。どれだけ、お前に苦労をかけさせればすむのか」
　王の姿は直視するに耐えず、海雲は目を伏せた。堅く握られた王の拳が、寒さにではなく震えている。
「滅んでしまえばいいと、思ったこともある。だが重ねてきた歳月

がそれをするには遅すぎたと伝えている。彼等の存在が、言葉が、世界を揺るがす力になってしまうと、今回のことでよく解った。誰かが管理し、護っていかなければならない。しかしそれを大聖堂（ルシード）に委ねることだけは、出来ない」

利己的な大聖堂に全てを委ねれば世界は誤った方向へ進んでいく。その流れを止めるために赤月帝国は戦わなければならないのだ。開戦前に交渉の場が設けられなかったように、この戦は話し合いで解決出来る類のものではない。そのことを王はよく解っているが、自身が人間でいたいがために和解交渉をしたいなどと言い出したのだった。だが同じように、交渉に応じてきた大聖堂にも初めから和解の意思はないだろう。話し合う以前から思惑が食い違っている会談がうまく運ぶはずはなく、無意味な交渉によってどんな結論がもたらされるかは混迷である。

「実に身勝手だ。大聖堂の考えと何も変わらない。今になってこんなことを言い出すことは私を更なる卑怯者にする。それでも、聞いてもらえるか？」

王に微笑みを向けられた時、海雲は自戒してきたものが崩れ去っていくのを感じた。王の表情には二人三脚で国を動かしていく者に対する絶大な信頼と、海雲が若くして背負わなければならなかった業に対する悲哀や、海雲に投影する自身の苦しみなどがないまぜになっている。自身でも明言しているように王の発言は非常に利己的だが、海雲には彼の瞳に濁悪を見出すことは出来なかった。

（卑怯者でも、その優しさに触れて俺は人間であれた）

それは海雲だけの想いではなく、おそらくは白影の里の先代……海雲の父親も同じだったはずである。王であることには失格でも目の前の初老の男が好きだと、心が叫んでいた。

「……聞かせて下さい」

視界を揺るがす感情の波を隠すように俯き、海雲は弱々しく返答を口にした。

血色の和平（5）

冬になると雪の日が多い赤月帝国において、厚い雲間から太陽が顔を覗かせるような日は稀である。だがその日は雪雲が何処かへ姿を消し、赤月帝国に住む者は久方ぶりに太陽の機嫌を伺うことが出来た。雲が取り除かれた分だけ寒さが厳しくはあったが、旅路には好条件の日に赤月帝国から大聖堂（ルシード）に向かう使者は出立したのである。

海雲とアゼルが出立したのを機に、サイゲートは王城を出て家に戻ることにした。いつまで経っても慣れなかった異様に広い部屋で少ない荷物をまとめた後、サイゲートは窓辺を振り返る。

「何か言いたいことがあるんじゃないんですか？」

サイゲートが話しかけた相手はアゼルの妹である菜の花姫だ。理由は分からないが彼女は朝から押しかけてきて、特に喋るでもなくそこにいた。

「ねえ」

窓の外に視線を固定したまま、菜の花が口火を切る。サイゲートが返事をすると彼女は窓から視線を転じて言葉を次いだ。

「どうして見送りに来なかったの？」

真っ直ぐに見据えてくる菜の花の瞳には不可解さと少しの非難が窺えた。何を言い出されるかと身構えていたサイゲートは思わず拍子抜けする。

和解交渉の使者であるアゼルと海雲は、今朝早くに赤月帝国を発った。このことはまだ国民に公表されていないので、見送りの人員は王や大臣などの要人だけである。サイゲートはそのような場に立ち会おうという気すらなかったのだが、菜の花の目にはそれが不可解に映ったようだった。

「べつに、最後の別れって訳じゃないですから」

「意外に冷たいのね」

菜の花の発言は友人の見送りにも出向かないサイゲートを責めて

いるかのようにも受け取れるが、実はそういうわけでもない。彼女はただ、本当に切り出したい話題が別にあるのにわざとはぐらかしているだけである。その理由も何となく解っていたが、そのことよりもサイゲートが驚いたのは知り合って間もないにもかかわらず菜の花が案外心を開いてくれているということだった。

「アゼルのことですか？　それとも、海雲のことですか？」

本当は菜の花自身から引き出そうと思っていた彼女の真意を、対応に困ったサイゲートは思わず口にしてしまった。サイゲートの問いかけには脈絡がなかったので菜の花は眉根を寄せる。

「何が？」

「文句があるのは」

サイゲートが言うと、菜の花は吹き出した。もっとマシな言い方はなかったのかと自身の発言に呆れているサイゲートには構わず、菜の花は明るい声で笑い続けている。ひとしきり笑った後、菜の花は目尻に浮かんだ涙を指で拭いながら顔を傾けてきた。

「イヤな奴ね、サイゲートって」

「……でも、そうなんでしょう？」

「もう！　うるさいわよ」

唐突に寝台へ向かった菜の花は枕を掴み、それをそのままサイゲートに投げつけてきた。だが菜の花には腕力がないため、枕はサイゲートの足下に落下する。床に落ちた枕を拾い上げたサイゲートは、それを元の位置に戻してから菜の花を見た。

（やっぱり、前にアゼルが言ってたことかな）

サイゲートの脳裏には酒が入って饒舌になったアゼルの姿と、彼が零していた内容が蘇っていた。菜の花が切り出したい話題は十中八九そのことだろう。そう思うと直接的には言い辛く、サイゲートは黙り込む。些細な心情の変化を見逃さなかった菜の花は真顔に戻ってサイゲートに詰め寄った。

「どうして突然黙るの？」

「あ、いや、その……」

「もしかして……知ってるの？」
図星を突かれ、サイゲートは呻き声を上げる。女の勘は鋭いと親方達がよく言っていたが、本当だった。そんなことを思い返しながら逃げ場を求めて目を泳がせるサイゲートに、菜の花はさらに迫る。
「やっぱり、知ってるのね？」
「た、たぶん……知ってます」
音を上げたサイゲートが白状すると、菜の花は顔を真っ赤にした。あまりにも露骨な反応を示されてしまったため、サイゲートもあ然とする。
「……お兄様ね」
しばらく間があった後、頬を両手で抱えた菜の花が恨めしげな声を発した。菜の花に可愛く睨まれたサイゲートは瞬間的にまずいことを言ったと思い知る。アゼルが戻って来たら、菜の花は勝手に暴露した兄を怒るだろう。そうなれば誰が口を滑らせたのかは一目瞭然であり、今度はサイゲートがアゼルに怒られれしまう。
「海雲は知らないわよね？　まさか海雲には言ってないわよね？」
菜の花が必死な表情で問い詰めてきたので、サイゲートはその話を聞いてしまった時のことを思い返した。三人で酒盛りをしたあの夜、アゼルはサイゲートにというよりは海雲に向かって言い含めていた。サイゲートはたまたま居合わせただけの、単なる傍観者だったのだ。
「えっと……」
どう答えれば丸く収まるか考えながら口を開いたサイゲートの態度は、それだけで肯定の意を示していた。菜の花は悲鳴のような声を上げ、顔を覆って首を振る。
「なんてことしてくれたの！　もう海雲に合わせる顔がないじゃない」
「ひ、姫！？」
恥ずかしさのあまり泣き出してしまったかと思い、サイゲートは慌てふためいた。だが菜の花は、泣いてはいなかった。

「それで、海雲は何て言ってたの？」
「……は？」
「だから、海雲はどんな反応してたのって聞いてるの！」
「何も、言ってなかったような気がしますけど……」
空を仰いで記憶を辿りながら、サイゲートは問いに答えた。その話をしたすぐ後にアゼルが酔い潰れてしまったので、結局海雲の返答は聞けなかったのだ。サイゲートがその時の状況を説明すると菜の花は無残に肩を落とす。それまで華やかだった空気が一変してしまい、サイゲートは言ってはいけないことを言ったのだと気が付いた。
「あ、あの……姫？」
俯いてしまったので見えない菜の花の顔色を窺い、サイゲートは恐る恐る話しかけた。今度こそ、泣いてしまっただろうか。サイゲートはそう心配していたのだが、菜の花は思いもよらぬことを口走った。
「海雲って、いい男よね」
「は？」
「そう思わない？」
「いや、思いますけど……」
「他にいないわよね、あんな人」
一国の姫君とは思えない科白を聞かされ、サイゲートは苦笑した。見た目の可憐さからは掛け離れた発言ではあるものの、彼女が零した本音からは想いの深さが窺える。海雲のことがすごく好きなんだなと、サイゲートは実感してしまった。
「ねえ、海雲は心に決めた女性（ひと）がいるのかしら？」
そんなことを尋ねてくる菜の花の瞳には期待と不安が同居していた。迂闊なことは言えないなと思い、サイゲートは考えを巡らせる。しかし海雲とはそんな話をしたことすらなく、またサイゲート自身もそういった話題には疎いので、結局のところ何も分からなかった。
「よく分からないですけど、恋人がいるって話は聞いたことないで

す」
「だったら、まだ諦めるのは早いわよね？」
「……そうですね」
何と答えたらいいものか困りつつ、サイゲートはそれだけを口にした。おもむろに喜色を表したわけではなかったが、サイゲートの言葉を聞いて菜の花は少し元気になったようである。
「いつか、振り向いてくれるといいな」
サイゲートから視線を外した菜の花は独白を零しながら窓辺に顔を傾けた。今こうして話をしている間にも、彼女は海雲のことを考えているのだろう。その姿は恋する女性そのものであり、サイゲートは密かに菜の花の一途な想いが叶えばいいなと願った。

大聖堂（ルシード）との和解交渉に臨むために赤月帝国を旅立った一行は丸一日かけて雪の森を抜け、赤月帝国の領土外へ出た。赤月帝国を包囲するように広がっているかげろうの森を南に臨む位置に出現した一行は、そのまま北西に進路をとって大聖堂の本拠地を目指すこととなる。海雲にとっては赤月帝国の領土外へ出ることも珍しいことではなかったが、初めて外界に接したアゼルにとっては見るもの全てが新鮮なようだった。しかしこの旅路は視察が目的ではないので、アゼルが浮かれすぎることもない。和やかな場面はあまりなく、使者は淡々と目的地へ向かって進んでいた。
「アゼル」
小休止の途中、海雲は一人で姿を消したアゼルを探し出して呼びかけた。遠方まで果てしなく続いている雪原を見つめていたアゼルは何の感慨も表さず海雲を振り返る。使者の一員として同行してい

る者達が追って来ていないことを確認してから海雲はアゼルの隣に並んだ。
「何を見ている？」
「世界は広いな。そのことを、改めて感じていた」
「……そうか」
アゼルの横顔から視線を移した海雲も彼が眺めている雪原を眼に映した。雲が切れている空は高く、遮る物のない大地は広い。現在は雪に覆われているが春になれば、この平原は草花で埋め尽くされるだろう。それは、赤月帝国内では見ることの叶わない光景だった。
世界の雄大さを目の当たりにしてしまったアゼルは何を感じ、何を思っているだろう。彼が進んで口を開こうとはしなかったので本意は分からないが、海雲はある種の疎外感を覚えていた。隣に佇んでいながらもアゼルとは埋めようのない距離があり、彼が見据えている世界には自分が存在しないのだ。そう感じた時、海雲は全ての墓の前で王が言っていたことの意味が解ったような気がしていた。
君主と臣下という関係が崩れてしまった夜、王は海雲に王位を譲りたいと告げた。そうすることで国の指針と現実が釣り合い、海雲が板挟みに苦しむ現状が解消されるというのである。確かに、赤月帝国の要人の誰よりも海雲は世界を知っている。王族のように理想を持ち合わせていない海雲が国政を取り仕切れば、赤月帝国が世界と歩調を合わせることも可能かもしれない。しかし海雲は自身が影であることを承知しているので考えるまでもなく王の申し出を断った。闇は陽だまりのように人々を包み込むことは出来ず、むしろ平素は隠されている狂気を溶け込ませてしまいかねない。闇に近付きすぎた者が王になったところで国は安泰ではないのだ。
海雲が自身を理解していたように、王もまた海雲の気性を理解していた。臣下に王位を譲渡するなどと思い切った発言をしておきながら、王は食い下がることもなく海雲の拒絶を受け入れたのである。その時は自身のことで手一杯だったので思いを及ばせることが出来なかったのだが、王の譲位発言の裏には王位継承者のこともあった

のではないだろうか。世界を知ったアゼルを目の当たりにして初めて、海雲はそう感じていた。
墓前での密談は、誰も知らない。海雲が断り、王もそれを受け入れた以上、誰に知らせる必要もない。だが宿命から逃れられないのは海雲もアゼルも同じであり、海雲は王との会話で得た情報をアゼルに伝えておこうと思い、口火を切った。
「出立の前に少し、王と話をした」
遠い目をして雪原を眺めていたアゼルは不意に現実に引き戻されたような顔つきで海雲を振り向いた。
「そうか。父は、何と言っていた？」
「王は……やはり、お前に譲位をと考えておられた。この使者が終わったら、お前は王位に就くことになるだろう」
「……そうか」
「この交渉を提案した王自身、このまま何事もなく済むとは思っていない。そして大聖堂に彼らの情報を渡すつもりはないと、王は俺に仰られた。この意味が、解るな？」
問いには答えず、アゼルはおもむろに顔をしかめた。彼はすぐさま無表情に戻ったが動揺は隠しきれておらず、頷こうとしない。海雲はじっと、様々な想いが胸中で渦巻いているであろうアゼルの顔を見つめた。
初めから譲るつもりのない和解交渉自体には意味がない。だが赤月帝国から使者が出向くことには意味があるのだ。アゼルに王位を譲渡することと大聖堂から民心を引き離すこと、この二つを成すには時間がかかる。今回の使者は様々なことを精算するための時間を作る繋ぎのようなもので、こうしている間にも着々と準備が進められているのだ。また王子自身が敵国へ出向くことは流民達を説得する際、有利に働くだろう。誠意を見せる覚悟があるという既成事実を作っておけば、和解交渉自体はどう転んでも構わないのである。
「……ああ」
しばらく間があった後、アゼルは俯きながら返答を口にした。頷

いてはいるものの口調からは苦さが拭えておらず、彼が王の考えに納得していないことが窺える。海雲はその態度に不安を覚えたが、アゼルが話を切り上げて踵を返したので何も言うことが出来なかった。

血色の和平（6）

一時は戦渦に呑まれたものの、赤月帝国には再び平穏な日々が戻って来た。太陽が昇れば仕事に行き、仲間にどやされながら働き、日が暮れれば酒場へと繰り出すというサイゲートの日常にも変化はない。夜毎に繰り返される母と娘の口論も健在であり、呆れと逞しさを同時に覚えたものだ。だが、もはやこの平穏は一時のものでしかない。そのことを知っているサイゲートは舞い戻ってきた日常に身を置いていながらも、以前とは違った何かを感じながら日々を過ごしていた。心持ちが変わったのは海雲に渡された小瓶のせいかもしれない。

「サイゲート」

自室で液体の入った小瓶を眺めていたサイゲートは扉の外から聞こえてきた呼び声に顔を上げた。家人の目に触れないよう小瓶を寝台に隠してから、サイゲートは扉を開ける。するとそこには親方が佇んでいた。

「今日は少し早いですね。もう行くんですか？」

「いや、今日の仕事は中止だ」

仕事に出かけるものだとばかり思っていたサイゲートは親方の発言に首をひねった。サイゲートが疑問を感じていることを見て、親方は言葉を次ぐ。

「さっき報せが回ってきた。王から話があるとかで、城の広場へ来いとさ」

特に表情を変えることもなく告げると親方はさっさと踵を返した。まだ眠たそうにしている夫人と娘も姿を現したので、サイゲートは奇妙な感覚に囚われながら親方の後を追う。

（……なんだろ）

この家の母と娘は朝に弱く、サイゲート達が仕事に出かける時は大抵眠ったままである。そのため親方もサイゲートも自分で朝食を

用意するのだ。そんな人物も起き出してきているところを見ると、召集されているのは国民全てのようである。果たして、朝方の街にはいつになく人出があった。だが召集されている理由が不鮮明なので城へと向かう人々の顔には不安が浮かんでいる。自然と口数も少なくなっており、サイゲートは人出にそぐわない静けさの中を歩いていた。

赤月帝国の王城は街のほぼ中央に位置している。絶壁の聳え立つ城の西部には人が住んでいないが、それ以外の三方には民家などの建造物が連なって街並みを形成しているのだ。西部を除く三方から集まってきている人々は一様に、堀を渡る唯一の手段である橋を目指している。そのため外堀からして混雑しており、城へ辿り着くまでにはかなりの時間がかかりそうだった。

少し進んでは立ち止まり、また少し進んでは立ち止まって待つという行動を繰り返していたサイゲートはふと、続々と橋を渡る人々の姿に目を留めて顔をしかめた。一時は戦場となった橋に多くの人間が集まっている光景は嫌な記憶を呼び覚ます。今この場所に集っている人々が何も知らずに渡っている橋の下には敵味方を問わず多くの死者が沈んでいるのだ。

複雑な思いを抱きながら橋から視線を外したサイゲートは次に、巡回している兵に目を留めた。戦時中のように防具を身につけている彼らは混乱が起きないよう人々を誘導しているのだが、その中に知った顔がある。勤務中に声をかけては悪いと思ったサイゲートは意思表示をしなかったのだが、彼らの方がサイゲートに気がついて走り寄って来た。

「サイゲート様」

一国民にすぎないサイゲートを『様』づけで呼ぶのはアゼルの私兵達である。彼らは主が不在なので、王城内の様々な仕事を振り分けられていた。背中に人々の好奇の視線を感じながらサイゲートは戦友達に苦笑を向ける。

「もう大丈夫なのか？」

「はい。命懸けで王子をお救いいただいたこと、聞きました。ありがとうございます」
一人が深々と頭を下げたので後の者もそれに従った。公衆の面前で低頭されたのでサイゲートは慌てて声を上げる。
「やめてくれよ」
彼らは王子に忠誠を誓っているが、そんな仰々しい関係の以前にアゼル個人が好きなのだ。だから彼らは危険を顧みず、アゼルに従った。忠誠というものがないだけで、サイゲートも彼らとほぼ同じなのである。
「もう行くよ。後がつかえてるからさ」
先へ進むこともなく傍観している者達がいたので、サイゲートは話を切り上げてそそくさと立ち去った。人出がすごいので親方達とはぐれてしまったものの、サイゲートはあまり気にすることもなく行列に参加する。長い時間をかけて堀を渡った後は人の流れに従って王城内へと向かった。サイゲートが城内一階の広間（ホール）に入ってから、どれだけの時間が経過しただろう。やがて中二階に王が姿を現すと、人々は一様にそちらを見上げた。開戦を告げた演説の時とは違い、今は王一人が舞台に立っている。彼の傍にはアゼルの姿も、海雲の姿もない。そのことが妙に物悲しく、サイゲートの胸を重くさせた。
「多くの民を危険に晒し、また多くの民の命が奪われた。それは私の責任だ」
突然、王は国民に向かって頭を下げた。しかし静まりかえっている広間にはどよめきも、囁きも起こらない。絶句ともまた違う白々しい空気が、その場を支配していた。常人であれば顔を上げることすら躊躇うような沈黙の中、姿勢を正した王は淡々と言葉を次ぐ。
「この度、我が国は和解交渉のための使者を大聖堂（ルシード）へ送った。だが交渉とは相手のあるもの。相手の出方次第ではどうなるか分からない。再び我が国を戦火が襲うことも、あるだろう」
再び戦渦に巻き込まれるかもしれないと知ると、今度は人々の顔にも表情が生まれた。また、家を失うのか。また、大切な人を奪わ

れるのか。また、自身の命を失うかもしれない恐怖に駆られるのか。囁く声はなかったものの、広間にはそういった不安が渦巻いていた。

（ちがう、本当に怖いのは何もしないことだ）

周囲の人々の顔を見て、サイゲートは強く思った。平穏な生活を奪われることはもちろん恐ろしいが、それ以上に無力を痛感することは恐怖である。気力が萎えてしまえば絶望を覚え、苦しみだけが残るからだ。サイゲートはそうした考えを抱いているものの、どうすれば人々に理解してもらえるのかまでは分からなかった。

「長く我が国を戦火から護ってくれた森は、もう亡(な)い。一度敵を退けても、もはや我が国は争いに巻き込まれることを避けられないだろう。赤月帝国にも間もなく本当の戦乱が訪れる。そのことを、知っていてもらいたい」

重苦しい言葉で王の演説は終わった。王が姿を消すと広間に集まっていた人々も退場を開始する。あちこちで上がっている不安の声に耳を傾けながら、サイゲートは自分に何が出来るのか考え始めていた。

大聖堂(ルシード)の本拠地は赤月帝国の北東にある神山の中に存在している。神山の八合目付近にはいつの時代の物とも知れぬ遺跡があり、新興国家である大聖堂はその住居跡を本拠地としているのだ。配下からそうした報告は受けているものの海雲自身は大聖堂の本拠地を目の当たりにしたことがなく、雪深い山の中では目指す建造物もまだ見えていなかった。

「アゼル、少し休もう」

雪を被った山を登るのは想像する以上に厳しい。アゼルは愚痴を

零すこともなく黙々と歩を進めていたが、彼の体調が気がかりだったので海雲は小休止を告げたのだった。やはり慣れない山道を登るのは辛いようで、アゼルは無言で賛成を示す。足を止めた海雲は頂と思われる方角を仰ぎ、同行している里の者に声をかけた。
「まだ遠いな。あとどれくらいだ？」
「そうですね……あと五日というところでしょうか」
「そんなにか」
雪山に進入してからすでに二度ほど夜を迎えており、海雲はうんざりしながら嘆息した。里の若い者は傾斜があるので下りは楽だと笑っている。軽口に付き合う気分でもなかったので海雲は辟易しながら顔の横で手を振り、黙るよう指示を出した。
「使者はもう着いたのだろうか」
道案内は不要だったので、赤月帝国に出向いてきた大聖堂の使者には一足先に帰ってもらった。同じ道を辿っているのかは定かではないが、一行は今まで使者の痕跡に出会ったことはない。アゼルが不意に零した一言を受けて海雲はあることを思い出した。
「何か、移動手段があるんだったな」
海雲が振り返ると里の者はすぐさま頷いて見せた。アゼルが興味を示したので、海雲は簡単に説明を加える。
白影の里は戦が始まる以前から大聖堂について調べていた。その報告の中には往来する人間が山中で忽然と姿を消すといった不可解なものがあったのである。さらに詳しく調べていくうちに、人間が突然姿を消すのは何か乗り物のようなものを使用しているのだということが解った。しかしその全貌は、未だに不明である。
『乗り物』のことも含め、大聖堂には不可解な点が多い。誰も見たことがないような高度な技術を保有しているのであれば兵器の開発などもしているのだろうが、今回の戦においても目新しい武器などは何もなかった。むしろ大聖堂の兵が使用していたのは刃こぼれしているようなお粗末な武器ばかりであり、彼らには防寒具すらまともなものがないのだ。もっとも大聖堂の上層部が兵としている流

民を捨て駒としているのであれば、筋の通る話ではある。そこまで考えたところで思考を中断し、海雲は話を元に戻した。
「おそらく、使者はそれで帰ったんだろうな。もっとも同行すると言っていたらそんなものは使わないんだろうが」
海雲の口調が皮肉混じりだったため、アゼルは反応を示さなかった。同行者達も閉口していたので静かな雪山に沈黙が流れる。海雲は不用意な発言をしたかもしれないと思ったが、後悔はしていなかった。
「……行こう。雪が止んでいるうちに距離を稼いでおきたい」
やがてアゼルがぽつりと呟いた。その意見には同感だったので海雲も無言で歩き出す。山の天気は変わりやすく、使者の行く手には暗雲が広がり始めていた。

血色の和平（7）

「あら、サイゲート」
偶然出くわした人物に呼び止められて、サイゲートは立ち止まった。彼らがいる場所は赤月帝国の王城である。中庭に面した回廊を歩いている時に、サイゲートは菜の花と出会ったのだった。
「ああ、姫……あ、いえ、菜の花姫さま」
普段の調子で返したら隣を歩いていた人物に睨まれたので、サイゲートは慌てて言い直した。その様子を見ていた菜の花はすぐ、サイゲートの隣で背筋を伸ばしている兵に向かう。
「いいのよ。楽にして」
菜の花がそう言うと兵は渋々といった調子で頷いた。先程から苦手な『礼儀』について説かれていたのでサイゲートはホッと胸を撫で下ろす。それから改めて、サイゲートは菜の花を見た。
「こんな所で何してるんですか？」
赤月帝国には今日も大粒の雪が舞っていて、開放的な回廊は寒い。菜の花が眺めていた中庭も降り積もった雪があるだけであり、サイゲートは彼女が何をしていたのか疑問に思ったのだった。肩から羽織るようにしている外套を胸元で押さえている菜の花は寒そうにしながらも意地の悪い笑みを浮かべる。
「私がこんな所にいたらいけない？」
菜の花の意を受けた兵が鋭い視線を傾けてきたのでサイゲートは苦笑する。揚げ足をとらないでほしいと思ったが、そんなことを口にすれば再び説法を聞かされることになりそうだったので、その言葉は胸にしまっておいた。サイゲートの複雑な表情を見た菜の花は困ったように微笑みながら真意を明かす。
「部屋にいても落ち着かなくて」
「ああ……」
なるほどと、サイゲートは胸中で呟いた。使者の元気な姿を見る

まで、彼女の不安は続くのだろう。
「それで、どうしたの？」
菜の花が口調を一変させたのでサイゲートも態度を改めてから問いに応じた。
「いや……なんか、王様がお呼びだとかで」
「父上が？」
「何ですかね？」
「さあ……兄上のことかしら。父上に呼ばれているのなら、あまり長いこと呼び止めておくわけにはいかないわね」
「はあ……」
「一つだけ聞かせて。体はもういいの？」
「ええ、すっかり。もう仕事もしてます」
「仕事？　サイゲートは何をしているの？」
「木こりです」
「樵？　あなたみたいに細身の人が？」
「いや、ウデとかはけっこう筋肉ついてますよ」
「あ、ほんと。意外だわ」
サイゲートが力こぶをつくって見せると外套の上から手を触れてきた菜の花が驚いた面持ちで言う。その直後、すっかり和んでしまった空気を壊すようにわざとらしい咳払いが聞こえてきた。サイゲートと、何故か菜の花まで慌てて、お互いに佇まいを正す。
「ごめんなさい。父上がお待ちなのでしたね」
「そ、そうですね」
菜の花と笑い交わした後、サイゲートは咳払いの主を振り返った。サイゲートを家まで迎えに来た強面の兵は何も言わずに歩き出す。兵が菜の花に黙礼したのでサイゲートも倣おうとしたのだが、その前に菜の花の方がサイゲートに顔を寄せてきた。
「またいつでも遊びに来て。海雲もお兄様もいなくて退屈なの」
先を行く兵の耳に入らないよう、菜の花は小声で囁く。いたずらっこのような菜の花に了承を伝えてから、サイゲートは兵の後を追

った。
（はあ、またキンチョーしてきた）
菜の花と出会ったことで多少は和らいだものの、やはり緊張が拭えずにサイゲートは嘆息した。一時的ではあるものの城内に住んでいたこともあるしアゼルの部屋に忍び込んだこともあるが、王に拝謁するとなると話は別らしい。自分の心臓が意外に脆いことを思い知らされながら、サイゲートは兵に続いて城内に入った。
王城に身を寄せていた時は城内を駆け回っていたサイゲートにとって内部の構造は見慣れたものである。だが城内を把握しているだけに先導している兵がどこへ向かっているのかが分かってしまい、さらに緊張が高まっていく。そしてそれは王城内の二階にある謁見の間に着いた時、頂点に達した。
「謁見の間にございます」
わざわざ説明を加えてくれた兵に促され、サイゲートは自らの手で二枚扉を押し開ける。すると扉の直線上に玉座があり、そこにはすでに座している者の姿があった。兵に小突かれて我に返ったサイゲートは慌てて室内に進入し、玉座の下で跪く。王に労いの言葉をもらった兵はすぐさま退いてしまったので、謁見の間には王とサイゲートだけが残された。
「頭を上げてくれ」
低頭したままでいたサイゲートは王の言葉に促されて恐る恐る顔を上げる。国民に向けた演説でしか王を見たことがなかったサイゲートは自然と毅然とした姿を思い浮かべていたのだが、玉座に座っているのは一人の初老の男だった。
「君がサイゲートか。アゼルや海雲から話は聞いている」
改めて口火を切った王には話し方や表情に柔らかさがあり、演説の時のような威厳は感じられない。近くで見ると王の顔立ちや喋り方はアゼルや菜の花と似通っており、そのことがサイゲートから緊張を奪っていった。
「わざわざすまなかったね」

「あ、いえ」
「楽にしていい。君と話がしたくて呼んだのだから」
王の口調は演説の時とは別人のように気安く、サイゲートは戸惑いを覚えながら頷いた。これでは王と対面しているというよりも、友人の父親と話をしているようなものである。これでいいのかとサイゲートは思ったが、同時に親しみやすさが嬉しくもあった。
（……親子、だな）
王にアゼルを重ねたサイゲートはふっと口元をほころばせた。サイゲートから硬さが消えたのを感じたのか、王が言葉を次ぐ。
「まずは礼を言わせてくれ。色々と世話になった」
「あ、いや、オレ……えっと、わたしは……」
「他に誰もいないのだ、普段の通りで構わない」
「あ、はい」
しどろもどろになりながら、サイゲートは礼儀を正すのを諦めた。王もあまり礼儀作法にはこだわらない人物らしく、和やかに話を進める。
「体の方は、もう良いのか？」
「はい。もう仕事もしてます」
「君は樵だそうだね。堀の工事の時も世話になった」
「いえ、あれはアゼルが……」
応えかけた言葉を、サイゲートは不意に途切れさせた。黙っただけで考えていることが伝わったのか、王は憂いを滲ませる。
「憂えているね。私もそうだ。アゼルも、海雲も」
堀の工事をした時は人望を集めていたアゼルが指揮を執り、尚且つ国民が力を合わせたから短期間で完成させるという目標を達成することが出来た。多くの人間が共有する目的に向かって一致団結すれば、きっとどんな困難も乗り越えることが出来る。今あの時の力が出せれば……そう考えているのは、サイゲートも王も同じであった。
「公表するのは使者が帰って来てからだが、私はアゼルに王位を譲

ろうと思っている」
「……えっ？」
王が唐突に話題を変えたので思案に沈んでいたサイゲートは驚いて目を上げた。玉座に座っている王は哀しい笑みを浮かべており、深い嘆きに出会ったサイゲートは言葉に詰まる。サイゲートから視線を外した王は目を閉じるようにしながら空を仰いだ。
「赤月帝国は変わろうとしている。古い体制では対処出来なくなる日も、そう遠くはないだろう。もう私では駄目なんだよ」
そんなことはないと、サイゲートには言うことが出来なかった。王はすでに意を決している者の表情をしており、そこには他者が口を挟む間隙などない。サイゲートに顔を戻した王は淡々と話を続けた。
「国が新しくなれば国民もそれに対応していくしかない。戦乱の殺伐とした空気が持ち込まれるのは望ましいことではないが、仕方のないことだ」
「……どうして、そんな話をオレに？」
「君はこの国をどう思う？　正直に答えて欲しい」
問い返されてしまったサイゲートは一度閉口し、考えを巡らせた。しかし言葉を飾り立てても、それは王が望んでいる答えには成り得ないだろう。そう感じたので、サイゲートは等身大の思いを口外してみることにした。
「家だと、思っています。大切な人もいます。守りたいと、強く思います。だから何もしない人を見ると腹が立ちます。責任を他人に押し付けるのは最低です」
「そういう人間を造ったのは私だ。この国の在り方が、そういう人間を造った」
「オレには国のことはよく分かりません。でも王がそう言うのなら、そうなのかもしれない」
「正直だな」
サイゲートの発言は一国の王に対するものではなかったが王は軽

快に笑って見せる。しかし王の笑みには自嘲が含まれており、それは次第に顕著になっていった。
「私自身がそういう人間なのだ。成すべきことを他人に押し付けて、のうのうと生きている」
「それは、ちがうと思います。　……自分が大切なのは当たり前です。けど、そのせいで自分の大切なものを失うことは、ちがう気がするんです。うまく言えませんけど、それを街の人達にもわかってもらえたら……」
「アゼルは、良い友を持った」
「……ありがとうございます」
　他に返答が思いつかなかったので、サイゲートはとりあえず礼を言ってみた。謙遜するでもなく潔い反応をしたのがおかしかったようで、王は笑っている。
「君には行動力がある。これからの赤月帝国にはそういう人間が必要なのだ。海雲と共に、アゼルを助けてやってくれ」
　言葉にする代わりに片膝をついて跪き、胸に手を当てたサイゲートは頭を垂れた。それが礼儀だからというのではなく、自然とそうしたいと思ったのである。例え王ではなくなったとしても目前にいる誠実な人の力になりたいと、サイゲートは密かに誓いを立てたのだった。

血色の和平（8）

途中で幾度も吹雪に見舞われ、予定よりもかなりの日数がかかってしまったが、赤月帝国を発した使者はようやく大聖堂（ルシード）の本拠地に辿り着いた。神山の八合目付近に存在している大聖堂の本拠は聞き及んだ通り、遺物を使用している。遺跡の全体像は切り出した石を用いて造られた神殿風の建造物であり、それは宗教を笠に着ている大聖堂らしい本拠であった。

到着してからさらに数日が過ぎ去ると、海雲は雪ばかりの景色を眺めることに飽きを感じ始めていた。神山の高みは耳が痛くなるほど無音に近い世界であり、広大な神殿の内部では人が動く気配すらあまり感じられない。特に監視をつけられてもいないようだったので、海雲は暇を持て余した挙句に独白を零した。

「待たせるな」

「大聖堂は複数の人間が指揮を執っているのだろう？　ならば、また何か問題が起きたのかもしれない」

海雲の独白に応えたのは、アゼルである。彼らは神殿内の一室に身を置いていて、室内には他の同行者達の姿はない。それにはある事情があり、アゼルの発言を受けた海雲は腕を組んで考えを巡らせた。

大聖堂は赤月帝国からの使者が到着するなり、見解の相違があったので交渉は少し待ってくれと言ってきた。そしてその後、使者の数が多すぎるので減らせと注文をつけてきたのである。赤月帝国の一行はその条件を呑んだのでアゼルと海雲だけが神殿に残り、他の者は神殿に併設されている宿舎と思しき建物へ移動したのだ。だがそれは上辺だけの話であり、海雲は密かに里の者を神殿内に潜ませている。あれこれと言い訳めいたことを言い出しては会談を先延ばしにしている大聖堂の態度は警戒してくれと言っているようなものだったからだ。

（おそらく、調べたな）
使者として敵地に赴いた赤月帝国の王子が、本物なのかどうか。それはこちらの誠意を量ろうとしているのか、それとも良からぬ企てのためなのかは分からない。だが注意しておくに越したことはないと思った海雲はアゼルを見据えて口火を切った。
「真っ当な話し合いが行われるとは考えるなよ。何が起こっても動じないよう、覚悟はしておけ」
海雲の言葉を聞いたアゼルはおもむろに顔をしかめた。その表情には策略を巡らせることに対する嫌悪感が浮き彫りになっているが、それは大聖堂とて同じである。牽制しておくつもりで、海雲は言葉を続けた。
「騙されるなよ、アゼル」
「騙しているのは、どちらだろうな」
まるで海雲に反発するかのように、アゼルは嘲笑(わら)った。その反応は予想外のものであり、海雲は目を見開く。
「アゼル、お前……」
運の悪いことに扉を叩く音が声に重なり、海雲は呆気にとられたまま閉口した。海雲から視線を逸らしたアゼルは、そのまま扉の外にいる者の対応へと向かう。海雲はアゼルの背中を見つめながら不安が確信に変わってしまったことを実感していた。王の考えを、アゼルは間違いなく否定しようとしている。国の営みに伴う闇を知らない彼は駆け引きを卑怯だと思っているのかもしれなかった。
（ただ誠実なだけでは駄目なんだ）
善人ほど長生きの出来ない世において、アゼルの考え方は危険である。いつか頃合を見計らって言い含めなければならないと思った海雲は苦い気持ちになりながら戻って来たアゼルを見つめた。
「決まったのか？」
「ここから先、話し合いには俺が一人で行く」
「……は？」
アゼルの発言に耳を疑った海雲は思わず間延びした声を上げてい

た。だがアゼルは表情を動かすことなく、海雲の返答を待っている。次第に怒りがこみ上げてきたのでアゼルの横を素通りし、海雲は大股で扉へと向かった。
「すまないが、出て行ってくれ」
大聖堂の手の者を問答無用で押し出し、海雲は荒々しく扉を閉ざした。扉の前からは動くことなく、海雲はその場で背後を振り返る。アゼルも真顔のままこちらを見ていたので、海雲は憤りを必死で押し込めながら口火を切った。
「自分が何を言っているのか、解ってるか？」
敵の本拠地に赴くこと自体、どれほど危険なことなのかアゼルは承知しているはずである。にもかかわらず、たった一人で話し合いに臨む？　殺してくれと言っているようなものだ。
「解っている。だが彼らは、俺一人ならば話し合いに応じると言っているのだ。仕方がないだろう」
「アゼル！」
アゼルが平然と命を投げ出す意思を見せたので海雲は声を荒げた。それでも、アゼルは表情を変えることなく静かに佇んでいる。海雲は一つ息をつき、冷静さを取り戻そうと努めながら声の調子を落とした。
「姫が、おっしゃっていただろう。本当に解っているのか、と」
菜の花の辛辣な言葉は、兄を想ってのものである。アゼルにもそのことはしっかりと伝わっていたし、まして忘れたわけではあるまい。だが彼は己の立場を顧みず、妹や父の親愛をも振り切り、無謀なことをしようとしているのだ。絶対に思い止まらせなければならないと思った海雲は間を置かずに言葉を続ける。
「白影の里の……赤月帝国を護る者達の長として、行かせる訳にはいかない。こちらが一人でなければ話し合いに応じないと言うのであれば、俺が行く」
「海雲……聞いてくれ」
「駄目だ。王は、お前に王位を譲るとおっしゃられた。この意味を、

もっとよく考えろ」
「……海雲、俺は人間を信じたい」
その一言にはアゼルの切実な想いが込められており、海雲は返す言葉に詰まった。海雲が怯んだことを見逃さず、アゼルは矢継ぎ早に言葉を紡ぐ。
「もう一度、信じてみたい。そうしなければ王になどなれない」
「……駄目なものは駄目だ」
「王位継承者以前に俺は一人の人間だ。人間は人間を信じなければ生きていけない」
「信じられる相手と、それに値しない相手というものがいる」
「俺はそうは思わない」
「アゼル、こんなことを言いたくはないが、お前は世間を知らなさすぎる」
「……実際、俺は世間知らずなのだろう。だが俺は、それでも信じたい」
「アゼル……何度も言わせるな」
「他人を責め、傷つけ合い、欺き合うことしか出来ない人間などいない」
「……」
「お前の言っていることは、おそらく正しいのだろう。だがお前は話もせずに相手の真価を見極められる人間なのか？」
アゼルの問いかけに対する答えを持ち合わせていなかった海雲は閉口して目を伏せた。彼が切実であればあるほど悲しく、その問い自体に意味がない。他人の真価など、誰もが決して掴むことの出来ないものだからだ。
（何故……アゼルは王族になど生まれてしまったんだ）
いまさら嘆いてもどうにもならないことだが、分不相応な境涯を呪いたくなった海雲は唇を噛んだ。人間を愛し、無差別に信じることが出来るのは素晴らしいが、今この場においては、その考えは必要ないのだ。悲しいほど一途な考え方しか出来ない友人を、けれど

海雲は見送る訳にはいかなかった。
「……駄目だ。なんと言われようと、お前を行かせる訳にはいかない」
「解って、もらえないのだな」
悲しそうに呟いたアゼルは諦めを滲ませながら空を仰ぐ。アゼルの表情を盗み見た海雲は心が鎖で縛られていくような苦しさを覚えた。アゼルを見送ることは見殺しにするも同じである。しかしこの機を逃せば、彼は一生立ち直れなくなるかもしれない。
（本当に、これでいいのか？）
諦めがつかないのはアゼルだけでなく、海雲も同じであった。己の内で繰り返されている問いに答えを見出そうと考えこむ海雲の耳に、王の言葉が蘇る。
『可能性を否定しすぎてはいないか？』
王の言葉は真意のようでいて、真意ではない。だが混沌としている思考の片隅で、海雲は否と呟いた。滞在している敵国の人員を減らし、相手は何をする？
（決まってる、人質として捕らえるためか殺し易くするためだ）
しかし、こちらが素直に応じたならば本当に話し合いに応じようとしているのであれば？
（まったく誠意を見せない相手だ、それはない）
それでも、こちらから誠意を見せれば相手が変わらないという保証もない。
（アゼルが信じたがっているのも、そこか）
ここに至って海雲はようやく納得のいく答えを得たが、危険ばかりで利益がないに等しい賭けであることには変わりがない。そのような賭けにアゼルが身を投じることは、あってはならないのだ。しかし……。
『私は王としては失格者だ。だが人間としてそれでいいと、私の心が言う』
墓前で明かされた、海雲以外の者には決して口外されることのな

い王の本心。そしてそれは王だけの想いではなく、アゼルもまた同じであることを海雲は知っていた。
（……王……）
瞼の裏に焼きついている初老の男の残像に、縋るように呼びかける。だが現実にはこの場にいない彼には海雲の求めに応じることは出来ない。知らずのうちに空を仰いでいた海雲は目を開け、彼の性根をしっかりと受け継いでいる息子を見つめて嘆息した。
「……わかった。行けよ」
「海雲、」
「俺はもう何も言わない。だが王のお言葉だけは、忘れるな」
力強く頷き返したアゼルは気力を取り戻した顔つきになり、海雲が開けた道を通って去って行く。この決断がどんな悲劇をもたらしてしまうのか、確かに予感してしまった海雲は脱力して俯いた。

血色の和平（9）

赤月帝国の国民に敵襲が告げられたのは夜半の出来事だった。だが前回の急襲とは違って敵の動きは捕捉されているので、起き出しに移動を強制された人々も大きな混乱を起こすこともなく避難している。朝が来る頃には街中から人の姿が消え、赤月帝国の城下街は無人の静けさに包まれた。もっとも空は今日も厚い雪雲に覆われているため、夜と朝の境目は非常に曖昧なものではあったのだが。

避難先の王城で国民に知らされたのは、大聖堂（ルシード）軍がかげろうの森に侵攻してきているということだった。人々はどのような感情も面に表すことなく説明を聞いていたが、サイゲートは眉根を寄せる。食事をすることすらままならず、防寒着すらまともなものなかった大聖堂の兵に赤月帝国は支援を施した。なによりも和解交渉の使者が大聖堂に出向いているのに、何故その最中に敵襲を受けなければならないのか。

（何があったんだろう）

この襲撃には、何か理由があるはずである。そうでなければおかしいとサイゲートは思ったが、彼にはそれを知る術がなかった。無力なサイゲートの脳裏にふと、玉座に座していた初老の男の姿がよぎる。

（王は……どうするつもりなんだろ）

攻められているのであれば、こちらも何らかの対応をしなければならない。まだ敵陣に赴いている使者すら帰って来ていないのに、また戦争を始めるつもりだろうか。白影の里の棟梁である海雲すらも不在であるというのに。そこまで考えたところで、サイゲートは別の不安を覚えた。

戦が始まってから、海雲には別人のようにやつれてしまった時期があった。それは白影の里の棟梁である彼が全軍を指揮するからに他ならず、今まではその統率力があったからこそ敵を退けることが

出来たのだ。だが今回は、赤月帝国の軍隊である白影の里も頭を失っている。そのような状態で迫り来る敵をどうにかすることが出来るのだろうか。

（弱気になるな！）

頭を振り、サイゲートは自身を一喝して弱気を振り払った。アゼルも海雲もいない今だからこそ、自分がやらなければならない。何か出来ることがあるのなら、ほんの少しでも。それが護ると誓った者の責務だ。

家族と共に王城一階にある広間にいたサイゲートは人目を忍んでそっと動き出した。広間を抜け出したサイゲートが向かったのは、王がいると思われる城の上階である。だが城内の警備も甘くはなく、謁見の間がある二階へ上がることも出来ずにサイゲートは武装した兵に制された。しばらく問答したものの、埒が明かない。ついには二人がかりで両脇を抱えられ、連行されるように広間へと戻ることになってしまった。

（……考えてみれば当然、か）

兵に自由を奪われながら歩かされているサイゲートは苦く口元を歪めた。生まれついた身分だけを見れば相手は王様であり、サイゲートはその王様の支配する国の一国民でしかないのだ。だが王は、サイゲートに必要な人間だという言葉をくれた。その一言は今も、サイゲートの胸で確かに息衝いている。

「サイゲート様」

普段ならば決して耳にすることのない呼ばれ方をしたので、サイゲートはその声を上げた人物に気付くのが遅れた。サイゲートを束縛している兵達の方が先に反応を示し、彼らが歩みを止めたのでサイゲートも自然と立ち止まる。運のいいことにアゼルの私兵が現れたので、サイゲートの連行状態は解除されることとなった。つい先刻まで自分を戒めていた兵達が巡回に戻っていくのを見送ってから、サイゲートはアゼルの私兵である若者を振り向く。

「助かった。ありがと」

「何故、あのようなことになっていたのですか？」
「王に会いに行こうとしたらあの人たちに止められて、無理に階段を上ろうとしたらつかまった」
「……相変わらず、無茶をなさいますね」
同年代と思われる少年が苦笑したので、サイゲートも苦笑いを浮かべる。だが無茶も、時には必要なのだ。
「それより、ちょうど良かった。聞きたいことがあるんだ」
「王がこの事態にどう対処なさるのか、ですか？」
関心があることは同じなようで、少年は打てば響くような返答を寄越した。少ない言葉で話が通じることに爽快感を覚えながらサイゲートは頷く。
「もう決まったのか？」
「いえ、正式な発表はまだ何も。ですが、おそらく王は……」
少年はそこで言葉を切ったが、彼が何を言いたいのかはサイゲートにも解っていた。おそらく王は、戦わないだろう。交渉のために王子を敵陣に送っているうえ攻められた理由も不鮮明なのだ。王はそのような中で人間の命を奪う決断を下せる人ではない。
「ここに立てこもるのかな」
「状況次第ではどうなるか解りませんが、おそらく。アゼル様や海雲様が戻られるまで、手出ししないでしょう」
「……アゼルが帰ってきたら、悲しむな」
「……そうですね」
少年もサイゲートに同調したため、彼らの間にはしんみりとした空気が漂った。再びこのような事態に陥らないために、アゼルは敵国へ出向いているのである。だが彼の意思とは無関係なところで事態は展開しており、またしても衝突は起こってしまった。アゼルの嘆きを思えば痛みを感じずにはいられなかったが、戦火の只中に立たされているサイゲート達には傷心に浸っている暇はない。まずは二人が戻って来るまで、この城を死守しなければならないからだ。
「手伝わせてくれ。オレも何かしたいんだ」

サイゲートの申し出に少年は喜んでと応じた。兵の詰所となっている場所へ案内すると言って少年が歩き出したので、サイゲートも後を追う。蕭然とした空気を拭った少年達は国を護る者としての顔つきになり、王城の廊下を闊歩した。

血色の和平（１０）

月のない夜の闇がいつの間にか全てを呑み込み、窓から差し込む夕陽によって長く伸びていた影が姿を消していた。室外を人間が行き交うような足音も聞こえず、冷えきった一人きりの室内には押し殺した呼気と自身の身動ぎだけが物音を生み出している。物の輪郭も体も自身の存在意義すらも溶け込ませてしまった闇の一点を見据えたまま、海雲は己の行動の意味を考え続けていた。

――本当に、これで良かったのか？

囁く声が、聞こえ続けている。否と答える自身の声も、やまない。取り返しのつかないことをしてしまったのだと、思ってみる。だが、これで良かったのだと自分の声が打ち消した。

（……もう、済んだことだ）

相反する思考の収拾に疲れ果てた海雲は息を吐き、室内に置かれている椅子に腰を下ろした。目を閉ざすと室内よりもさらに昏い闇が間近に迫ってくる。だが身を委ねてしまおうとしても、囁く声は次から次にあふれ出してきた。思考を閉ざすことすら出来なくなってしまったのかと、海雲は自嘲を零す。しかしすぐ、彼は真顔に戻った。

「……誰だ？」

違和感のようなものを覚え、海雲はそんな言葉を口にしてみた。だが問いかけに対する反応はどこからも返ってこない。目を開いてみても闇があるばかりで、室内には誰の姿もなかった。それでも、何かいるような気がする。

（羽音……？）

静寂に耳を澄ますと、微かな異音が聞こえてきた。目に映るような異物はないものの、どこかで翅を羽ばたかせているような音がし

ている。虫か何かが立てる覚えのある音だが、雪を被った山中で彼らが活動しているとは思えなかった。しかし誰かに見られているような不快感は継続しており、海雲は眉根を寄せながら言葉を次ぐ。
「気配の絶ち方でどれほどの使い手かは解る。俺を殺せとでも命じられたか」
暗殺者が闇に潜んでいるのかと思い、試しに挑発してみた。だがやはり何の反応もなく、室内には静かな闇があるだけである。
（殺意も感じられない。何が目的だ）
相手に明確な目的があるのならば、気配は察しやすい。だが今相手にしている者には意思が感じられず、そもそも本当にそんな相手がいるのかどうかも分からなかった。こんな経験は初めてのことであり、海雲は朦朧とした思いを拭えないまま席を立つ。刹那、室内に白い光が溢れた。
突然の発光は自然現象では有り得ないほど不自然なものだった。不意を突かれたため目を焼かれてしまった海雲はとっさにしゃがみこみ、腰に差していた短刀を抜く。だが何者かに襲われるようなこともなく、白光は次第に収まっていった。しかし目を閉ざしたまま気配を探っていた海雲は室内が闇を取り戻したことを感じても動かないままでいる。周囲に気を配ったまま瞬きを繰り返し、ようやく目が慣れてきたところで海雲は改めて辺りを窺った。
白光が現れる前と変わらず、室内は夜の闇に包まれていた。だが目前に、それまでなかったものが出現している。片膝を床についたまま顔を上げた海雲は、その正体を見極めて息を呑んだ。
（女？）
海雲の目前には白い服を着た女が佇んでいた。闇に溶け込まない金の髪は艶やかな流れとなっており、白い服が独自の発光体のように光って見えるせいで面立ちを窺うことすら出来る。澄んだ湖底のような碧眼で海雲を見据えている女は、形のいい唇ゆっくりとを開いた。
「あなたは、死が恐ろしいのですね」

囁くような小声で紡がれた言葉は、歌うように滑らかだった。まるで神聖な言葉を聞かされているようで海雲は凍りつく。
（死が……恐ろしい？）
女の言葉を胸中で繰り返しながら海雲は考えを巡らせた。自らの死は、恐ろしくない。必要ならばいつでも捧げる覚悟は出来ている。恐ろしいのは他人の死だ。それも、大切な人なら……。
「大聖堂（ルシード）はすでに時代の潮流に乗っています。これから多くの命を犠牲にするでしょう。あなたも、あなたの友も、その流れに逆らうことは出来ないと思います」
碧眼に途方もない哀しみを滲ませ、女が言う。彼女の苦しみが計り知れないほど深いものであることを感じ取った海雲は微かに眉根を寄せた。しかし問いかける言葉はなく、それが自然なことのように女も淡々と言葉を次ぐ。
「せめて、涙を。あなたと、友のために。これで最後にします」
瞼を下ろした女の目から、透明な涙が零れ落ちた。そして彼女は背を向けて、扉へと歩き去って行く。静かに扉が閉まって女が姿を消してからも、海雲はしばらく動くことが出来ずにいた。
「……聖女？」
うわ言のような自分の言葉で海雲は我に返った。夢から醒めたように体を浮遊感が包んでいる。あれが、大聖堂の聖女だったのだろうか。海雲にはまるで彼女が人間ではないもののように感じられた。
（死へ向かう流れ……）
女が残した言葉の意味を考えていた海雲はハッとして顔を上げた。今、死は海雲の方を向いていない。魅入られているのはアゼルの方なのだ。
「……アゼル！」
抜き身のまま手にしていた短刀を腰に差し、海雲は慌てて部屋を飛び出した。アゼルが何処に連れて行かれたのか分からないので平らな石が敷き詰められている廊下を闇雲にひた走る。赤月帝国の王城よりも広大な敷地面積を誇る大聖堂の本拠において、その部屋を

探し当てることが出来たのは奇跡に近かった。
人の気配のする部屋へ飛び込んだ海雲が目にした光景は思い描いていた通りのものだった。いや、現実は予想よりもさらに惨い。その室内にいたのは身なりを正している上層部の者とは思われない貧民達であり、その足下にはぐったりとしたアゼルがうつ伏せに倒れこんでいた。海雲が入ってくるまで暴行を受けていたのだろう、力なく頭を上げたアゼルの顔には裂傷がある。話し合いに赴いたはずのアゼルがどうしてそのような姿になっているのか、経緯を見ていない海雲には知る由もない。だが立場など役割など何も関係なく、海雲は殺してやりたいと思った。
「駄目だ！！」
アゼルの放った叫びがなければ、海雲は室内にいる者を皆殺しにしていただろう。一歩を踏み出す機会は失われてしまったものの憤りは堪えられず、海雲は歯を噛み合わせる。
（どうしてだ！）
何故、どうして殺してはならないのか。殺さなければ殺されてしまうのに、何故。
（死なせる訳には、いかない）
例え一生恨まれることになろうとも、その方がアゼルを失うよりよっぽどましだ。やはり殺さなければならないと思った海雲はすでに握っている短刀に力をこめる。その動作を目にしたからなのか、アゼルは体をふらつかせながら立ち上がった。
「海雲！！」
まるで固着しようとしている蔦のように、走り寄って来るアゼルに魔手が伸びる。その腕を払うために、海雲は走り出そうとした。己の命と引き換えにしてでも護らなければならないと、思ったのだ。だが意思とは裏腹に、海雲はその場に膝をついた。無意識に腹に伸ばした手が、ぬるりとしたものに触れる。
（……アゼル）
声にならない呟きが微かに開いている唇から零れ、海雲はその場

で崩れ落ちた。

血色の和平（１１）

空には厚い雲が垂れ込めており、その夜も深々と雪を降らせていた。雲の先の天空には今宵も紅い光を放つ月が浮かんでいるはずだが、赤月帝国の象徴たる月は戦火を逃れるように姿を眩ませたままだった。住人の消えた街も雪に埋もれたまま、未だ本来の姿を取り戻してはいない。そんな月のない夜、抜け道を使って王城を脱したサイゲートは無言で先を急いでいた。真っ白な衣服を身にまとっている俊足の者に先導されながら目指している先は、白影の里である。どのような理由があって自分がそこへ赴かなければならないのか、サイゲートは知らない。ただ王に行ってくれと頼まれ、それで向かっているだけなのだ。

赤月帝国が大聖堂（ルシード）の侵攻を受け、籠城を始めてからすでに数日が経過している。大聖堂兵は王城を取り囲むように展開しており、城を抜け出すのは非常に危険な行為なのだ。そのような状況において、王が何の理由もなくサイゲートを派遣するなどということは考えられない。そういった事情の下に城を抜け出したのである程度の覚悟はしていたのだが、白影の里に到着してその姿を目の当たりにした時、サイゲートは言葉もなく立ち尽くした。

「……海雲？」

ようやく呟きを零すことが出来たのは、血の気のない顔をして横たわっている海雲を目の当たりにしてからどれくらい後の出来事だっただろう。サイゲートが名を呼んでも、海雲は目を開かない。その姿は死人のようで、サイゲートは顔色を変えながら室内にいた老人に詰め寄った。

「まさか……」

「息は、しています。ですが、危険な状態です」

言葉を詰まらせたサイゲートの意を正しく汲み取り、白髪の老人は淡白な口調で応えた。とりあえず生きてはいることに、サイゲー

トはホッとする。老人に座るよう促されたので、サイゲートは畳に腰を落ち着けながら顔をしかめた。
「どうして、こんなことに？」
室内には老人の他にも数名の姿があったが、誰からも答えは得られなかった。大聖堂の本拠地でいざこざがあり、誰も現場を見ていないのだという。話を聞くことで少し冷静さを取り戻したサイゲートは周囲に視線を走らせ、それから疑問を口にした。
「……アゼルは？」
海雲と一緒にいたずのアゼルの姿が、見えない。それが何を意味するのか、尋ねる前にサイゲートは知っていた。サイゲートの考えを肯定するように、室内にいる者達は一様に目を伏せる。重い眩暈に襲われながら、それでもサイゲートは話を続けようとした。
「くわしく、聞かせて」
おそらくそれが、王がサイゲートを選んで白影の里へやった真意だろう。何が起きたのか推測するためにも具に経緯を聞いておかなければならないと思ったサイゲートは拳を握りながら返答を待つ。室内には重苦しい沈黙が流れていたが、やがて一人の青年が口火を切った。
「同行した者が駆けつけた時には棟梁と首のない遺体が一つの部屋で倒れていたそうです。棟梁は腹部に傷を負っていただけでしたが、残された遺体には激しい裂傷の痕がありました」
「それは、どういうこと？」
「集団で暴行されると、そのような傷跡が残ります。おそらくは首を落とされるまでに、痛めつけられたのでしょう」
「……そう」
「首は見付かりませんでしたが着衣などから遺体は王子であると判断し、里へ運びました。すでに腐敗が始まっていましたので埋葬済みです。全ての墓と言えば王はお解りになるかと」
「それ、オレが行っても平気？」
「ご案内いたしましょう」

主に口を開いていた青年が頷いたので、サイゲートはもう一度海雲に視線を移してから立ち上がった。そのまま海雲の屋敷を後にし、雪を被った森へと足を踏み入れて行く。新雪に足跡を残しながら辿り着いた先は墓と言うには何もない、殺風景な場所だった。

気を利かせて一人にしてくれた青年に無言で感謝を示し、サイゲートはただ雪があるだけの墓に視線を転じた。樹木のある周囲は新雪の白さを際立たせているが、全ての墓は掘り起こされたために一部分だけ土が剥き出しになっている。そこにアゼルがいるのだと思うと、彼の死が実感として胸を貫いた。

（……アゼル、どうしてお前が殺されなきゃならなかったんだよ）

どんな感じで話が進んで、何故こんなことになったのか。サイゲートに、それを知る術はない。海雲がついていながらという思いがないわけでもなかったが、瀕死の彼を見てしまった後だけに責める気持ちも浮かんではこなかった。

サイゲートが知り合った当初から、アゼルという人物は人間（ひと）をこよなく愛していた。人間が内包している闇に触れてしまい一度は失望したものの、旅立つ前の彼は確かに気力を取り戻していたのである。必死で立ち直ろうとしていたアゼルを、海雲は止めることが出来なかったのだろう。証人がいないので真実は闇の中だが、サイゲートはそう思った。

（だけど……許せない）

アゼルと海雲は話し合いのために敵陣へ赴いたのである。和解交渉に対する海雲の複雑な本心を知っているだけに大聖堂ばかりを責めるわけにもいかないが、それでも、命まで奪うことはないではないか。そう思うと、怒りが腹の底から湧いてきた。

「だけど、カタキをとるなんてオレには言えない。きっと、そんなこと望んでないんだろ？　けど、王や海雲との約束はまもる。この国は、オレが守るから」

地中のアゼルに語りかけたサイゲートはいつの間にか頬を伝っていた涙を拭い、怒りや憤りを胸の底に沈めてから全ての墓に背を向

けた。

血色の和平（１２）

白影の里から王城に戻ったサイゲートは、ありのままを王に伝えた。謁見の間で玉座に座っている王は息子の訃報を知り、静かに嘆き、悲しんでいる。肩を落としている王に追い討ちをかけるようなことは言いたくなかったのだが、自身の痛みなど王とは比べ物にならないと思ったサイゲートは間を置かずに言葉を次いだ。

「オレがこんなこと言える立場じゃないですけど、もう城にこもるのはやめましょうよ。このままじゃ、何も解決しない」

一方的に攻撃をされたまま、いつまでも受身ではいられない。侵攻されている理由も不鮮明であり、まして大聖堂（ルシード）は和解交渉の使者まで殺したのだから。このままにしておけば、国が滅んでしまう。アゼルや海雲が護ろうとしたものが、壊れてしまう。

「……分かっている」

王も思いは同じなようで、彼は即座にサイゲートの呼びかけに応えた。王はつい先刻まで辛苦の表情を浮かべていたが、すでに悲しみは拭い去られている。そこまで自分を殺さなければならない『王』という立場に痛みを覚えたサイゲートは、わずかに顔をしかめながら話を続けた。

「アゼルや海雲のようにはいかないかもしれませんが、オレがやります」

「ありがとう。これからも、共にこの国を護ってくれ」

王としての発言をした後、彼は玉座から立ち上がった。国王自ら戦線に赴こうとしていることを察したサイゲートは直立したまま頭を垂れる。だが厳かな空気は、絹を裂くような悲鳴によって打ち破られた。何事かと背後を振り返ったサイゲートの目前で扉が開き、菜の花が謁見の間に駆け込んでくる。

「お父様！！」

目に涙を溜めた菜の花は脇目も振らずに王に走り寄り、そのまま

彼の胸で泣き崩れた。おそらく、彼女がこれほど取り乱した姿を見たのは王も初めてだったのだろう。瞠目しているサイゲート以上に、王は狼狽していた。
「どうしたのだ、菜の花」
「お兄様が、お兄様の首が……」
激しくしゃっくりあげながらも必死で訴えている菜の花の言葉を聞き取り、サイゲートは謁見の間を飛び出した。城内では一般人の進入が制限されている上階でさえ窓という窓に人だかりが出来ている。外を見つめながら放心している人々が退こうとしなかったので、サイゲートは強引に彼らを押し退けた。
「ちょっと、どいて！！」
乱暴に押し退けられても怒ることもなく、人々は呆然としたままでいる。人を掻き分けて窓に辿り着いたサイゲートは、彼らをそうせしめている光景を見た。
王城の周囲には二重に堀が巡らされており、内堀の橋は落とされているので敵は内堀と外堀の間にある中州のような場所に群がっていた。敵の手には生首が握られており、それは見せしめのように高々と掲げられている。敵が城内にいる者に見せようとしているだけに、首だけとなった人物の顔はよく見えた。激しい嫌悪と身震いするような怒りが綯い交ぜになり、サイゲートはきつく拳を握る。
「これでいいのかよ！！」
今までに溜め込んできた怒りが憤りに拍車をかけ、サイゲートは誰にともなく叫んでいた。悔しくて、憎くて、たまらない。そんな想いの丈を、サイゲートは言葉に乗せる。
「王族とかそんなことじゃなく、同じ国に暮らす奴同士だろ！？仲間が殺されて！　死んでからもあんな風にされて！　くやしくないのかよ！！　あんな連中にまた誰かが殺されて家を焼かれるのが平気なのか！？　それでいいのか！！」
心の底から、サイゲートは叫んでいた。しかし言葉を途切れさせたサイゲートが肩で荒い息をしていても、城内は静まりかえってい

る。これだけ声を大にしても駄目なのであれば見切りをつけるより他ないと、サイゲートは唇を噛んで顔を上げた。
（王に……）
何をするにしても王の許可が必要だと思ったサイゲートは急いで踵を返す。すると背後から、誰かの声が上がった。
「サイゲート様」
サイゲートが振り向くと、そこにはアゼルの私兵達の姿があった。あの時生き残った全員が廊下に並んでいて、サイゲートに敬礼を向ける。全員、涙で頬を濡らしていた。彼らの想いを受け止めたサイゲートは力強く頷いて見せる。
「王に許しをもらってこよう。あいつらを追い払ってアゼルを取り返す」
「もちろんです。我々は、サイゲート様に従います」
志を同じくする者達が賛同を見せたので、サイゲートは再度踵を返した。今度こそ謁見の間に戻ろうとしたのだが、再び背後から声が上がる。
「お、オレも連れてってくれ！」
振り向いたサイゲート達が目にした声の主は、一般人と思われる若い男だった。階段のすぐ側で声を張り上げた彼は、避難所となっている一階の広間から上がって来たのだろう。城内全体があ然としている状態では警備が疎かになるのも自然なことである。しかし男は、威勢の良い口調とは裏腹に目に見えるほど震えていた。それでも彼は、笑っている膝を実際に叩きながら言葉を次ぐ。
「お、王子に世話になったことがあるんだ。借りは、返さないと」
「……俺もだ」
「……あんたの言う通りだ。これ以上、生活を奪われてたまるか」
初めにサイゲート達を呼び止めた男に続き、階段から姿を現した者達が次々と声を上げる。それは潮流となり、いつの間にかサイゲート達は国民が作り出している輪の中にいた。
「よし！　みんなで赤月帝国を守ろう！」

自身が命を失うかもしれないという恐怖から一歩を踏み出してくれた人々の勇気に感謝しながら、サイゲートは声を張る。サイゲートの呼びかけには、閧の声が応えた。

下ろしている瞼の裏で、淡い輝きが揺れていた。よく知っているその仄かな輝きは、蝋の灯火だ。嗅覚が感じているのは独特の青い匂い。それは他では味わうことの出来ない、自宅の気配だった。

「……帰って来たのか」

自身の呟きが聞こえて、海雲は目を開けた。視界には高い天井が広がっていて、見慣れた梁が瞳に映っている。

「気が付かれましたか」

傍で誰かの声がしたので海雲は首だけを横に傾けた。枕元に白髪の老人が座している。柔和な顔をしている彼は先代の頃より白影の里で医療班に身を置いている熟練の者だった。

「担ぎ込まれてから三日ほど、生死の境を彷徨っておられました」

「……そうか」

「痛みはありませんか？」

「ああ。大丈夫なようだ」

いつまでも里の者に醜態を晒しておくわけにもいかないので海雲は体を起こすことを試みた。だが上半身を起こした刹那、視界が渦を巻くような眩暈に襲われて再び床に倒れる。固く目を閉ざした海雲が吐気と闘っていると老人がしれっとした口調で言葉を紡いだ。

「血液が足りませんので、起き上がると貧血を起こしますよ」

「……そういう事は先に言え」
「すみません。どうせ言っても聞かないでしょうから」
「嫌な奴だ……」
頭痛までしてきたので海雲は息を吐いて口を閉ざした。老人も沈黙したので、静寂が訪れる。
（静かだ）
何もかも、この静けさに消えてしまえばいい。投げやりではなく本気で、海雲はそう思った。だがそうそう都合が良いことはなく、老人が再び口火を切る。
「何も、訊かれないのですね」
「……何を訊けと言うんだ？」
「王子がどうされたか、知っていますか？」
「ああ。見て、いたからな」
口調は平静であっても海雲の胸には波風が立っていた。斬首することは、無駄な苦痛を与えないためにも有効な手段である。だがそれは一瞬のうちに首が飛ばされることを前提としている。平素は武器など扱わない不慣れな手つきの者達に生きながら首を落とされるのは、どれだけの苦痛を伴ったことだろう。いっそ自らの手で命を断ってやることが出来ればそれほどの苦しみはなかったというのに、海雲は見ていることしか出来なかったのだ。
「では、街の様子はどうですか？」
海雲が本当は平静などではないことを察したのか、老人はさっさと話題を変えた。白影の里の者にとって死は珍しいことでもないが、老人の反応はいささか淡白である。しかし老人の方が正しいと思い、海雲は嘆息しながら答えを口にした。
「いくらなんでも攻め込む準備くらいはしているだろう」
「棟梁が使者に立たれてから、流民達が再び攻め込んで参りました。王は攻め込まれた理由も解らず使者が敵地へ赴いている状態では戦うことが出来ないと、籠城を決意されたのです」
「……それは本当か？」

予想だにしなかった老人の発言に驚き、海雲は老人に顔を戻した。枕元から海雲を見下ろしている老人は表情を変えることもなく頷く。
「我が白影の里も棟梁不在でしたので、王のご指示に従いました」
「それで、今も続いているのか？」
「いえ」
「現状はどうなっている？」
「アゼル様のご遺体は全ての墓に埋葬しました。同行した者の話ですと、首はどうしても見付からなかったそうです。棟梁がお帰りになられてから、流民達がその首を手に挑発してきました」
布団に横たわったまま、海雲は拳を握り締めた。海雲の体に必要以上の力がこめられているのを見て、老人は気遣わしげな眼差しになる。
「あまり、感情的になられますな。回復が遅れます」
「いい。話を続けろ」
「……はい。王は、戦う決意をなさいました。現在は里の者も、ほとんど出払っております」
「指揮は王が？」
「はい。戦闘はほぼ終了したようで、現在は残党狩りが行われています」
「首は、どうした？」
「民が取り返しました。個人的には胴体と別の場所に埋葬するのもどうかと思いますが、誰もがいつでも参拝出来るようにと、王城に」
「民が……？」
「後は、ご自身の目でご覧になった方がよろしいでしょう」
「……わかった。城と往復出来るだけでいい、薬をくれ」
「調合いたしましょう」
その場でやるらしく、老人は背に隠していた薬研を取り出した。首が疲れたので、海雲は天井の梁に向かって顔を据える。会話の途絶えた室内には老人が薬草をすり潰すゴリゴリという音だけが聞こえていた。

「目覚めるとは思っていましたが、実は少し心配しておりました」
「……何がだ？」
「海雲様では、なくなってしまうのではないかと」
白影の里の者は皆、海雲を棟梁と呼ぶ。老人がわざわざ名で呼んだのは意味を含ませたかったからだ。彼の真意をしっかりと理解してしまった海雲は何事も深読みしてしまう自身の性格を呪いたい気分になりながら話に付き合った。
「目覚めない方が良かったのかもしれないな。壊してしまった方が楽だったとも思う。だが先代や王、友人達との約束がある。まだ死ぬ訳にはいかないさ」
「それでこそ我らの棟梁です」
彼が求めている通りの答えを口にしただけあって、老人は上機嫌な笑みを浮かべた。梁を見つめている海雲には老人の顔色を窺うことは出来ないが、長い付き合いなので想像するのは容易である。老人の立てる音が軽快なものだったので、海雲は息を吐きながら瞼を下ろした。

血色の和平（13）

残党狩りが終わると赤月帝国内から大聖堂軍の姿が消え去った。戦に出ていた男達が戻って来たことで避難命令も解除され、街には少しずつ人が戻り始めている。非力と思われていた国民が自ら戦闘に参加した意味は大きく、人々の顔には戦の爪痕に負けないくらいの気力が漲っていた。どんなに苦しいことでも力を合わせれば乗り切ることが出来る。やろうとさえ思えば出来ないことなどないのだ。そして一人一人が戦う意味を知っていれば、赤月帝国は流民達にようにはならないだろう。勝ち戦を終えて王城に帰還した時、サイゲートは改めてそう感じていた。

戦の指揮は執っていたものの残党狩りには参加しなかった王は一足先に城へ戻っており、サイゲートは指揮を任されてからの出来事を具に報告した。サイゲートの話が一段落すると、王は菜の花の話題を切り出したのである。あの快活だった菜の花が塞ぎこんで口もきかないのだと聞き、サイゲートはすぐさま彼女の私室を訪れることにした。王に退出を告げて謁見の間を後にしたサイゲートは階段を上り、王城の四階を目指す。上階へ行くほど静かな城内には、すでに菜の花の悲しみが漂っているような気がした。

「……姫」

呼びかけながら扉を叩いても反応はない。いないのかもしれないとも思ったが、サイゲートは一応確認しておくことにした。

「姫、入りますよ」

返事を待たずに扉を開けると菜の花の姿は窓辺にあった。その場所に置かれている椅子に腰を落ち着けている彼女の膝上には開かれた本が置かれていたが、菜の花の視線は窓の外に向けられている。しかし景色を見ている風でもなく、その双眸は虚ろに開いているだけだった。

「風邪を、ひきますよ」

薄着でいる菜の花に、サイゲートは手近にあった上着をかけてやる。それでようやく、彼女はサイゲートがいることに気が付いたようだった。

「……サイゲート、」

サイゲートの姿を認めた途端、可憐な顔が歪む。菜の花の頬には何度も泣いた跡が見えた。

「お兄様が……」

涙声で言葉を詰まらせた菜の花を、サイゲートは優しく抱きとめた。サイゲートの腕の中に収まった菜の花は声を押し殺して泣いている。少しずつ力が抜けていく華奢な体が折れないように支えながら、サイゲートは空を仰いだ。掛けてやりたい言葉は山ほどあったが、今の彼女には何を言っても無駄だろう。

（それはまた、いつか言えばいい）

アゼルの大切にしていたものは、自分が護る。胸中で密かな誓いを立てたサイゲートは泣き疲れて寝入ってしまった菜の花を抱え上げ、そっと寝台に横たわらせた。

白影の里において医療に長けている老人に薬を調合してもらった後、海雲は両脇を里の者に抱えられるという無様な姿で王城へ出向いた。そうしなければ歩くことも出来ないほど、海雲の体は消耗していたのである。謁見の間に現れた王は海雲の姿を見て驚いたようだったが、それも一瞬のことだった。無表情に戻った王が玉座に腰を落ち着けたのを見て、里の者を下がらせた海雲は崩れ落ちる形で頭を床にこすりつける。

「申し訳、ございません」

言葉でいくら謝罪をしても、決して許されない。そのことが解っていても、海雲にはそうすることしか出来なかった。海雲がいつまで経っても頭を上げようとしないので王は嘆息する。
「頭を上げよ」
「合わせる顔が、ございません」
「何も聞かずとも解る。アゼルはそういう人間だったのだ」
何事もなく敵に急襲されただけであれば、二人とも無事に帰還したはずである。海雲に絶対の信頼をおいているのか、王の口調はそう言いたげだった。だが今となってはその信頼が重く、海雲はますます顔を上げられなくなってしまった。
アゼルはそういう人間だった。断定的にそう言ってのけた王は、息子の気性を承知していただろう。王自身、アゼルと同じ種類の人間なのだから尚更だ。だが、止めなければならなかった。その責任が、海雲には確かにあったのだから。
「……私はな、」
席を立ちながら言葉を紡いだ王は頭を上げようとしない海雲の傍らにしゃがみこみ、それから続きを口にした。
「幸せではなかったのかと思うのだよ、海雲。結果はこういうことになってしまったが、アゼルは自らの信念を貫き通したのだろう？
それに、王になってもアゼルは幸せではなかっただろう」
「そのようなことを、おっしゃらないで下さい。何が幸せであるかを決める本人を、殺してしまったのですから」
「見殺しにしたと思っているのか？　それは違う。そなたにも、解っているはずだ」
強い口調で諭され、海雲は閉口するより他なかった。いつまでも目を合わせようとしない海雲に顔を上げるよう命じ、王は海雲の瞳を見つめながら言葉を次ぐ。
「親として、友として、悲しみは尽きない。憎しみもある。だが私はこの国の王であり、そなたはこの国の軍隊の棟梁なのだ。己を見失い、身勝手に生きることは許されない」

「……はい」
「王位継承者がいなくなってしまった以上、今まで通り私が玉座に座る。そなたには補佐してもらわなければならん」
「……承知致しております。命ある限り、赤月帝国に忠誠を」
「それでいい」
臣下としての海雲と話を終えた王は毅然とした態度で玉座へと戻って行った。王が腰を落ち着けたことを確認してから、海雲は何とか立ち上がる。
「……菜の花には可哀相なことをした」
思わずといった風に零された王の独白は、兄を失った悲しみに暮れる娘に対する憐憫だけではなく様々な意味合いを含んでいた。その意味を知りながら、海雲は聞かなかったことにして深く頭を垂れた。

血色の和平（１４）

初めて攻めに転じた赤月帝国が国内から敵を追い払った後も、大聖堂（シード）軍は相変わらずかげろうの森の外に展開していた。だが前回の衝突がよほど堪えたのか、彼らはそこから先へは足を踏み入れようとしない。会戦当初と何も変わらない現状は長期戦の様相を呈していたが、それでも赤月帝国の城下街（ル）には活気が戻っていた。

勝ち戦の後、多くの国民と同じようにサイゲートも元の暮らしに戻っていた。だがしばらくは敵に蹂躙された街を復興させることが最優先であり、本業はおあずけである。そういうわけで、サイゲートは一日中街を駆けずり回るようにして復興に助力していた。そんな彼が忙しい合間を縫って白影の里を訪れたのは、海雲が回復したという話を耳にしたからである。サイゲートが訪れたとき白影の里はまだ臨戦体勢のままだったが、警戒が厳しいわりに里は静まり返っていた。復興に奔走する人々が忙しなく行き交う街とは違い、白影の里では屋外で人の姿を見かけることはあまりない。しかしそれは初めてこの場所へ足を踏み入れた時からのことであり、サイゲートは静けさを厭うことなく海雲の屋敷へと歩を進めた。

護衛も監視も伴わずに海雲の屋敷を訪れたサイゲートは、そのまま彼の私室を目指した。屋敷の中も、奥まった場所にある海雲の私室も、里と同じく静まり返っている。サイゲートが控えめに声をかけながら襖を開けると、海雲はまだ床に就いたままでいた。しかし眠っているわけではなく、彼はサイゲートを見上げている。

「懐かしい顔だな」

サイゲートの姿を見るなり、海雲はそんな言葉を零した。まだ血の気が戻っていない彼の顔は、相変わらず白い。サイゲートは枕元に腰を下ろしながら頷いて見せた。

「オレもそう思う」

実際、別人かと思うほど海雲の顔は変わってしまっていた。やつ

れて、一気に歳をとってしまったようだ。だが痛々しいという顔はしたくなかったので、サイゲートは平素と同じ調子で言葉を紡ぐ。
「元気になったって聞いたんだけど、まだそんなに良くないのか？」
「痛みはしないんだ。ただ、血が足りない」
「分けてやろうか？」
「遠慮しとく。スグスネル病を伝染（うつ）されたらたまらん」
「スグスネル病？」
「すぐ、拗ねるだろ？」
「……それだけ元気なら大丈夫だな」
　床上にありながらも海雲の悪態が健在だったのでサイゲートは呆れた顔をした。サイゲートにそういう表情をさせることが目的だったのか、海雲は低い笑い声を漏らしている。海雲の反応を見たサイゲートも苦笑を零したが、それ以上は会話が続かなかった。お互いに黙り込んでしまったので室内には沈黙が流れる。
「言わないんだな」
　しばらくの後、サイゲートが触れられなかった話題に海雲が口火を切った。サイゲートは嘆息し、小さく肩を竦める。それは、束の間でも平穏を手に入れてしまうと考えないわけにはいかないものである。忙しなく動き回っているサイゲートよりも海雲の方が顕著なのだろうが、どうしようもないことだった。
「言っても、仕方ない」
　大聖堂の本拠地で何があったのかサイゲートには知る由もないが、海雲はアゼルが生還出来なかったことに責任を感じている。しかし誰も、海雲を責められないのだ。サイゲートがそうであるように、おそらくは王も彼を責めなかったのだろう。責められた方が楽だろうとサイゲートが考える以上に、海雲は苦しんでいるに違いない。
「元気になったら、またケンカしよう」
　サイゲートには稚拙な冗談を言うことくらいしか出来なかったが、海雲は少しだけ笑ってくれた。横たわっているせいかその微笑みは弱々しいものだったが、彼はいずれ蘇るだろう。先立ったアゼルの

分まで王の佑けにならなければと、考えているはずだからだ。
「もう、帰るのか？」
サイゲートが立ち上がったのを見て海雲は上体を起こしながら尋ねてきた。無理をしないよう釘を刺してからサイゲートは頷く。
「壊された家を直さないと。それに見回りや、子守なんてのも押し付けられてる。いそがしいんだよ」
「……それは難儀だな」
「早く元気になって手伝ってくれよな」
サイゲートがわざとらしく作った満面の笑みで言うと海雲は嫌そうな顔をした。子守はちょっとなどとぼやいているので、サイゲートは声を立てて笑う。苦笑いをするしかないといった風の海雲にもう一度だけ釘を刺してから、サイゲートは別れを告げた。
短い滞在時間で海雲の家を後にしたサイゲートはそのまま、街へ戻るために彼岸の森へと向かった。白影の里の周囲に広がる彼岸の森はかげろうの森の一部だが、人為的に侵入者を遠ざけているので通常の森とは一線を画すために別称が用いられている。だが足しげく白影の里へ通ううち、サイゲートは何となく罠を回避する術を身につけてしまっていた。だから労せずに、彼は彼岸の森を抜けられるのである。
サイゲートがその異変に気が付いたのは、白影の里からの帰り道だった。どこかから、強烈な異臭が漂ってきている。あまりの臭いに鼻をつままずにはいられず、サイゲートは足を止めて顔をしかめた。
（なんだ？）
気分が悪くなるほどの異臭は森で食い散らかされた動物の死体を目の当たりにした時のような感じだが、それよりも遥かに強い。そしてまだ雪融けすら始まっていない冬の森で、そのような腐臭に出くわすことは異常である。胸騒ぎを感じたサイゲートは腐臭の原因を突き止めようと思い、森の中を彷徨ってみた。そうして目にした光景に、サイゲートは鼻をつまむのも忘れてあ然とする。冬でも凍

ることのない川沿いに、動物の死骸が群れを成していたのだ。
（何が……）
もがき苦しんだ跡のある動物の死骸から視線を移し、サイゲートはハッとした。最悪なことに、ここは川べりなのである。もしも、水を飲んだ動物が死んだのだとすれば……。
（確かめないと）
後先を考えるほどの余裕はなく、動物の死体を踏み台にして川へ寄ったサイゲートは水をすくってみた。手が痺れるほどに冷たい水は無色透明であり、それ自体には変化は見られない。憶測が事実であると確かめるには実際に水を含んでみるより他なく、サイゲートは躊躇しながらもすくった水を飲み下した。
川の水が体内に入ってからしばらくは、何事もなかった。だが次第に吐き気がこみあげてきて口元を手で覆う。霞み始めた視界を定めようと頭を振り、腹の底からこみ上げる嘔吐の衝動と闘いながら、サイゲートは急いで元来た道を引き返したのだった。

「倒れた？」
ついさっき帰ったはずのサイゲートが戻って来たという報せがもたらされ、海雲は眉をひそめた。しかもサイゲートは、里へ着くなり倒れこんだのだという。そんな話を耳にしてしまえば寝ているわけにもいかず、海雲は寝所を抜け出して表の方へと向かった。
白影の里の外れで倒れたサイゲートはすぐさま、海雲の屋敷へと連れられて来ていた。屋敷の出入り口に近い客間では医療班に所属する者達の姿があり、サイゲートを介抱しているようである。海雲は膝立ちになっている医療班の上からサイゲートの様子を覗き込ん

だ。
「意識はあるのか？」
医療班にそう声をかけたものの、海雲は返答を待たずに答えを得てしまった。仰向けに倒れているサイゲートは全身を痙攣させており、その症状が何を意味するのか彼は知っていたのである。
（毒、か）
海雲は以前、サイゲートに即効性の毒が入った小瓶を手渡した。その小瓶を干さずに少し含んだくらいがサイゲートの症状に当てはまるのだが、彼が自ら毒を含んだとは思えない。そんなことをする理由がないからだ。ならば何故、サイゲートがこんな状態に陥っているのか。そう考えた時、海雲は嫌な予感が押し寄せてくるのを感じた。
「み……」
体を痙攣させているサイゲートは必死で言葉を紡ごうとしていたが、舌が痺れてしまっているのか聞き取り辛かった。また声もあまり出ていなかったので、海雲はサイゲートの口元に耳を寄せる。そしてようやく、『水』という単語を拾った。
「……み……か、わ……」
サイゲートが水を欲していると思った海雲は医療班の意見を聞こうとしたのだが、彼が再び紡ぎ出した言葉で本当に伝えたかったことを理解した。『みず』と『かわ』。この二つの単語とサイゲートの状態を合わせて考えると、最悪の事態が形になっていく。
「里の者を集めろ。水源が、やられた」
体調不良とは別に精神的な衝撃からくる眩暈に悩まされながら、海雲は立ち上がった。サイゲートを医療班に託し、自身は配下への指示に走る。そうして、もたらされた情報に誤りがないことを確認してから、海雲は王城へと急いだのだった。
赤月帝国唯一の水源が毒に侵された。サイゲートが身を挺して白影の里へ持ち込んだその情報は、夥しい数の動物の死骸と街に溢れる重病人によって証明された。どの地点で毒が混入されたのかは分

からないが、こうなってくると街全体に堀を巡らせたことが裏目に出たと言う他ない。消火と防護のための堀が、結果的に被害を拡大させてしまったからだ。

（ここまで、するのか）

今まで感じたことがない恐怖を覚え、海雲は青褪めずにはいられなかった。謁見の間にて対面した王も同じ気持ちのようで、顔色が悪い。水源に毒を混入するという卑劣な手段は、例え人間が住めなくなったとしても赤月帝国を手に入れるという大聖堂（ルシード）の意思表示だ。ここで何とか抵抗しても、次はもっとえげつないことをされるかもしれない。

「……海雲よ」

「何も、思い浮かびません」

口火を切った王の言葉を遮り、海雲は力なく首を振った。このまま戦い続けることを選択すれば多くの人が死に、この地も死ぬ。どう考えてみても、もう無理だった。

「彼等の出す条件を全面的に呑む。それで、良いな？」

「……はい」

「……結局、護りきれなかったのだな」

独白を零して王は天を仰ぐ。長期化すると思われていた赤月帝国と大聖堂の戦争は、その瞬間に幕を下ろしたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7785f/

月に喘ぐ

2011年1月31日01時07分発行